

博多 15

博多遺跡群第40次調査の概要
福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集



1990

福岡市教育委員会

博多 15

福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集



1990

福岡市教育委員会



染付大皿



染付皿



染付皿



染付皿



染付壺



左より褐釉陶器壺, 備前焼壺, 黒褐釉陶器壺

4号土壙出土陶磁器 2

序

福岡市の都心部として高層ビルの立ちならぶJR博多駅北側の一带は、古代以来大陸との貿易拠点として栄えた中世都市「博多」の跡にあたります。

近年、都心部の再開発に伴ない、60次を越える発掘調査が実施されています。本書はその第40次調査の概要を報告するものです。

第40次調査においては14世紀から16世紀まで継続した道路が検出されました。また、15世紀の沖縄で作られた銅錢「金圓世寶」が出土し、対琉球貿易を直接に物語る遺物として注目されます。

本書が市民の皆さまの文化財に対するご理解を深めると共に、学術研究の分野でも広く貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまでの費用負担、便宜をご快諾いただいた富国生命・清水建設および、多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表わすものです。

平成2年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例言・凡例

1. 本書は、ビル建設に先立ち福岡市教育委員会が調査を実施した、博多遺跡群第40次調査（博多区、呉服町251他）の概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、大庭康時が行なった。また、出土人骨についての所見は、九州大学医学部中橋孝博氏に執筆をお願いした。
3. 本書に使用した遺構実測図は、大庭・山口満・馬瀬直子が、遺物実測図は、大庭・森本朝子が作成した。また、整図には、大庭・山口・田川明美・森本・小金丸昌世・井上涼子が分担してあたった。
4. 本書に使用した遺構写真は、大庭が撮影した。また、遺物写真は、大庭が撮影し、萩尾朱美が焼付した。
5. 遺物の整理には、生垣綾子・保利みや子・古谷宏子・村田喜代美・井上恵子・伊藤浩美・尾上城由江・加藤由紀・楠葉恭子・早川真奈美・古谷祥子・前田優子・野尻スズ子・森本・山口・萩尾があたった。また、銅鏡の鋸落し、解説・集計・拓本には、馬瀬直子があたった。
6. 本書に使用した方位は、すべて磁北である。
7. 遺構番号は、遺構をその形状から土壤・井戸・溝・柱穴・集石にわけ、それぞれに付けた。なお、発掘調査時には、検出した順に通し番号をつけた。出土遺物の注記・発掘調査の記録類は、すべてこの通し番号によっている。本書では、遺構番号の後に括弧書きで、この通し番号を示した。例：4号土壤（0022）
8. 本書に示した遺物は、遺構ごとに通し番号とした。
9. 本調査に関するすべての記録類・出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理される予定である。

遺跡調査番号	8833		遺跡略号	HKT40	
調査地地番	博多区呉服町251他		分布地図番号	天神49	
開発面積	1,386m ²	調査対象面積	565m ²	調査実施面積	565m ²
調査期間	1988年9月1日～12月1日				

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 調査地点の位置と環境	2
第二章 発掘調査の記録	
1. 発掘調査の経過と概要	5
2. 層序について	7
3. 第1面の調査	10
(1) 第1面道路	12
5号溝	12
6号溝・7号溝	12
(2) 建物遺構	17
1号礫石建物	17
3号集石遺構	17
(3) 方形石組土壤	19
35号土壤	19
39号土壤	19
(4) 土壌	24
4号上壌	24
21号土壤	49
44号土壤	50
4. 第2面の調査	52
(1) 第2面道路	54
10号溝	54
11号溝	59
12号溝	59
13号溝	66
(2) 建物遺構	68
(3) 土壌	70
87号土壤	70
88号上壌	71
5. 第3面の調査	72
(1) 第3面道路	74
20号溝	74
21号溝	82

22号溝	88
(2) 排水溝	
14号溝	97
16号溝	97
17号溝	97
18号溝	97
(3) 建物遺構	
9号集石遺構	102
(4) 土壙	
63号土壙・64号土壙	104
66号土壙	108
6. 第4面の調査	110
(1) 溝遺構	
23号溝	112
24号溝	115
(2) その他の遺構	
508号遺構	118
7. トレンチ1の調査	119
509号遺構	119
510号遺構	122
8. その他の出土遺物	125
(1) 土器, 陶磁器, 石製品	125
(2) 銅錢	128
第三章 小結	134
付篇	博多遺跡群40次調査出土の中世人骨について
	九州大学医学部解剖学第2講座 中橋孝博
	137

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

1988年2月18日、富国生命株式会社より福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区呉服町251外（現在の住居表示では店屋町8）について、埋蔵文化財事前調査願が提出された。同地は、福岡市教育委員会が博多遺跡群として周知している範囲のほぼ中央にあたり、これまでの周辺の調査からも遺構・遺物の存在が十分に予想された。そこで、埋蔵文化財課では、試掘調査による判断を必要とした。試掘調査は、開発事前審査担当の米倉秀紀（埋蔵文化財第2係）によって、1988年4月30日に実施され、現地表面から3m以上におよぶ包含層の遺存が確認された。この結果を受けて、埋蔵文化財課は全面発掘が必要と判断し、申請者である富国生命株式会社、建設業者である清水建設株式会社との協議にはいった。

協議の結果、建物建設予定部分のみの調査となり、また既存の建物の基礎杭等で調査不可能な部分を除いて、申請面積1,386m²内の565m²について、発掘調査を行なうことになった。

発掘調査は、清水建設による矢板打込、表土すき取り（現地表面マイナス1.7m）その他条件整備の終了後、1988年9月1日より同年12月1日までの3ヵ月間にわたって実施された。発掘調査担当は、1988年5月より同じく博多区店屋町で博多遺跡群第39次調査にはいっていた大庭康時が、39次調査終了後これにあたることになった。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	富国生命株式会社				
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎				
調査総括	埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第2係長 飛高憲雄				
調査庶務	埋蔵文化財第1係 松延好文				
調査担当	埋蔵文化財第2係 大庭康時				
調査作業	山口満 岩隈史郎 熊本義徳 権藤利雄 関義穂 高浪信夫 森山恭助 山崎光一 岩本朝子 江越初代 衛藤富子 近藤澄江 関加代子 曽根崎昭子 濱地フサエ 村崎祐子 村田敬子 森山タツエ 柳瀬伸 前田直子				
室内作業	井上房子 山崎つぎえ 熊琳				

その他、発掘調査に関する種々の条件整備・調査中の廃土搬出等の便宜については、清水建設株式会社の御協力をいただいた。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群とは、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらには近代・現代へとつながる複合遺跡である。地理的には、福岡平野の博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開墾された石堂川、南は石堂川開墾以前に那珂川に向って西流していた旧比恵川によって画される。

博多遺跡群においては、1977年の高速鉄道（地下鉄）祇園町工区の調査を嚆矢とし、一連の地下鉄関係調査、都市計画道路博多駅築港線拡幅関係調査および、60次をこえる民間関係調査が行なわれている。その結果、弥生時代中期前半には、砂丘上に堅穴住居址・甕棺墓などを営んでいたことが、明らかとなった。古墳時代では、堅穴住居址・方形周溝墓などが調査されているが、博多遺跡群第28次調査において砂丘上に前方後円墳を築いていたことが判明した。

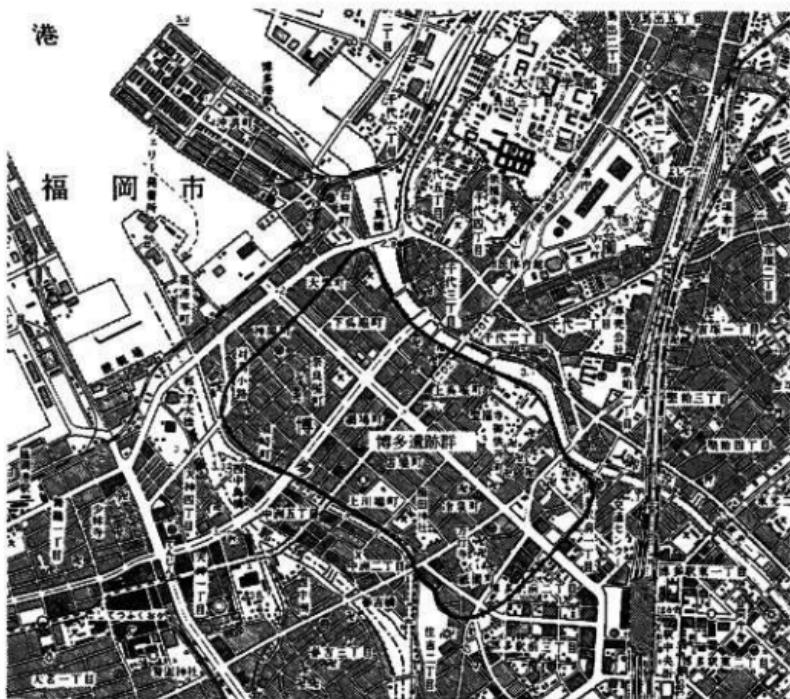


Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)

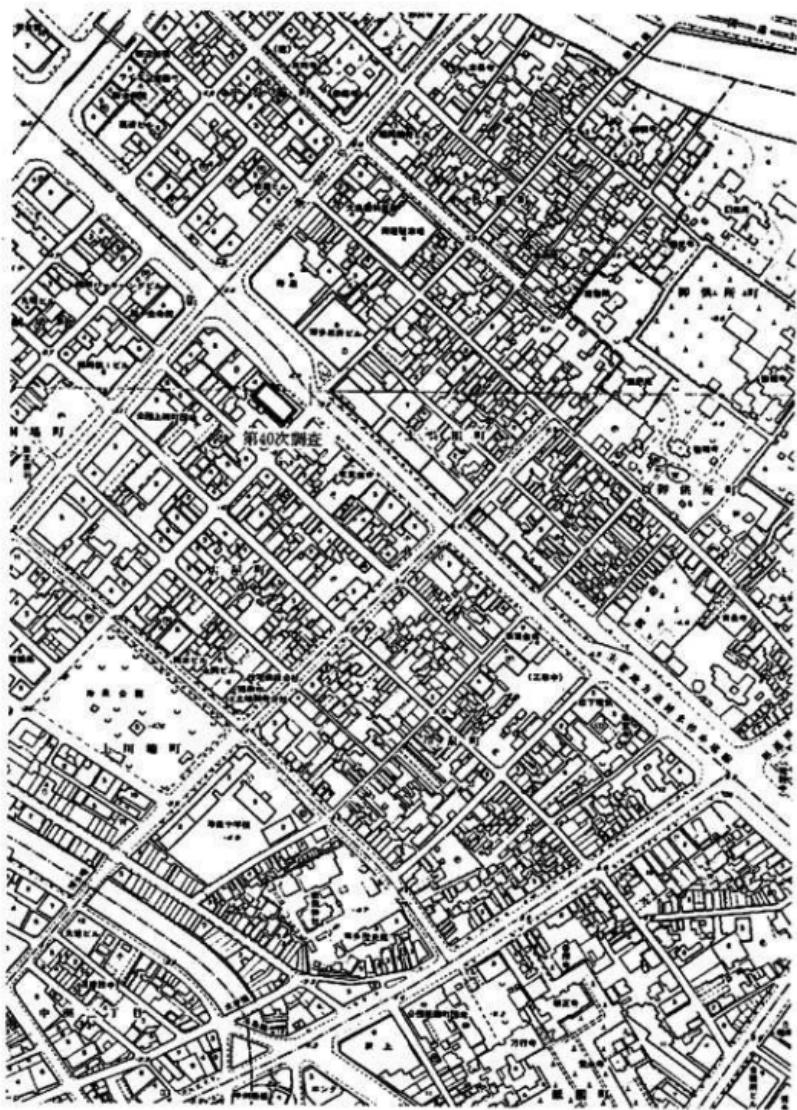


Fig. 2 第40次調查地點位置圖 (1/5,000)

歴史時代にはいると、博多は対外貿易の拠点として独自の発展をとげることとなる。688年を文献上の初見とする氣紫館、842年以降その名が見える大宰府鴻臚館は、博多遺跡群から入海ひとつを隔てた丘陵上に設けられたものであった。これら迎賓館としての施設が置かれて、博多湾が大宰府の外港として位置付けられたことは、その後の博多の発展を考える上で重要である。これまでの発掘調査において、銅鑄幣・石蒂・円面鏡・風字鏡・皇朝錢・鴻臚館式瓦・老司式瓦・綠釉陶器・墨書須恵器など律令官人の存在を示す遺物が出土するとともに、少なからざる量の越州窯系青磁・長沙窯系陶器・邢窑系白磁も出土しており、博多もまた鴻臚館とならんで交易の場となっていたことを思わせる。909年の交易唐物使派遣の停止は、京都の中央政府が貿易の直接的掌握を放棄したことであり、形式的には大宰府を通じて貿易を管理するというものの、私貿易への動きを促すものとなった。こうした中で、博多は対宋貿易の中心となり、宋商人たちの博多居留がみられる様になるのである。これら在博多宋商人のもとで、中世貿易都市「博多」は誕生する。1151年、大宰府による博多・宮崎の大追捕が行なわれた。この際、千六百家の資財が大宰府によって押収されており、博多から宮崎にかけてかなりな街が形成されていたことを示している。博多遺跡群の発掘調査によって最も普遍的かつ大量に出土するのは、11世紀後半から13世紀前半にかかる時期の遺構・遺物である。中国陶磁器の占める比率が最も高いのもこの時期であり、宋商人居留のもとでの博多の繁栄を物語っている。

鎌倉時代、2度にわたる元寇で、博多近辺は戦場となる。また、これに関連して、鎌倉幕府は宋人の渡航・居住を禁止する。しかし、この時点までには婚姻等を通じて宋商人の和人への同化は進んでおり、これによって博多が打撃を受けることは少なかったであろう。13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、貿易の中心地のみでなく、九州の政治的中心という側面を持つにいたる。

室町時代にはいって九州探題がおかれたが、その後筑前の小氏氏、豊後の太友氏、周防の大内氏らによる争奪の対象となった。戦国時代には度々兵火にかかり、1586年島津氏の焼き打ちにより灰燼に帰す。九州平定をとげた豊臣秀吉は、朝鮮出兵の兵站基地としての必要性もあり、博多の再興をする。しかし、江戸時代にはいり、鎖国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろしたのである。

この様な歴史を持つ博多遺跡群は、極めて重層的な複合遺跡である。最下層を形成する砂丘の砂層の上に、浅い所で1m、深い所では5m以上におよぶ包含層が堆積している。今回調査した第40次調査地点は、博多遺跡群のほぼ中央に位置している。博多遺跡群は、博多湾に向って並列する3列の砂丘からなるが、その中央の砂丘の北辺にあたる。周辺の調査から、砂丘が急な傾斜で落ち込む地点であると予想され、鎌倉時代以降その名が見られる様になる「息浜」(博多湾側砂丘)への博多の都市域の拡大を考える上で重要な場所である。

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の経過と概要

発掘調査は、1988年9月1日に着手し、同年12月1日に終了した。ただし、9月2日より9月6日までは、清水建設による表土層除去が行なわれており、実際に発掘調査作業に取りかかったのは、9月7日からである。

表土除去は、重機で現地表下約1.7mまで一率に剥ぎ取った。試掘調査によって確認された焼土層の下面にあわせている。

表土除去後の段階で、調査区北辺から約6m程内側に、コンクリートの建物基礎杭が、1.8m間隔で横一列に並んでいるのがみとめられた。また、調査区北辺の2m程内側にもコンクリート杭列が並んでいた。その為、この問について実質的に調査不可能と判断し、土層観察用のトレンチを入れることとして、調査範囲から除外した。

発掘調査は、第1面調査終了後に設定したトレンチ1・トレンチ3の観察から、さらに2面

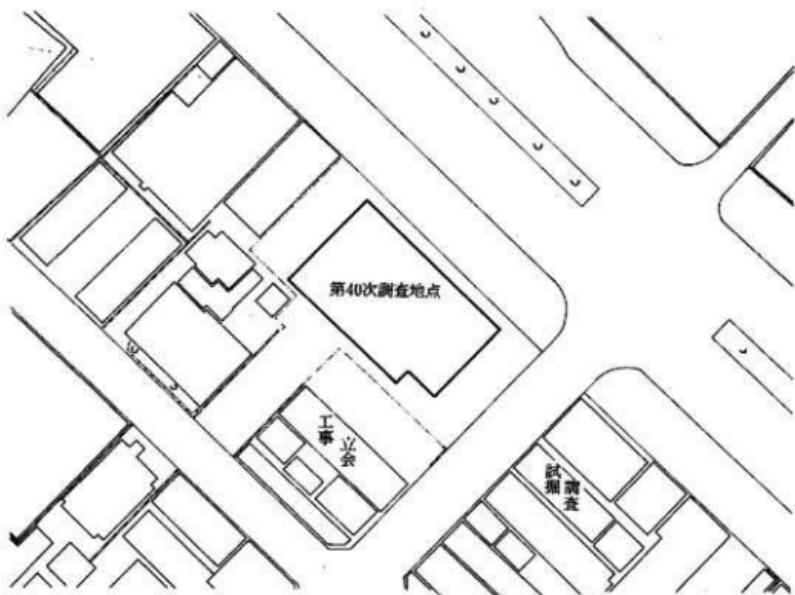


Fig. 3 第40次調査地点周辺測量図 (1/500)

の調査が必要であると考えた。ところが、第3面終了段階で歟目押しのために設定したトレンチ10において遺構が検出され、調査区南半分については、第4面まで調査を行なった。なお、今回の第40次調査においては、一回の掘り下げが50~60cmの深さとなったため、調査期間とのかねあいから、重機により掘り下げを行なった。

調査の経過は、以下の通りである。

- | | |
|--------------|---------------------------|
| 8月31日 | 博多遺跡群第39次調査事務所より移る。 |
| 9月2日~6日 | 清水建設により表土除去 |
| 9月7日~27日 | 第1面調査 |
| 9月27日 | トレンチ1~3設定、トレンチ1より網代の一部を検出 |
| 9月28日~10月4日 | 掘り下げ |
| 10月4日~29日 | 第2面調査 |
| 10月31日 | トレンチ6設定 |
| 10月31日~11月4日 | 掘り下げ |
| 11月2日~23日 | 第3面調査 |
| 11月24日 | トレンチ1延長、トレンチ10・11設定 |
| 11月25日 | トレンチ12設定 |
| 11月25日~26日 | 掘り下げ |

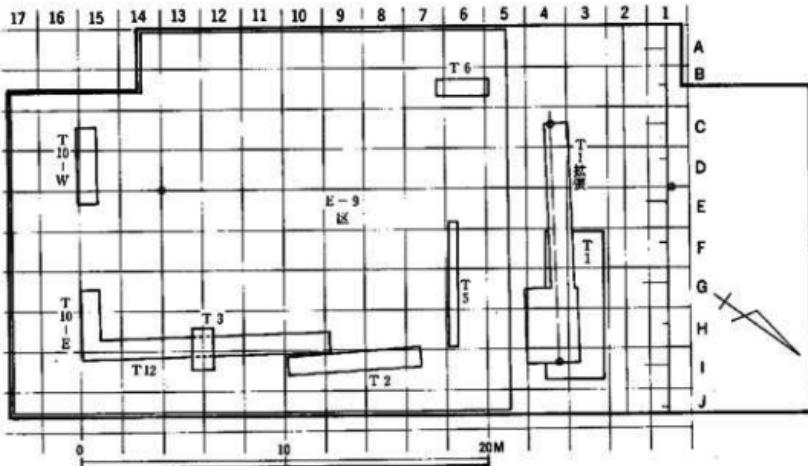


Fig. 4 グリッド配図

- 11月27日～30日 第4面調査
 11月29日 トレンチ12の底より、女性頭骨出土
 12月1日 トレンチ1より出土した網代壁を取り上げて、調査終了

2. 層序について

第40次調査地点は、現地形からみると、博多遺跡群を形成するふたつの砂丘の内、内陸側の砂丘が博多湾側に向って傾斜する、その斜面にあたる。

第40次調査地点の土層を、トレンチ12を例にとって略述すると、次の通りである (Fig. 6)。
 上層：近世以降の包含層。下面には、焼土処理層上に整地層が堆積する。表土掘削時に除去。
 中層：中世の包含層である。暗褐色～黒褐色土を基調とする。総じて締まりが悪く、ゆるい。

整地層が点々とみられ、度々地均しが行なわれている。1～27層
 下層：第4面を乗せている層。砂～砂質土層。北西方向に傾斜する。埋め立て土層。28～35層
 最下層：自然堆積層、上からA～Cの3層に分けられる。

A層 白色砂 急速に埋った層。36層

B層 灰褐色砂層。37層

C層 淡緑色をおびた灰色砂層、生痕がみとめられる。ラミネーションが見られない点、生痕による汚染・搅乱がある点から、長い時間をかけて堆積したもの。38層。

最下層に関して、九州大学下山正一氏よりA層以下の自然環境についての御教示をいただいた。それによると、①、水つき部の堆積だが、湿地的。②、河口域近い川の堆積（細砂のたまりやすい環境で、海との出入りがある）。③、川の本流ではなく、残存河川部分。④、南西方向より東流してきた川 (B.P. 1500年頃) の残存河川で、渦である。⑤、川が北流に転じたため急速に堆積が進み、A層が形成された。

したがって、第40次調査地点は、砂丘と砂丘との間、旧河川の流路上に立地している。この内陸側の砂丘は、第40次調査地点とは小路ひとつを隔てたすぐ南側の試掘調査で検出されており、そこから第40次調査地点に向って、急激に傾斜していたことがわかる。その後、人為的な埋立が行なわれるのだが、その時期は、C層中から11世紀代の女性頭骨が流れ込みの状況で出土した点（後述、508号遺構）、第4面の時期が12世紀後半～13世紀前半にあてられる点からみて、12世紀前半を前後すると思われる。

なお、下層の上面は、山地形を反映して、南東から北西に傾斜しているが、第3面は、ほとんど傾斜していない。調査区北側のトレンチでは、第3面以下に遺構が存在しないことと考えあわせて、第4面から第3面へ移る50年程の間に、再び大規模な埋め立てが行なわれたと考えられる。

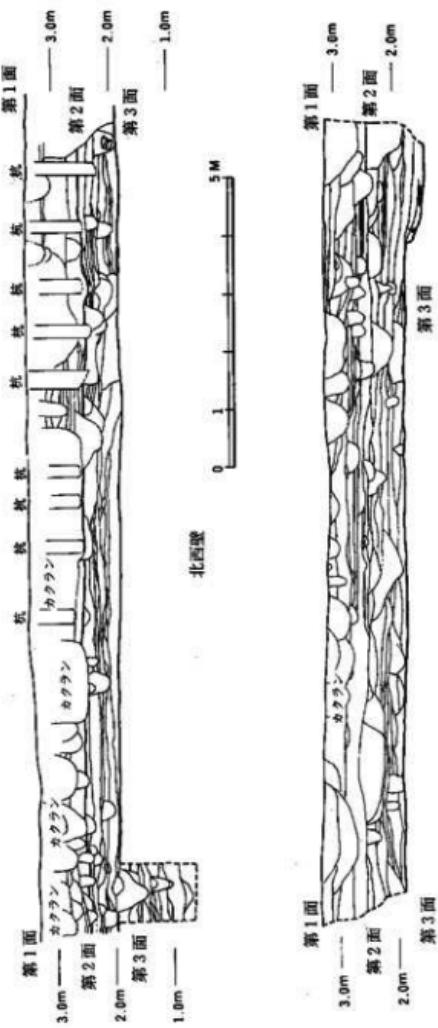


Fig. 5 調査区北西壁・南東壁土層剖面図 (1/100)

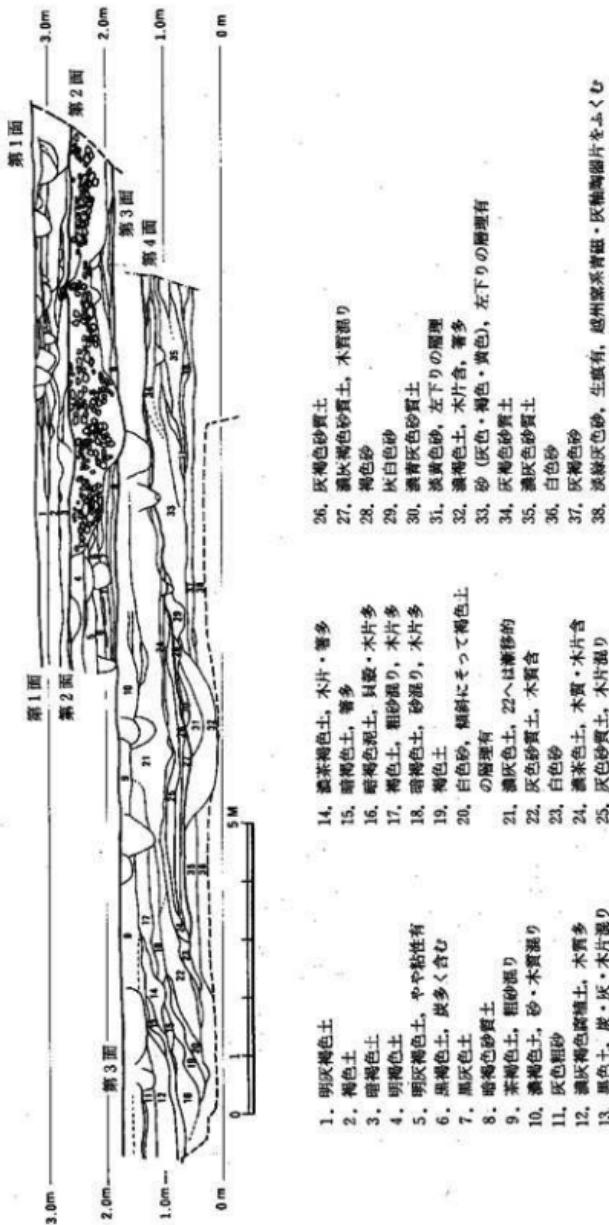


Fig. 6 トレンチ12, 土層実測図 (1/100)

3. 第1面の調査

第1面は、現地表下1.7m、標高3.0～3.2mで調査した遺構検出面である。試掘調査においては、第1面のやや上に、約20cmの厚さで堆積した焼土処理層が検出されている。この焼土処理層は、16世紀末（1586年）筑前国に侵攻した島津氏による博多焼き打ちからの復興にかかわるものと考えられる。

第1面で検出した遺構は、溝・土壤・柱穴・井戸・集石遺構等である。

5号溝と6号溝は、溝の心々距離にして約3.9mの間隔で平行している。また、両溝間の土層を見ると、細かい単位でほぼ水平にならした様子がうかがわれた。これらの点から、5号溝と6号溝は、道路の側溝と考えられる。

道路遺構の北側からは、礎石建物が一棟検出された。また、建物としては復原できなかつたが、柱穴が柱筋を示して集中する部分が、東と西に1カ所ずつみられ、2区画の屋敷割りがあったことを示している。ただし、両屋敷割りを隔てる溝・柵などは、確認できなかつた。道路遺構の南側には、遺構の分布は希薄であるが、道路から奥まって「コ」字形に疊を配した遺構が検出された。疊は、浅い溝を掘り、それに充填したものである。同様の遺構は、これまでの周辺の調査においても検出されているが、未だその性格を明らかにできていない。一応、建物の基礎と考えられている。したがって、道路の南側には、かなり広い屋敷割りが想定できそうである。



Fig. 7 第1面遺構全景（北西より）

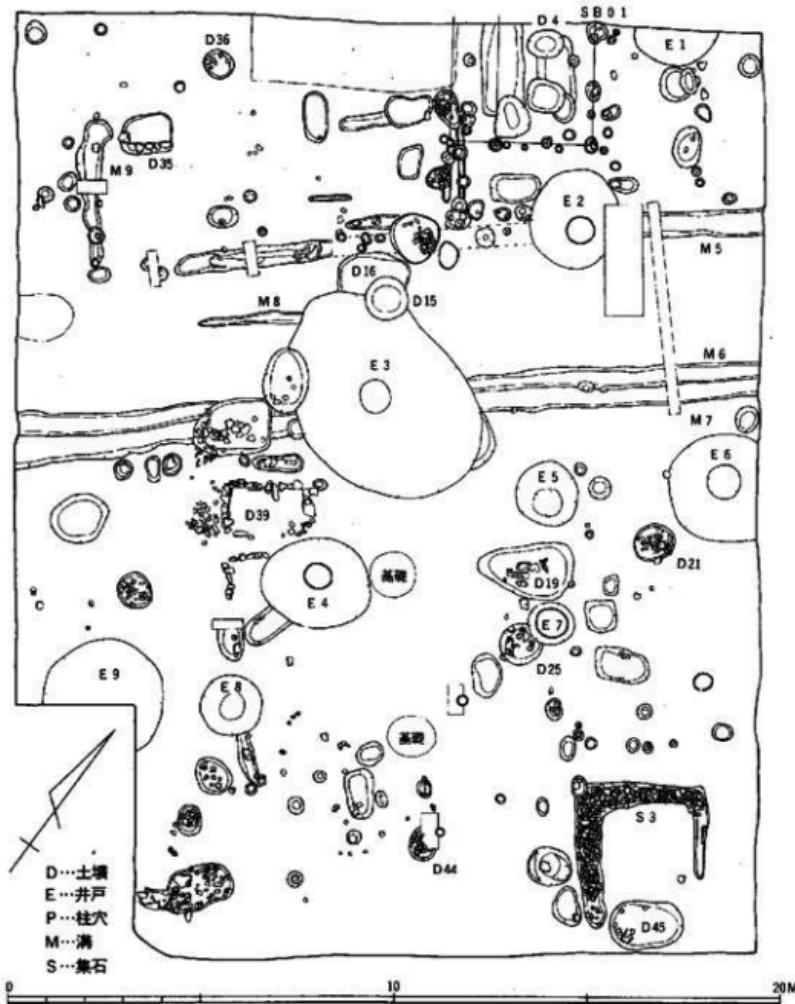


Fig. 8 第1面遺構実測図 (1/150)

(1) 第1面道路

5号溝と6号溝に両側を画された道路である。5号溝は、南西端では途切れてしまうが、これは、次第に浅くなつて途切れるもので、5号溝の上端が削平されたためである。本来は、ずっと続いて行くものである。

道路面は、土層観察の結果、特定できなかつた。おそらく、第1面よりは上位にあり、第1面までの表土掘削に際して、5号溝同様に削平されたものと考えられる。しかし、第1面上を覆う焼土処理層が、側溝中にはいっていない点、近世以後の井戸が道路を切っている点などから、焼土処理層の形成以前に側溝は埋り、その後道路は作られなかつたことが推測される。したがつて、第1面道路の道路面は、第1面のやや上位にあたり、第1面からさほど離れていないと思われる。

この道路は、第3面で嘗なまれてより第1面まで、側溝の掘り直しをともないつつ継続したものである。これを土層でみると、道路部分は、側溝から掘り上げた土によって均され、盛られていたことがわかる。したがつて、第1面においても、道路部分は泥土になつておつり、様々な有機質遺物が封入されていた。未だ分析していないが、主なものをあげると、木製品（板材断片・箸等）、貝殻（二枚貝・巻貝）、獸骨片などである。貝殻・獸骨等は、生活残滓で、食用に供されたものであろう。

5号溝（0062）

第1面道路の北を画する溝である。上端で幅約67cm、深さは0～35cmで、南西から北東へ傾斜する。主軸方位はN-48°40'~Eにとる。

6号溝（0063）・7号溝（0064）

第1面道路の南を画する溝である。掘り直しがみられ、2本が重複する。6号溝が7号溝を切る。6号溝は、上端幅約50cm、深さ20cm前後、7号溝は深さ25cm前後をはかる。

溝底には明らかな傾斜はないが、全体として南西から北東へ傾斜する。主軸方位は、ともにN-48°20'~Eである。5号溝、6・7号溝とともに、点々と板材がみられるが、全体としては素掘りで、側板・杭などはあまりみられない。

Fig. 10 に示したのは、6号溝の出土遺物である。内訳は、1～9・24…土師器、10～13…白磁、14～16…青磁、17・18…染付、19・23…李朝象嵌青磁、20・22…李朝陶器、21…李朝白磁、25・26…瓦質土器、27…瓦。土師器皿は、口径6.0～7.2cm、环は口径9.5・12.0cmをはかる。

Fig. 11・12 に示したものは、7号溝の出土遺物である。内訳は、1～14・17…土師器、15・16…備前陶器、18・19…瓦質土器、20～22…白磁、23～25…青磁、26…染付、27…李朝白磁、28…李朝陶器、29・30…李朝象嵌青磁、31…ベトナム鉄絵陶器（あるいは磁州窯系か）、32～34…褐釉陶器である。土師器皿は、口径6.4～7.5cm、环は10.4～13.7cmをはかる。



(1) 南西より



(2) 北東より

Fig. 9 第1面道路

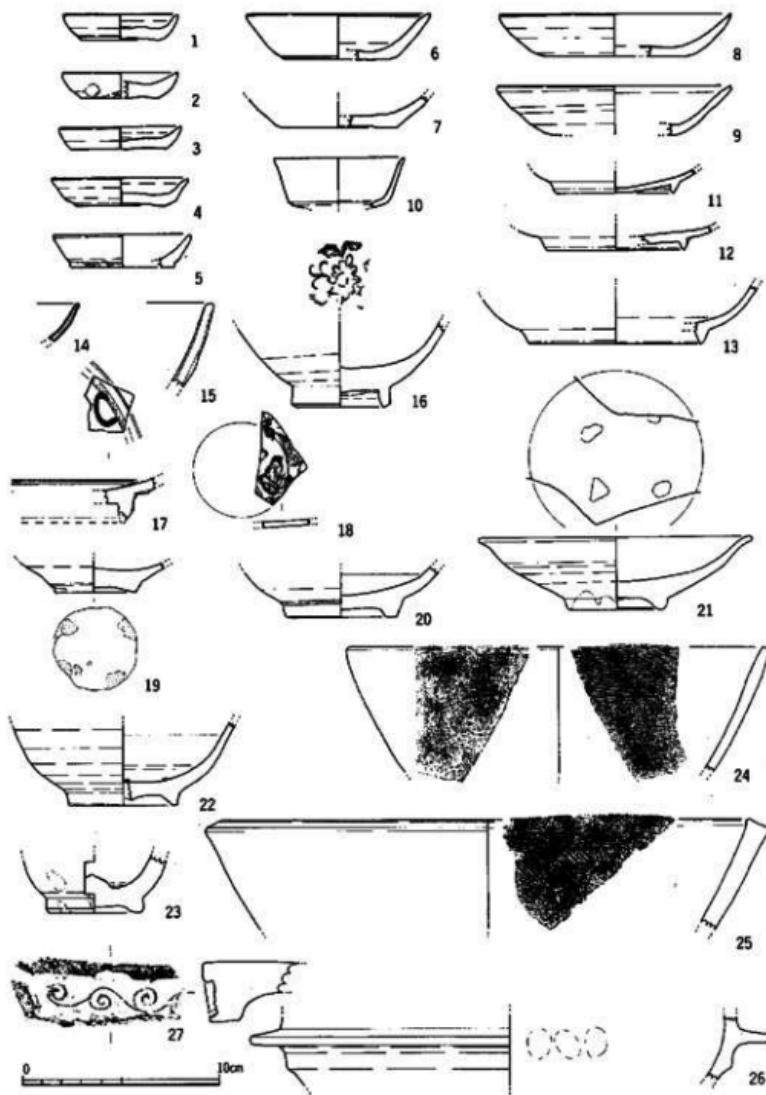


Fig. 10 6号墓遗物实测图 (1/3)

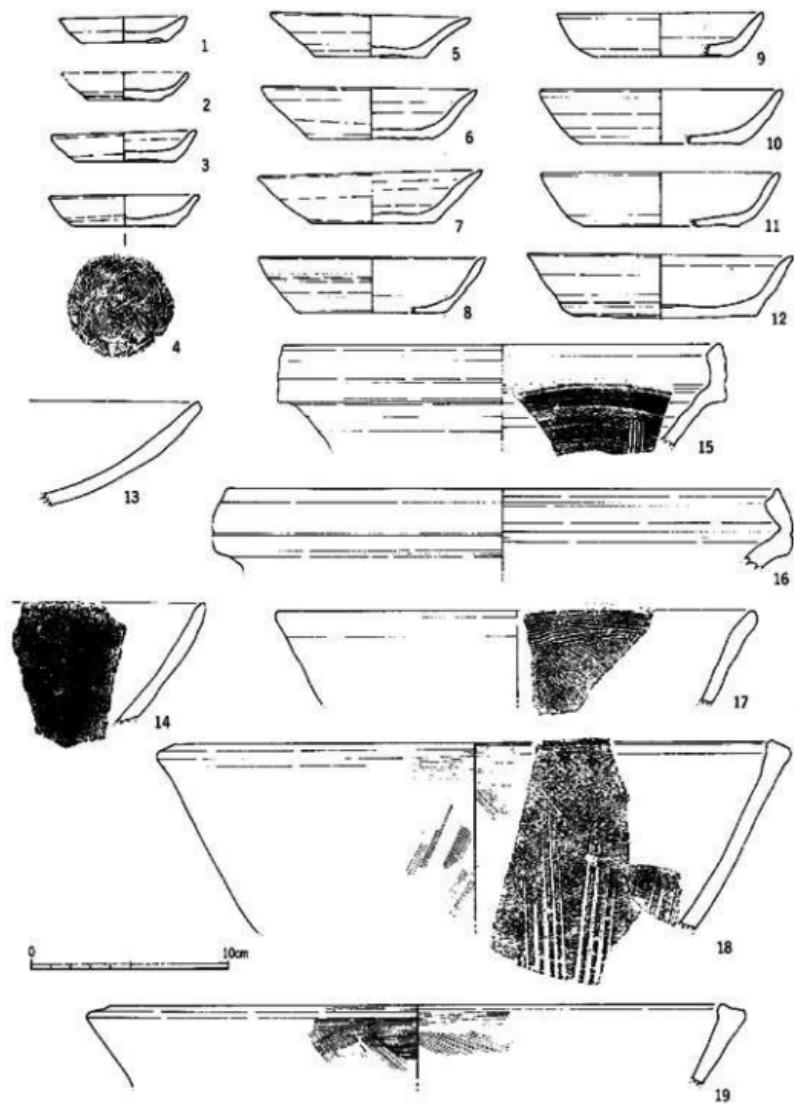


Fig. 11 7号溝遺物実測図 I (1/3)

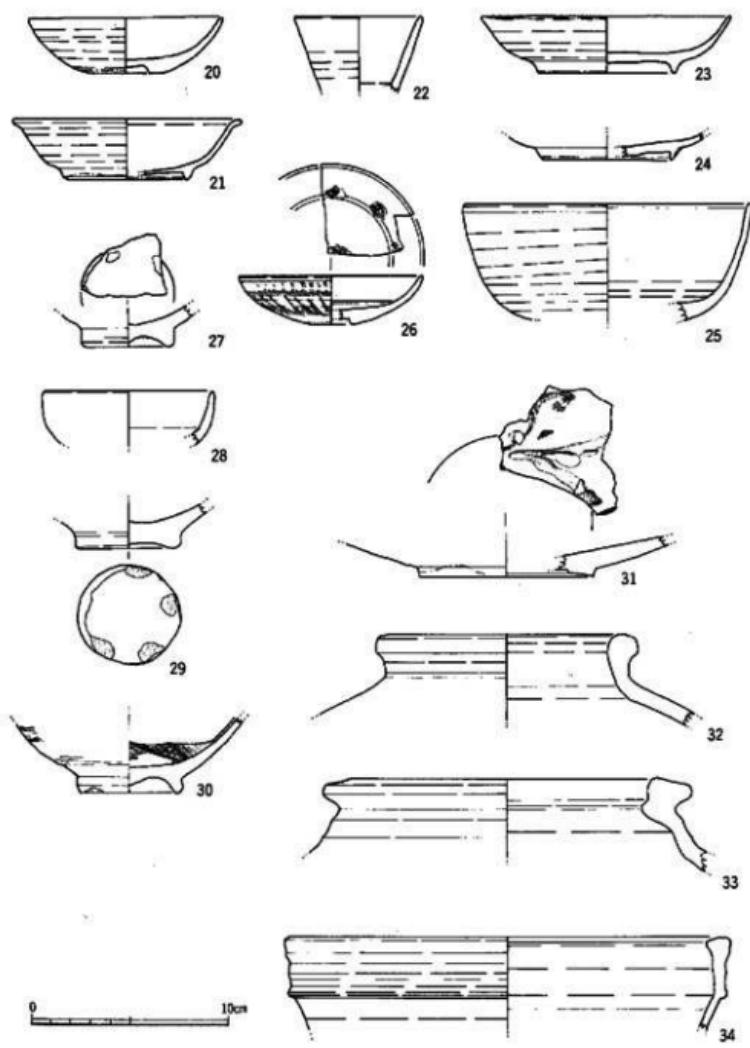


Fig. 12 7号墓遗物夹测图2 (1/3)

(2) 建物遺構

道路の北側より礎石建物1棟、南側より集石列を検出した。この他に、道路北側では、柱筋が通る柱穴列、雨落ちと思われる小溝がみられるが、建物跡を復原するにはいたっていない。

1号礎石建物跡

第1面道路のすぐ北側にある建物である。道路から1.7~2.1mはなれて、道路に建物の妻をみせて建てられている。梁の柱筋はN-54°-Eで、道路側溝とは平行しない。

柱穴は、円形掘りかたの底に扁平な石を据えたもので、2間×2間分を検出している。西方に向へは、柱穴のはびないので、梁間2間で、桁行が更に北にのびるものと思われる。ただし、西に一間（梁は、一間が124cm）はなれて、獨立の柱穴がある。この柱穴から北では、他遺構に切られて、1号礎石建物の桁に対応する柱穴の有無はわからない。もし、これが1号礎石建物にともなうものとすると、西面に庇をかけていたものと考えられる。

3号集石遺構(0164)

第1面道路の南側、調査区の南東隅近くで検出した「コ」字形の集石遺構である。構造としては、まず幅40~65cmの浅い溝を掘り、その中に礎をつめるもので、東辺は板石をおくのみで礎をつめてはいない。これまでの検出例を含めて、溝状に抜けるものではなく、大抵「コ」字または方形で完結しているため、暗渠とは考えられない。一応、建物の基礎固めと考えている。

Fig. 15に出土遺物を示した。1・2…土師器、3・4…青磁、5…青白磁、6…土師質土器、7…備前陶器、8…砂岩製毬球玉である。土師皿は、1は口径6.5cm 2は7.5cmをはかる。

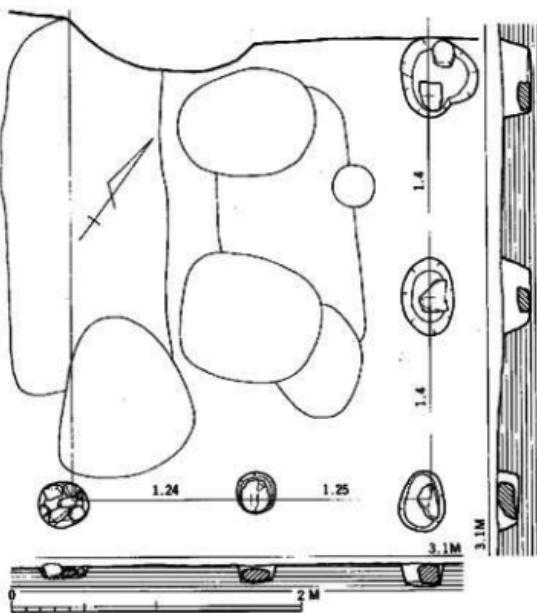


Fig. 13 1号礎石建物跡遺構実測図 (1/40)



Fig. 14 3号集石造構（南東より）

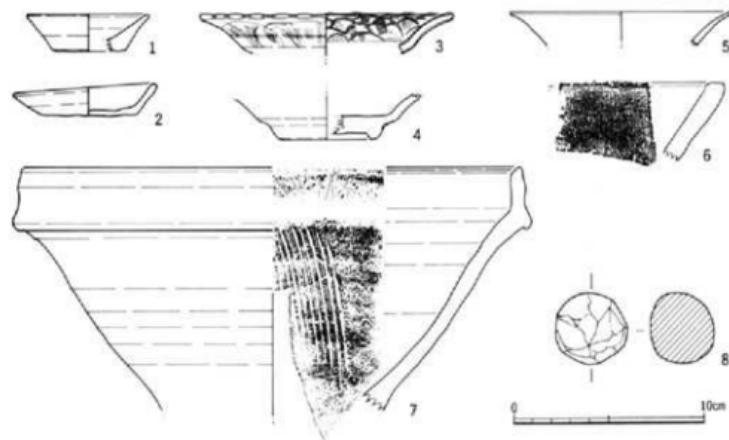


Fig. 15 3号集石造構造物実測図（1/3）

(3) 方形石組土壤

方形石組土壤としたのは、長方形の土壤壁に、石を配置するもので、石は1段から数段にわたりて置かれる。小砾を積み上げて壁をつくるものもあるが、今回の調査では、大きな砾を1～2段に積むものが検出されているのみで、小砾を積み上げるものはなかった。

35号土壤 (0131)

第1面道路の北側で検出した遺構である。長辺1.3m、短辺1.0mの隅丸長方形の土壤の南東壁に、石を2段組みする。南西壁には、南東壁からつづいて一石をおくが、南西壁全面にはおよよんでいない。石積は、石の面をそろえてなされており、南東壁は、一直線にそろう。また、南東壁と南西壁との角も、直角となる。土壤の床面には、拳大の砾が置かれるが、特に規則性はない。

Fig. 16に示したのは、出土遺物である。1～3…土師器、4…白磁。1・2は、各々口径10.2cm、11.2cmをはかる。3は灯火器の一端である。

39号土壤 (0141)

第1面道路の南側で検出した。長辺2.4m、短辺1.5mの隅丸長方形の土壤の3辺に砾を配する。南西壁と北西壁の一部が、数段に積み重ねられる。ただし、この部分は、小砾または扁平な板石であり、単に周囲の砾と高さをそろえているにすぎない。また、砾にまじって瓦もつまれている。埋土には、焼土が多量にまじっており、1587年の博多復興にあたって廃棄された土壤と言えよう。

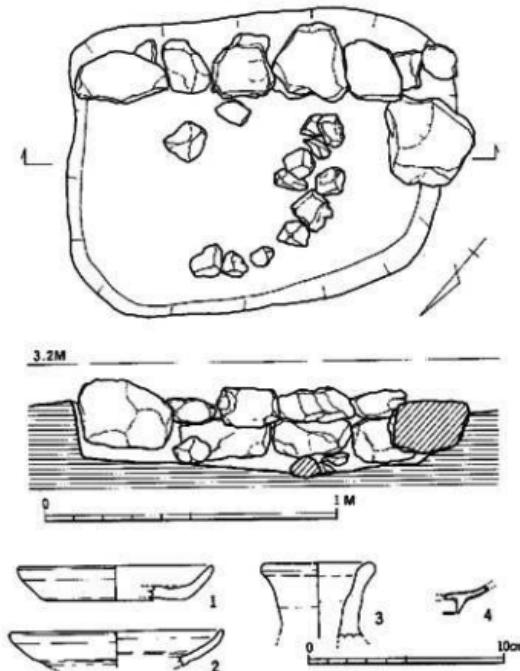


Fig. 16 35号土壤遺構実測図 (1/20), 遺物実測図 (1/3)

出土遺物は、平瓦と鐵滓・鐵釘のみである。



(1) 北西より



(2) 北より

Fig. 17 35号土壤検出状況

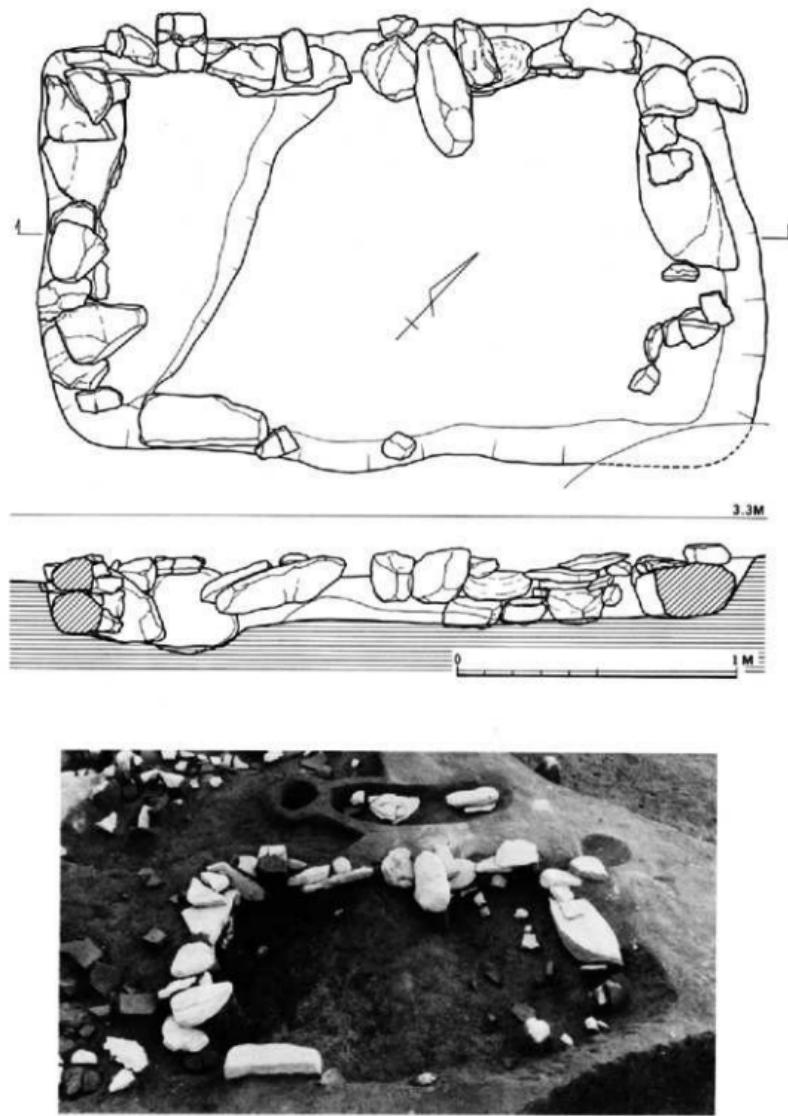


Fig. 18 39号土壤遺構実測図 (1/20), 検出状況 (南東より)



(1)

(1) 南西より ↑



(2)

Fig. 19 39号土壤検出状況

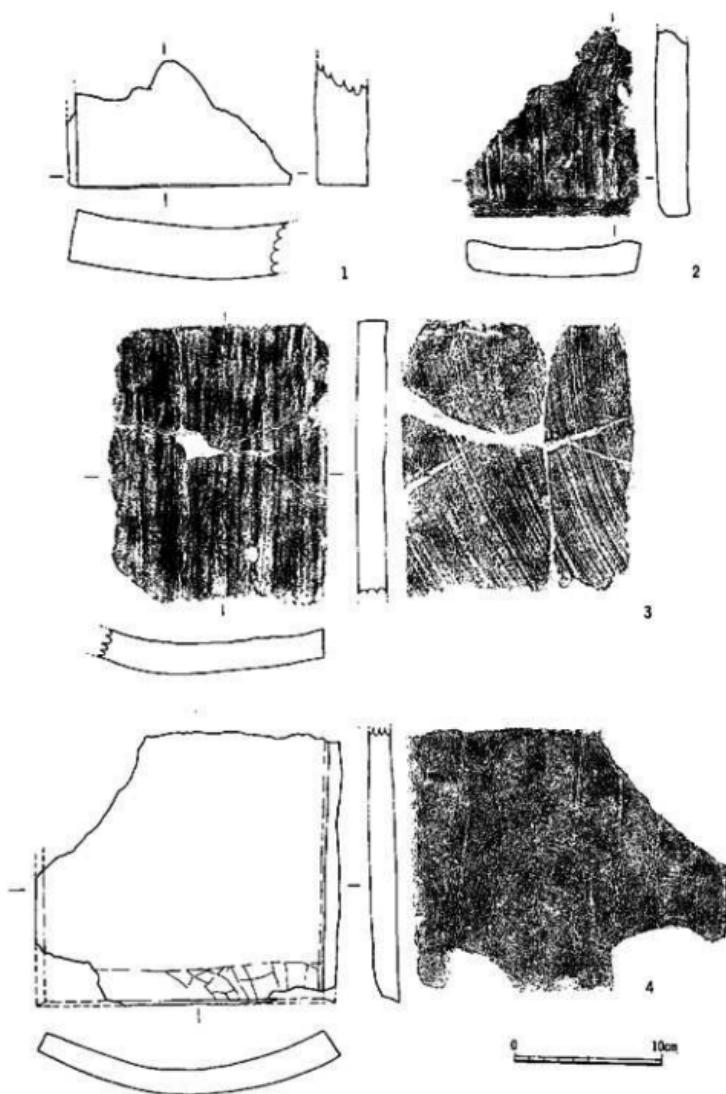


Fig. 20 39号土壤遺物尖測図 (1/4)

(4) 土壌

土壌は、略円形を呈するもの、長方形を呈するもの等みられるが、ほとんどは廃棄壠である。墓と考えられるものは、検出していない。

4号土壌 (0022)

長径1.0m、短径0.75mの梢円形を呈する土壌である。焼土廃棄壠である37号土壌 (0138) を切って掘られており、また埋土中に同様の焼土を多量に含む点から、1587年の博多復興以後で、しかもさほど下らない時期に埋められたといえる。土壌内には、大量の陶磁器が、整然と置かれていた。

出土遺物は、ほとんどが中国明代の染付皿である。皿は、4・5枚、多いもので9枚を一重ねとし、その単位ごとに備前焼きの壺に収納してあった。また、壺の外側にも染付大皿13枚が重ねられていた他、染付壺・黒釉壺・備前焼徳利・銅杓子がおかれていた。土壌の最下部からは、青磁香炉の内に、染付盃が伏せて入れた状態で出土した。

出土遺物は、中国明代の白磁・染付・青釉陶器・黒釉陶器・青磁・備前陶器・銅器で、土師器・瓦質土器の類は、全く含まれていない。

以下、器種毎に分類してその内訳を示す。

輸入陶磁器

盃 a - 白磁 体部内面に印花。外底に染付で銘を入れるものと入れないものとがある。

盤付は露胎。Fig. 25-

2・3, Fig. 27

b - 染付 外底露胎。Fig. 25-

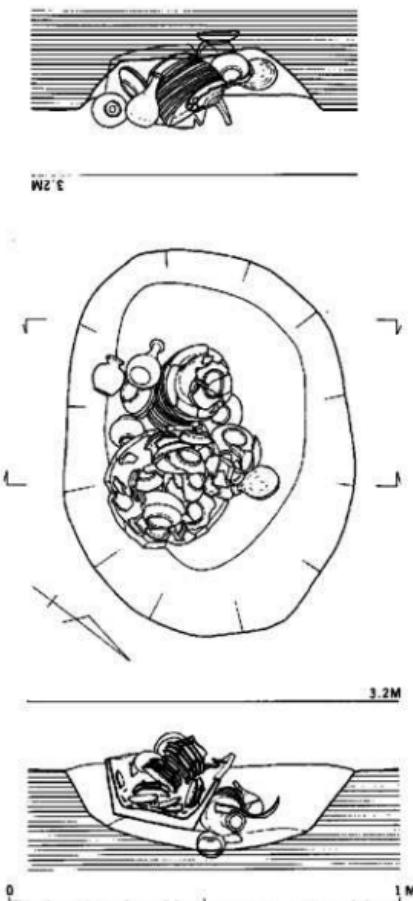


Fig. 21 4号土壌遺構実測図 (1/15)



(1) 南西より



(2) 南東より

Fig. 22 4号土壙検出状況



(1) 南西より



(2) 南東より

Fig. 23 4号土壤遺物出土状況 1



(1) 南東より



(2) 北西より

Fig. 24 4号土壤遺物出土状況 2

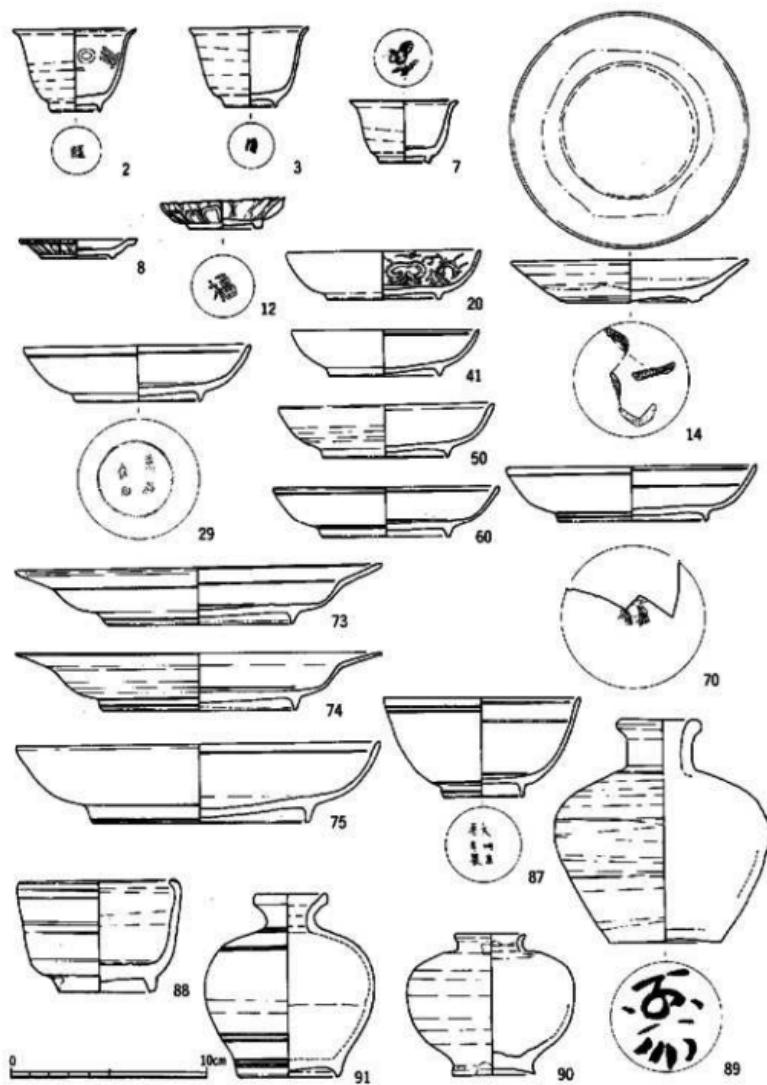


Fig. 25 4号土壤造物実測図 1 (1/3) 考古番号は Fig. 27~42 に一致

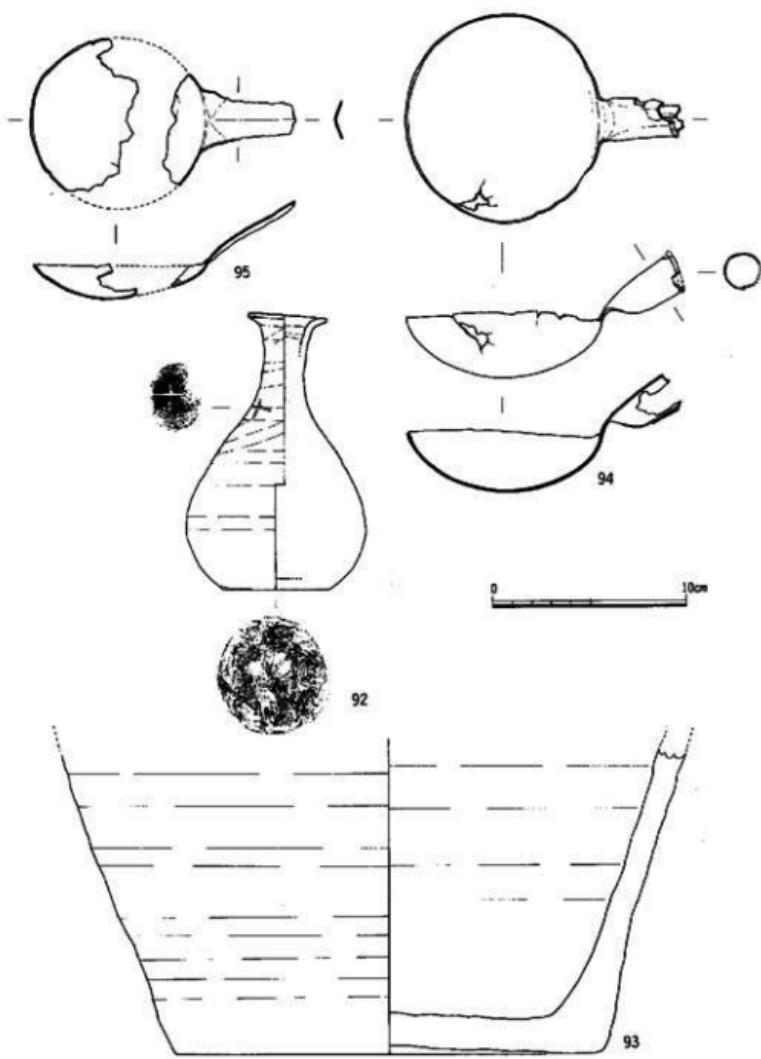


Fig. 26 4号土壤遺物実測図2 (1/3) 遺物番号はFig. 42・43に一致

7, Fig. 27-7

小皿 a - 青釉陶器 口縁を折り返して鉢状につくる。底部露胎。Fig. 25-8, Fig. 28-8
~11

b - 青釉陶器 体部は外弯気味に開き、そのまま口縁を輪花につくる。底部露胎。Fig.
25-12, Fig. 28-12

皿 I - 白磁 低平な高台を削り出し、体部は直線的に開く。見込みと体部下位より外底部
は露胎となる。外底部に、不鮮明な墨書きを持つものが多い。見込みには、重ね
焼きの痕跡が、輪状に黒ずんでみとめられる。Fig. 25-14, Fig. 28-13・14,
Fig. 29

II 輪高台に作るもの。疊付は露胎となる。体部は、腰で丸味がつよく、全体に
外弯する。

a - 白磁 内面に、印花文を施す。外底部には、染付で銘を入れる。Fig. 25-20, Fig. 30

b - 染付 内面に染付、瓜に栗鼠を描く。外底部に銘。Fig. 25-41, Fig. 32・33

c - 染付 内面と口縁外面に團線を描く。外底部に銘。Fig. 25-29, Fig. 31

d - 染付 内面に月花鳥文を描く。外底部に銘。Fig. 25-50, Fig. 34

e - 染付 見込に岩牡丹文、体部内面に虫と果物、外面に菊と唐草文を描く。外底部に
銘。Fig. 25-60, Fig. 35・36

f - 染付 見込に雲鶴文、口縁内面に連続文の文様帶、体部外面に梅枝に鳥を描く。外
底部に銘。Fig. 25-70, Fig. 37

大皿 I 染付 口縁は、鉢状につくる。疊付は露胎で、疊付端部の面取りは鋭い。外底部に
銘。Fig. 25-73・74, Fig. 38

II 染付 丸味を持って張る腰から、やや直線的にのびて口縁をおさめる。疊付は露胎、
外底部に銘。Fig. 25-75, Fig. 39・40・41

碗 染付 疊付露胎、外底に銘。Fig. 25-87, Fig. 41

香炉 青磁 疊付から外底部は露胎。Fig. 25-88, Fig. 42

壺 I 染付 疊付露胎。Fig. 25-91, Fig. 42

II 黒褐釉陶器 外底部露胎。Fig. 25-90, Fig. 42

III 鍔釉陶器 体部下位から外底部露胎。外底に墨書き。解読不能。Fig. 25-89, Fig. 42

国産陶器（備前陶器）

徳利 頸部と底部にヘラで「+」字を陰刻、Fig. 26-92, Fig. 42

壺 体部下半のみ残存、染付埋納の外容器、Fig. 26-93, Fig. 43

鋼杓子 柄がソケット状をなすものと、へ字形に屈折するものがある。Fig. 26-94・95

表1 4号土壤出土陶磁器一覧表

遺物番号	法量(cm) 口径-底径-器高	種類	備考	遺物番号	法量(cm) 口径-底径-器高	種類	備考	遺物番号	法量(cm) 口径-底径-器高	種類	備考
1	6.6 2.8 4.9	白磁蓋	壺内	33	11.9 6.7 2.8	染付皿 II c	1群	65	11.7 6.7 2.6	染付皿 II e	4群
2	6.4 2.6 4.3		-	34	11.9 6.7 2.6		2群	66	11.7 6.5 2.7		4群
3	6.3 2.8 4.1		壺内	35	11.7 6.6 2.6		7群	67	11.7 6.7 2.5		4群
4	6.5 2.6 4.3		壺内	36	12.0 7.0 2.7		7群	68	11.7 6.7 2.6		6群
5	6.7 - -		壺内	37	11.6 6.4 2.6		壺下	69	11.7 6.7 2.5		6群
6	6.6 2.6 4.4		壺内	38	11.9 6.7 2.6		1群	70	13.1 7.9 2.9	II f	壺内
7	5.4 2.6 3.4	染付蓋	壺下	39	11.3 6.4 2.7		2群	71	13.0 7.6 2.9		-
8	6.0 3.8 1.0	青磁小皿 a	壺内	40	9.6 5.7 2.4	II b	壺内	72	13.0 7.0 2.8		壺内
9	6.1 3.7 1.0		壺内	41	9.8 5.9 2.4		壺内	73	18.9 9.8 3.0	大皿 I	3群
10	6.0 3.9 0.9		壺内	42	9.9 5.5 2.4		壺内	74	18.6 10.2 3.0		3群
11	6.0 - -		壺内	43	9.7 5.5 2.4		壺内	75	18.8 11.3 4.2	大皿 II	3群
12	6.4 3.8 1.5	b	壺内	44	9.6 5.6 2.5		4群	76	18.5 11.3 3.9		3群
13	12.2 6.8 2.0	白磁皿	壺内	45	9.8 5.8 2.5		6群	77	18.9 11.7 3.7		3群
14	12.3 7.3 2.2		壺内	46	9.8 5.5 2.4		6群	78	18.9 11.5 3.9		3群
15	12.2 7.2 2.2		壺内	47	9.8 5.7 2.4		6群	79	18.7 11.4 3.8		3群
16	12.1 7.5 2.1		壺内	48	9.7 5.7 2.4		6群	80	18.9 12.2 4.1		3群
17	12.2 6.4 2.0		壺内	49	9.6 5.8 2.5		6群	81	18.7 11.2 3.9		3群
18	12.2 7.3 2.1		壺内	50	11.2 6.5 2.7	II d	壺内	82	18.6 11.3 3.7		3群
19	12.2 7.3 2.0		壺内	51	11.2 7.0 2.7		壺内	83	18.8 11.4 3.7		3群
20	10.1 5.9 2.5	II a	壺内	52	11.5 6.6 2.7		4群	84	19.0 11.5 4.0		3群
21	10.3 6.1 2.6		壺内	53	11.5 6.8 2.6		壺内	85	18.8 11.3 4.0		3群
22	10.4 6.0 2.6		5群	54	11.7 6.7 2.6		壺内	86	10.0 4.3 5.3	染付碗	壺内
23	10.3 6.0 2.5		壺内	55	11.6 6.6 2.6		6群	87	10.3 4.3 5.2		壺内
24	10.3 6.3 2.2		壺内	56	11.3 6.6 2.8		6群	88	8.4 6.0 5.8	青磁 香炉	壺下
25	10.3 6.1 2.5		5群	57	11.3 6.5 2.7		壺内	89	4.4 5.8 11.7	褐釉陶 器座	壺外
26	10.2 6.2 2.3		5群	58	11.6 6.6 2.7		-	90	3.7 4.3 7.4	黑褐釉 陶器座	壺外
27	10.5 6.2 2.5		5群	59	11.5 6.6 2.7		壺内	91	3.9 5.5 9.5	染付盃	壺外
28	10.2 6.1 2.3		5群	60	11.9 6.8 2.6	II e	壺内	92	4.0 5.6 14.4	褐釉 器座	壺外
29	11.9 6.1 2.9	染付皿 II c	1群	61	11.7 6.7 2.5		壺内	93	- 22.2 -	備前窯 外板	
30	11.8 6.6 2.7		7群	62	11.8 6.9 2.5		壺内				
31	11.8 6.6 3.3		7群	63	11.5 6.6 2.4		-				
32	11.8 6.6 2.7		1群	64	12.0 6.4 2.5		壺内				

注：群とは、壺内・外に納置された際に、重ねあわされていた単位をあらわす。

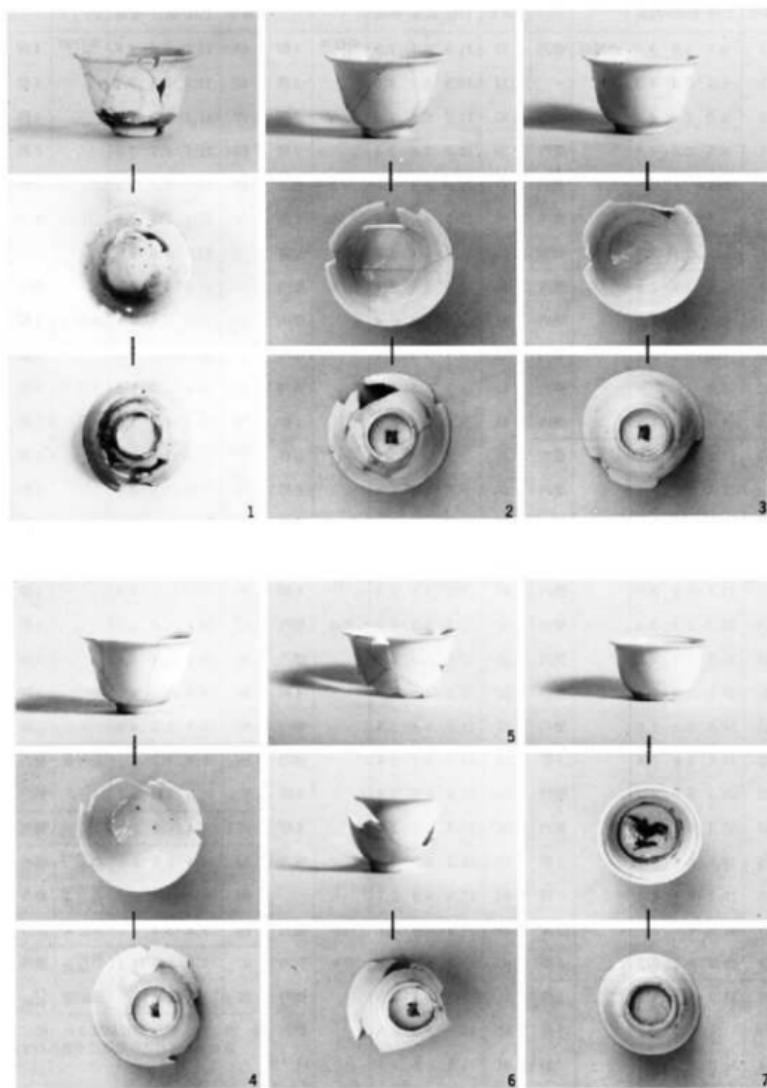


Fig. 27 4号土壤出土遺物1 (約1/3)

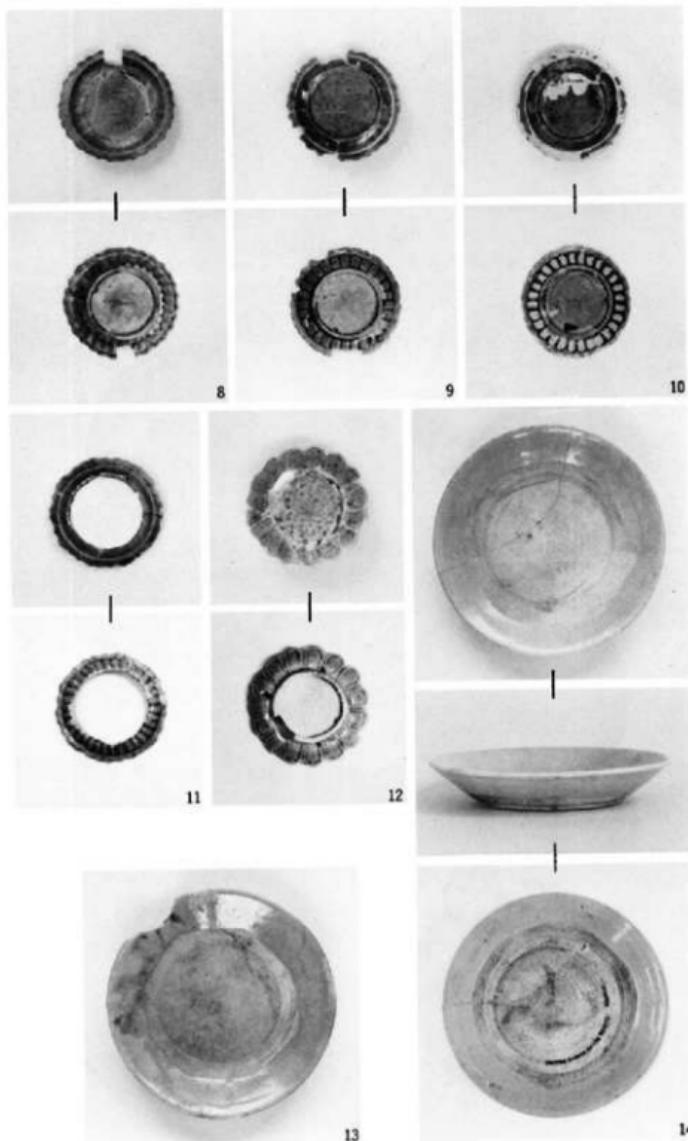


Fig. 28 4号土壤出土遺物2(約1/3)

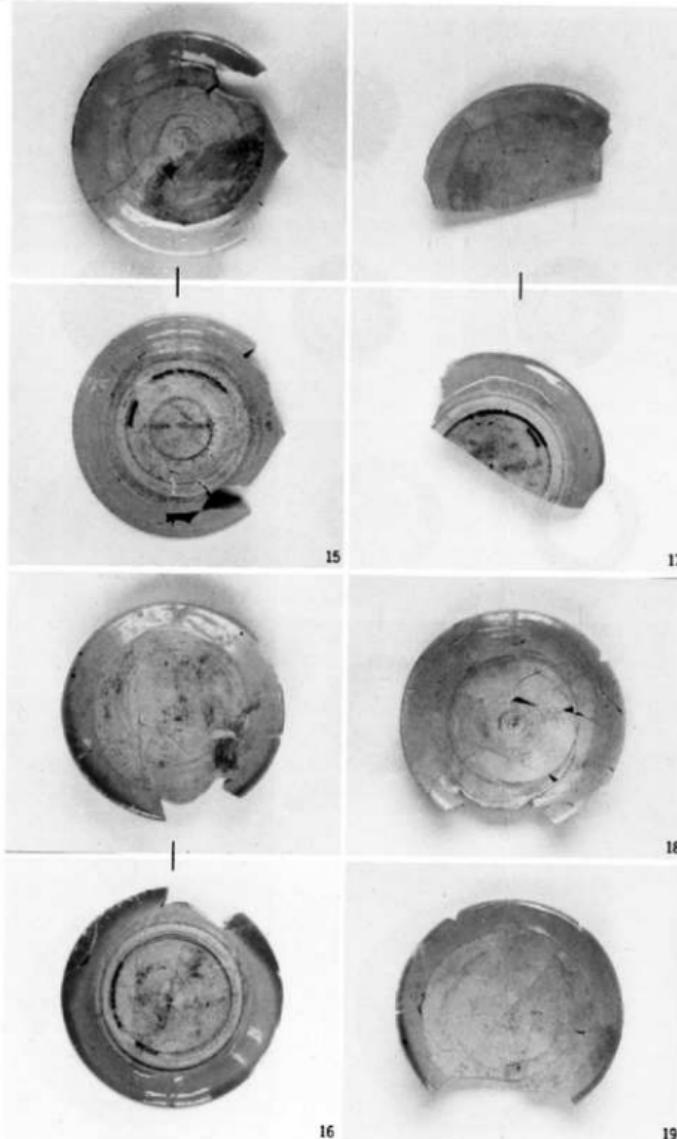


Fig. 29 4号土壙出土遺物3(約1/3)

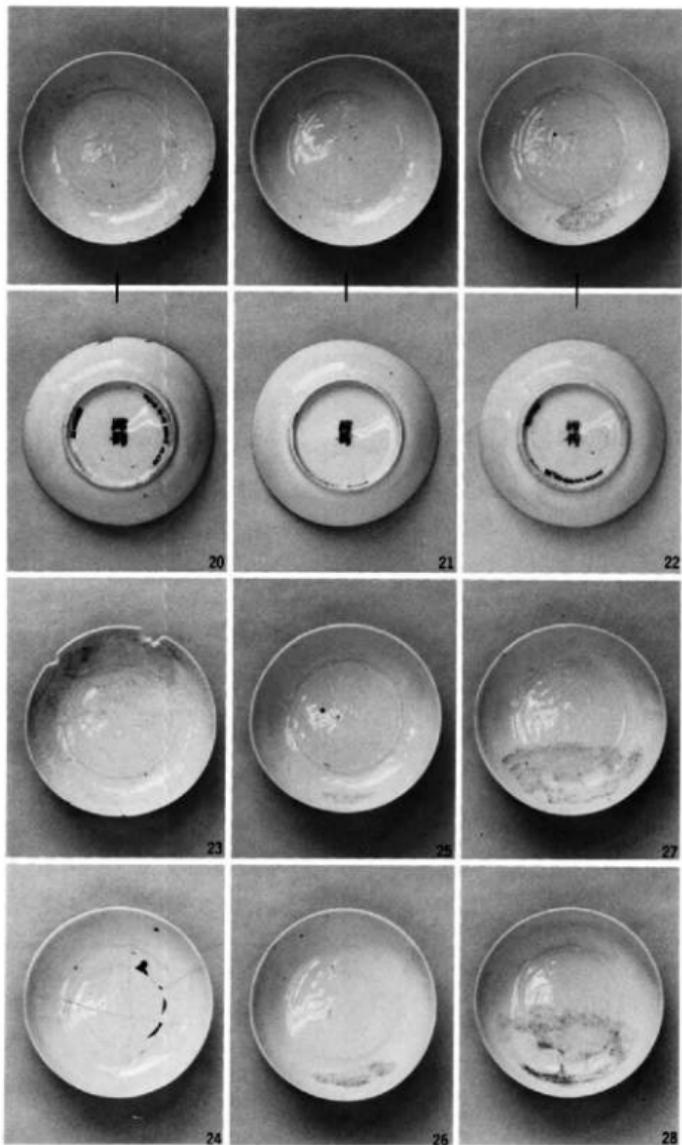
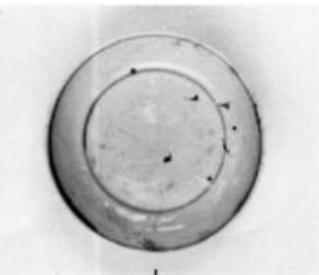
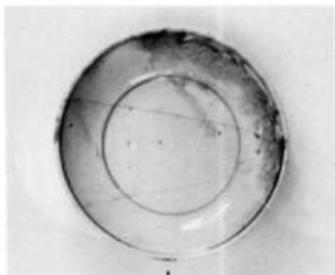


Fig. 30 4号土壤出土遺物4(約1/3)

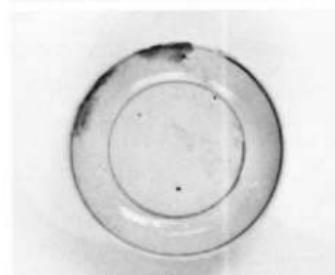
36



29



30



32



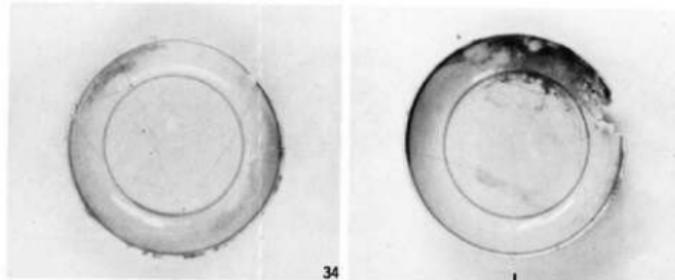
31



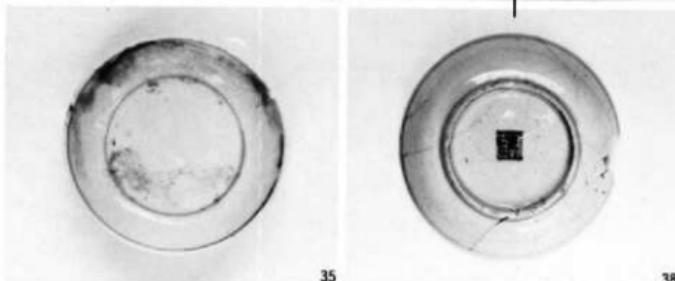
33

Fig. 31 4号土壤出土遺物5 (約1/3)

37



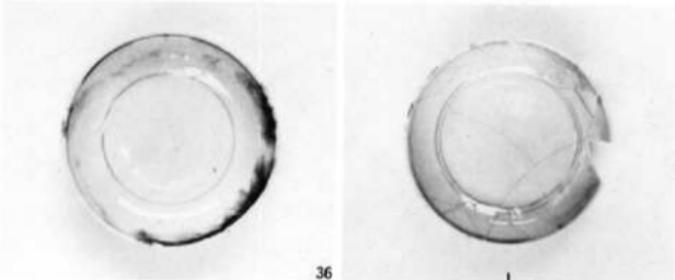
34



35



38



36



39



37

Fig. 32 4号土壤出土遺物6 (約1/3)

38



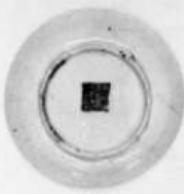
|



42



46



40



43



47



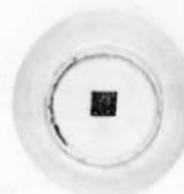
|



44



48



41



45



49

Fig. 33 4号土壤出土遺物7 (約1/3)

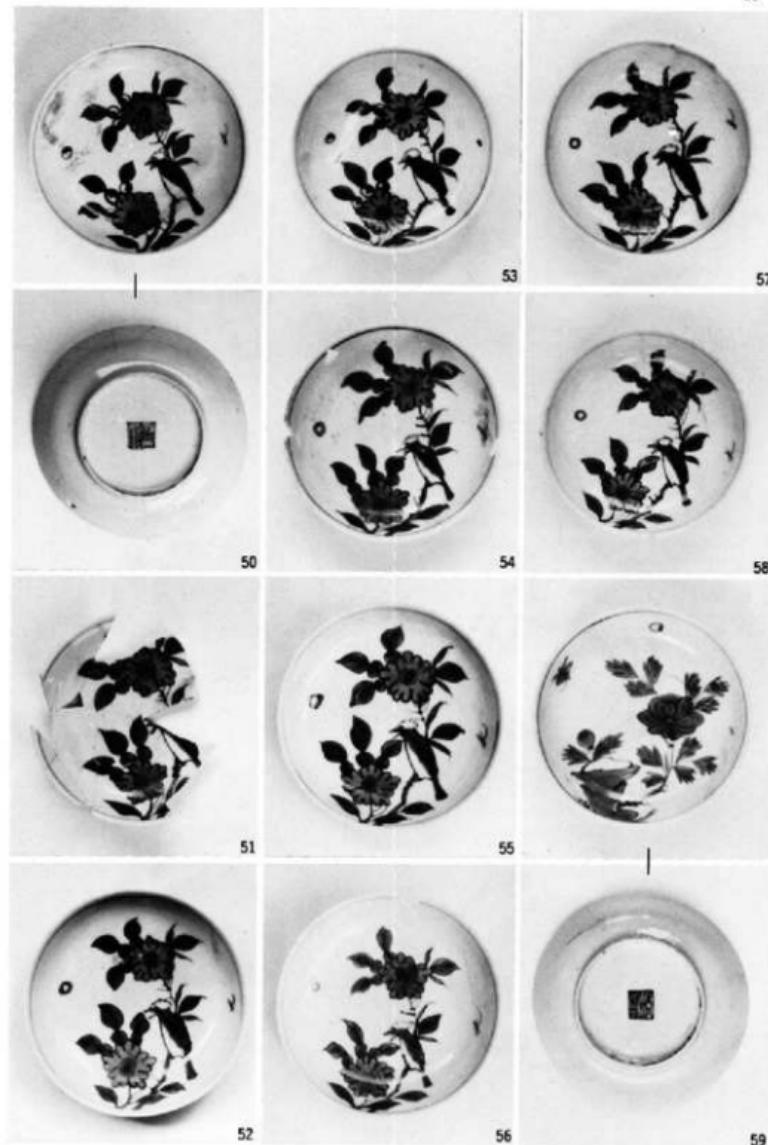
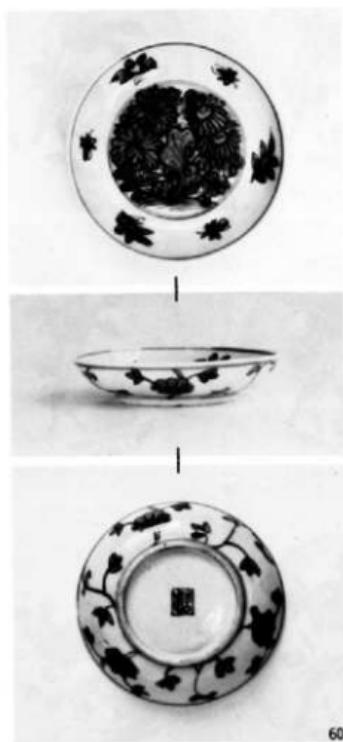


Fig. 34 4号土墙出土遺物8 (約1/3)



60

61

62

63

64

Fig. 35 4号土壤出土遺物9 (約1/3)

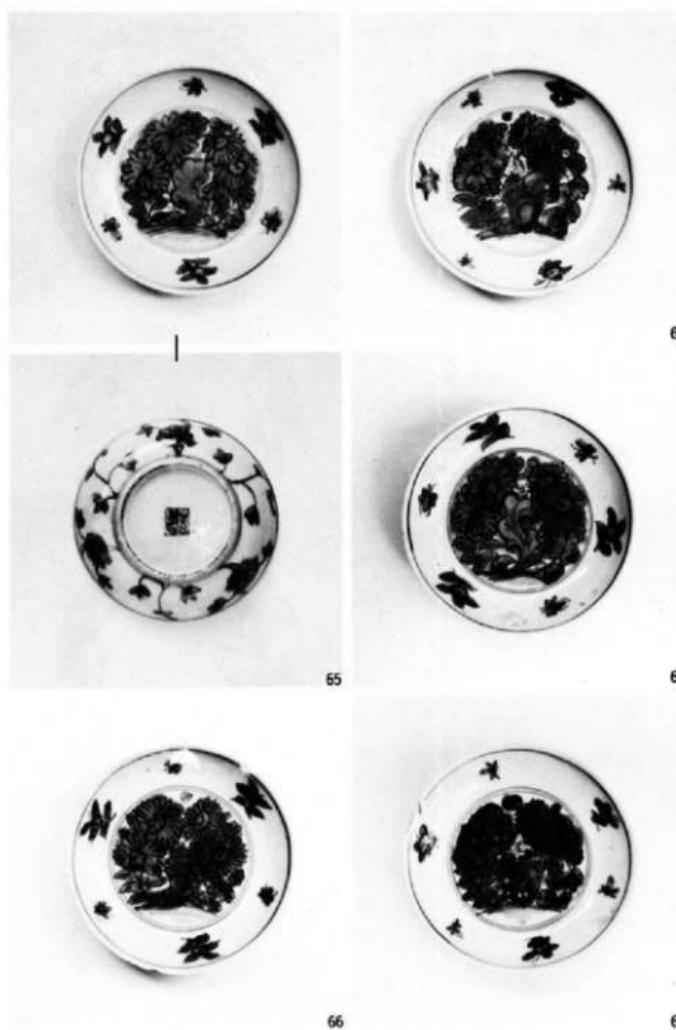


Fig. 36 4号土壤出土遺物10 (約1/3)

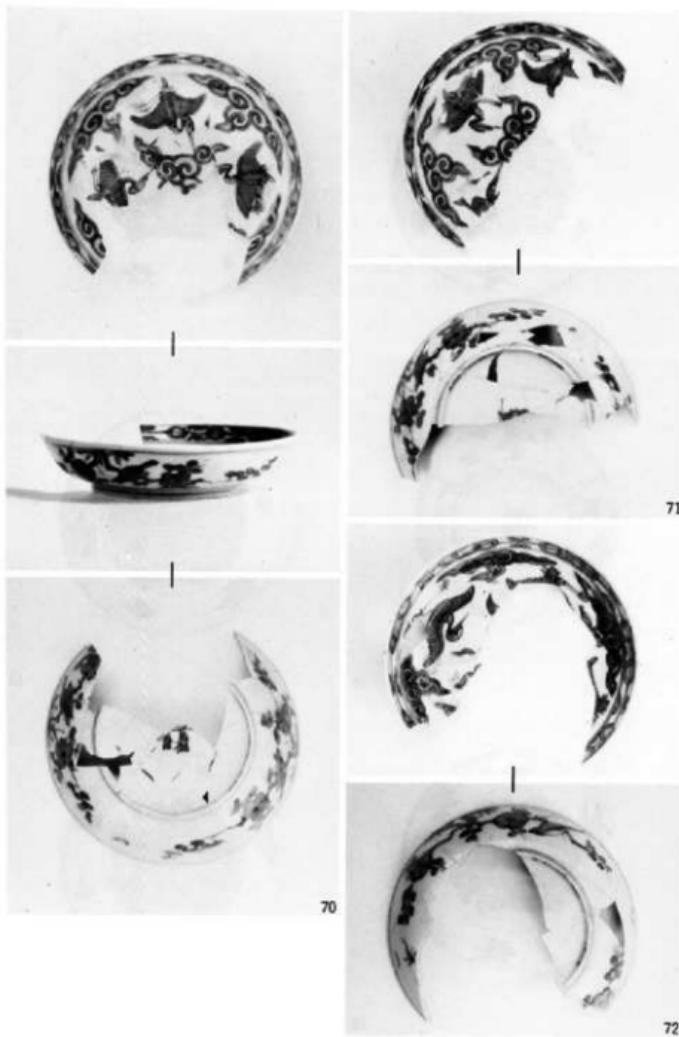


Fig. 37 4号土塚出土遺物II (約1/3)

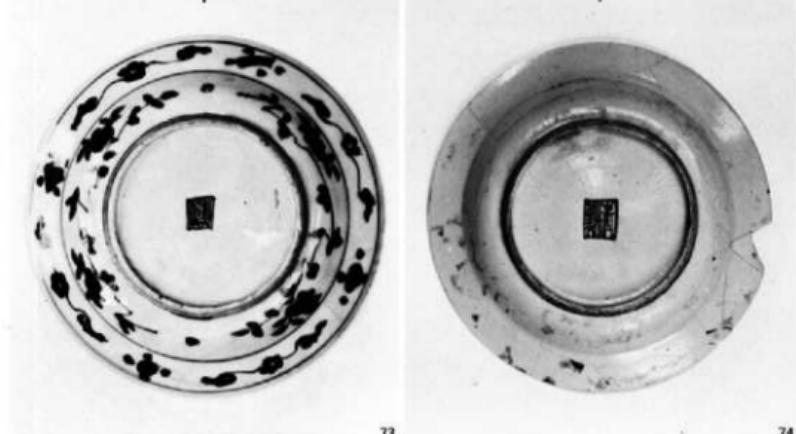
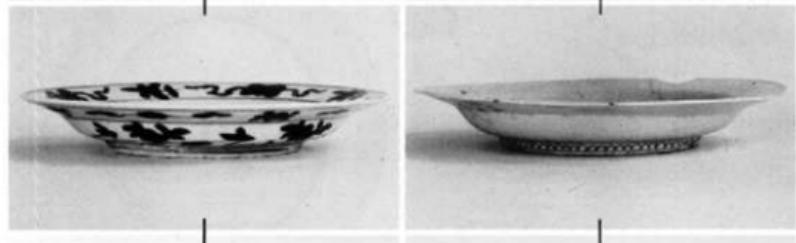
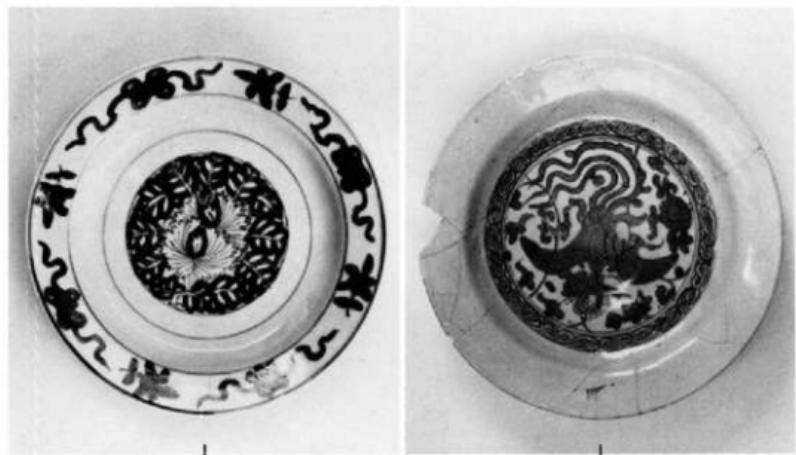
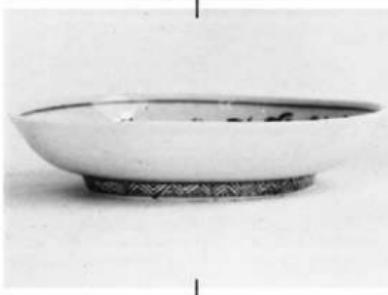
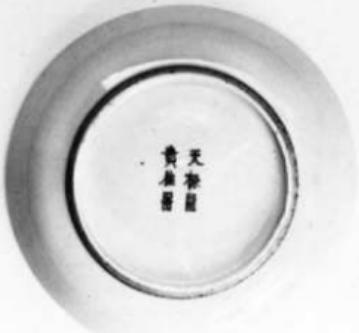


Fig. 38 4号土壤出土遺物12 (約1/3)



76



75



77

Fig. 39 4号土壤出土遺物13(約1/3)



78



81



79



82



80



83

Fig. 40 4号土壤出土遺物14(約1/3)



84



85



86

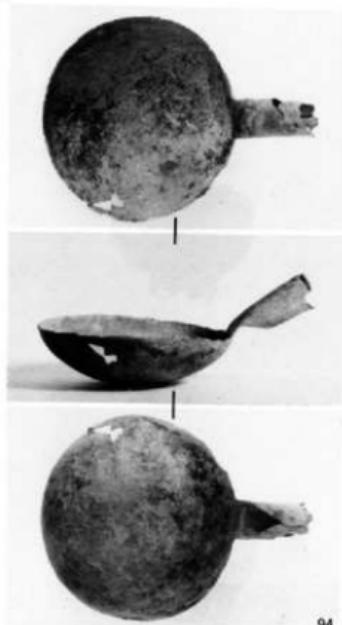
87

Fig. 41 4号土塙出土遺物15(約1/3)



Fig. 42 4号土壤出土遺物16(約1/3)

48



95



94



93

Fig. 43 4号土壤出土遺物17(約1/3)

21号土壤 (0088)

長径1.07m、短径0.93mの梢円形の土壤である。深さは、13~15cmをはかる。土壤内には、砾・土師器・陶磁器・鉄釘などが雜然と廃棄されていた。

Fig. 45に示したのは、出土遺物である。内訳は、1~5…土師器、6・7…白磁、8…染付である。土師器皿は口径6.8~7.4cm、器高1.2~1.4cmをはかる。坏は、4が口径10.2cm、器高2.7cm、5が口径12.7cm、器高2.35cmをはかる。4と5とは、法量・器形ともに、全く異なるタイプである。7の白磁盃は、疊付を露胎とする。この他、「永楽通寶」(初鑄1403年)が2枚出土している。



Fig. 44 21号土壤検出状況（北西より）

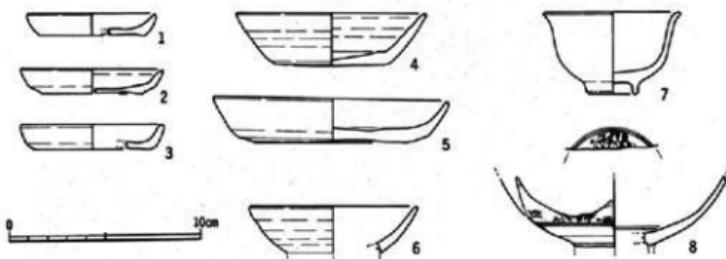


Fig. 45 21号土壤遺物実測図 (1/3)

44号土壤 (0152)

遺構検出のため、第1面上に入れた小トレンチの壁面に遺物がひっかかって、検出されたものである。土壤のプラン確認のために、小トレンチ周囲を削り下げるようやく検出したもので、戻密には、第1面より時期的に先行する可能性がつよい。

長軸85cm、短軸70cm(推定復原)の卵形を呈し、深さは約20cmをはかる。

礫・土器類とともに、鉄滓が出土している。鉄滓は、拳大・犬頭大の数個がかたまっていた。土器類とともに、廃棄されたものと考えられる。

Fig. 48 に示したのは、出土遺物である。内訳は、

1・2…土師器、3・4…青磁、5…天目、7・10…瓦質土器、6・8…李朝象嵌青磁、9・11~13…土師質土器である。1は、口径7.0cm、器高1.3cm、4は口径11.2cm、器高2.35cmをはかる。7は、香炉であろうか。外面は丁寧に研磨し、体部中央には2本の沈線で文様帯を画し、角渦文をスタンプする。この他、小片ではあるが、備前焼のすり鉢(問壁編年V期)が出土している。



5

Fig. 46 44号土壤出土遺物(約1/3)



Fig. 47 44号土壤検出状況(北東より)

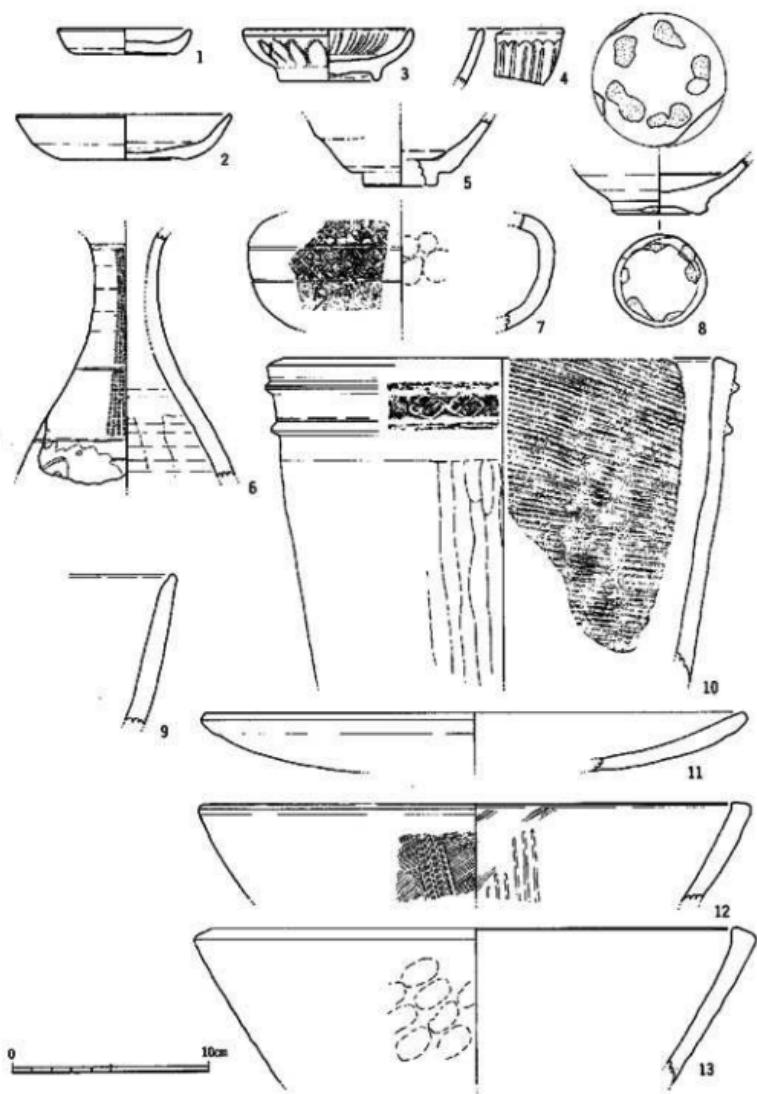


Fig. 48 44号土壤遺物実測図 (1 / 3)

4. 第2面の調査

第2面は、第1面から60cm程掘り下げて調査した遺構検出面である。標高2.4～2.6mをはかる。

第2面で検出した遺構は、溝・土壤・柱穴・井戸・集石遺構等である。

10号溝と11号溝は、道路の側溝と考えられる。道路幅は、溝の心々間距離で、4.75～5.15mである。また、調査区西南辺付近からは、これに直交する道路の側溝が検出された。調査の安全確保上、矢板の際は1m程引きを取りねばならず、南への延長方向は調査できなかった。

道路遺構の北側からは、主として柱穴が検出された。これらの柱穴は、若干建物らしくまとまるものもあるが、未だ復原するには至っていない。ただし、柱穴の集中個所から、2～3の建物配置が想定でき、これは同時に屋敷割りを示す可能性があると思われる。

道路遺構の南側には、集石遺構がたまっている。集石遺構は、断続的に分布し、一連の遺構とみることも可能である。また、集石遺構付近には、柱穴も集中しており、この推測を裏付けている。道路遺構南側の遺構分布からは、他に建物が立っていた状況はうかがわれず、ひとつの大きな屋敷割りの一部、具体的には西隅の一角と言つてよい。

この他、第2面からは、土師器溜りの土壤（87号土壤）が検出されている。



Fig. 49 第2面遺構全景（北西より）

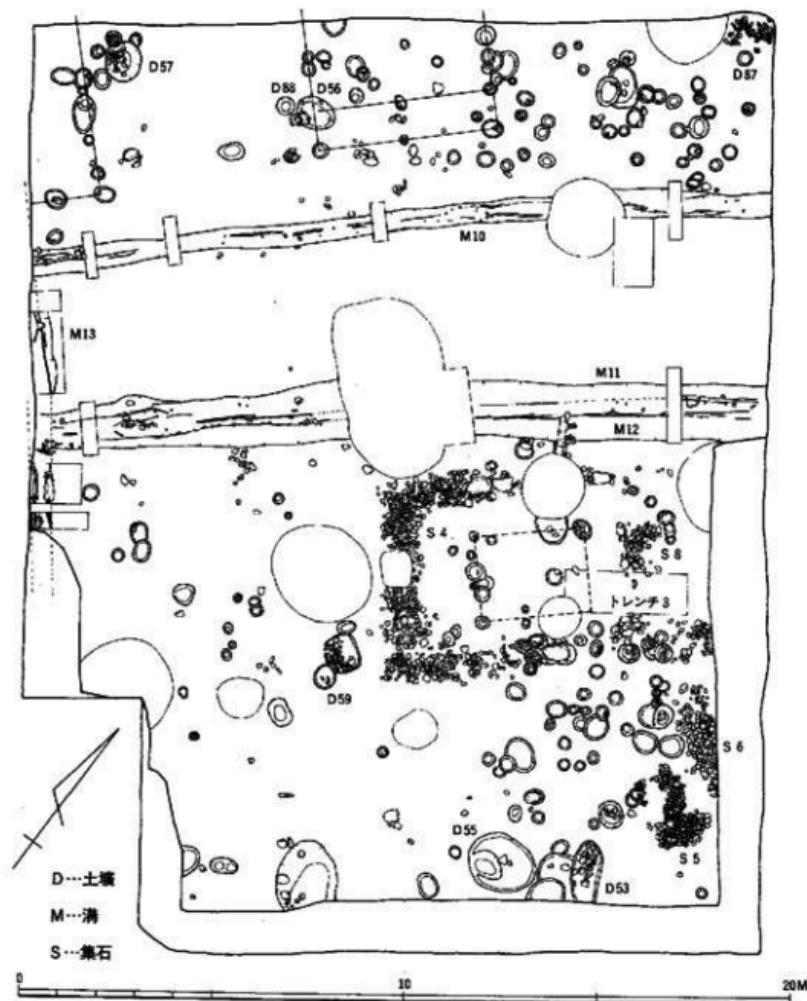


Fig. 50 第2面造構実測図 (1/150)

(1) 第2面道路

10号溝と11号溝・12号溝とに両側を画された道路である。道路幅は、10号溝と11号溝との心々間で4.75m～5.15mをはかり、北東に行き次第幅が広くなっている。

また、調査区南西辺より、13号溝を検出した。13号溝は、構造的には10号溝・11号溝・12号溝と同じで、方向は第2面道路と直行する。おそらくは、道路側溝であろう。ただし、13号溝は、厳密には第2面道路よりもやや先行するものと思われる。いずれにしても、この調査区南西辺あたりに、交差点の4ヶ角がくることは、間違いない。

10号溝（0352）

第2面道路の北を画する溝である。U字形の掘りかたの内に、細長い板材を横向きに立て、内側に木杭を打ちこんで倒れるのをふせいでいる。掘りかたは、上端で幅50～65cm、溝の深さは、38～65cmで、南西から北東へ向って傾斜している。側板は、何度もわたって立て直されていると思われ、また、板を抜き取られている部分もあり、理解しにくい状況を示している。一応、板と杭の関係から溝の内外を推定して、側溝幅を求めるとき、20～25cm程度と思われる。ただし、これは幾度かの掘り直しの最後のもので、幅は次第に狭くなつたものと思われる。

10号溝の主軸方位は、N-48°30'-Eである。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・天目・瓦質土器・陶器・木製品・骨角製品・石製品など多岐にわたる。

Fig. 52～54に示したのは、その一部にすぎない。その種別は、1～16・20…土師器、17…ベトナム陶器、18…瀬戸・美濃陶器、19…褐釉陶器、21…鹿角製品、22…滑石製石鍋、23～25…土師質土器、26…瓦質土器、27・28…備前陶器、29・30…木製下駄である。土師器皿は、口径



Fig. 51 第2面道路（北東より）

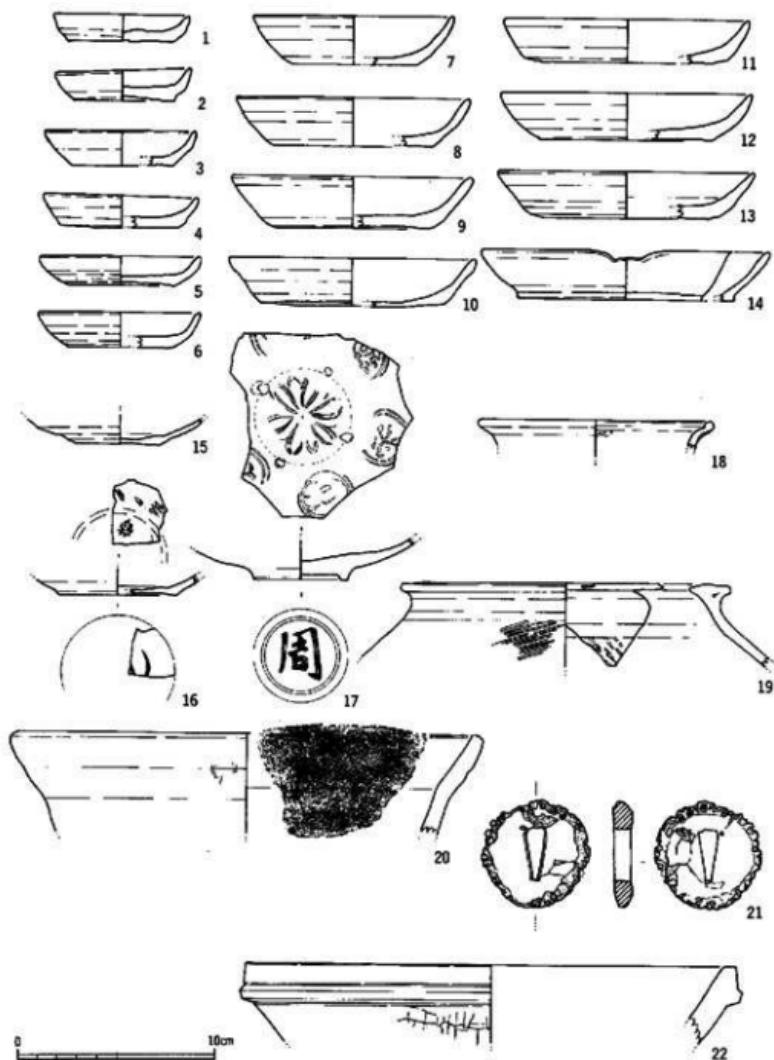


Fig. 52 10号溝遺物実測図1 (1/3)

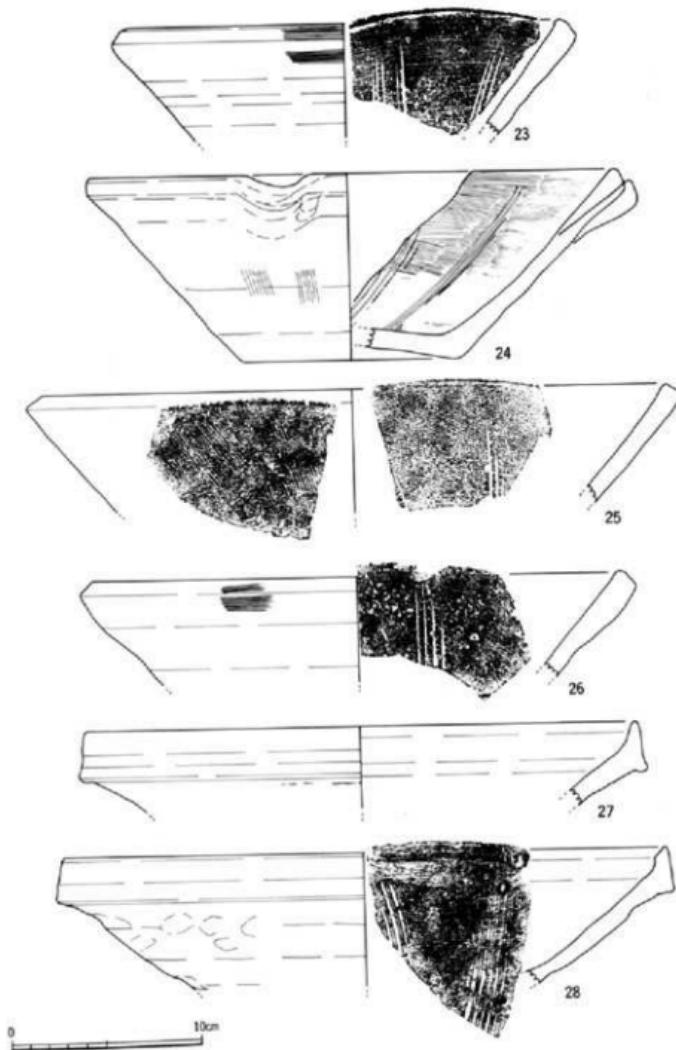
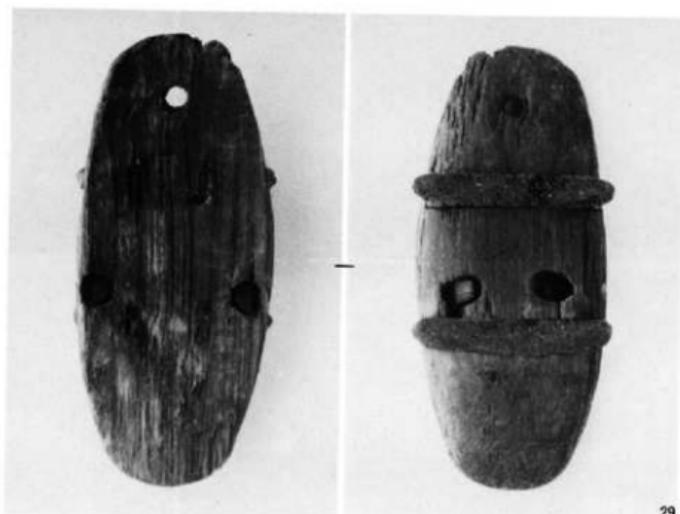
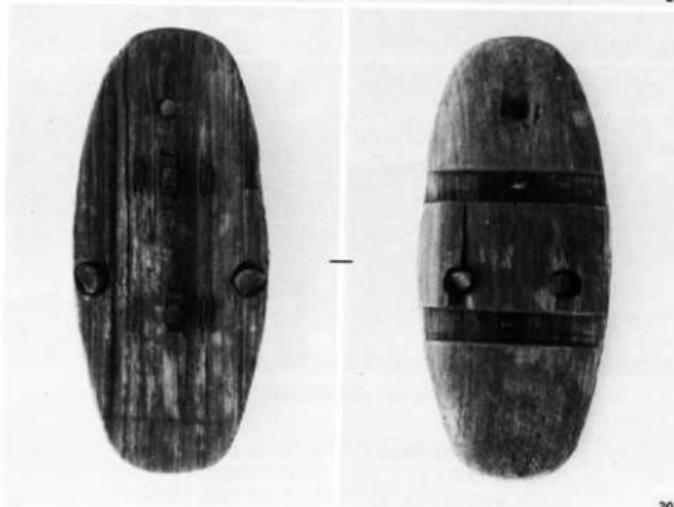


Fig. 53 10号满遗物实测图 2 (1/3)



29



30

Fig. 54 10号溝出土遺物（約1/3）

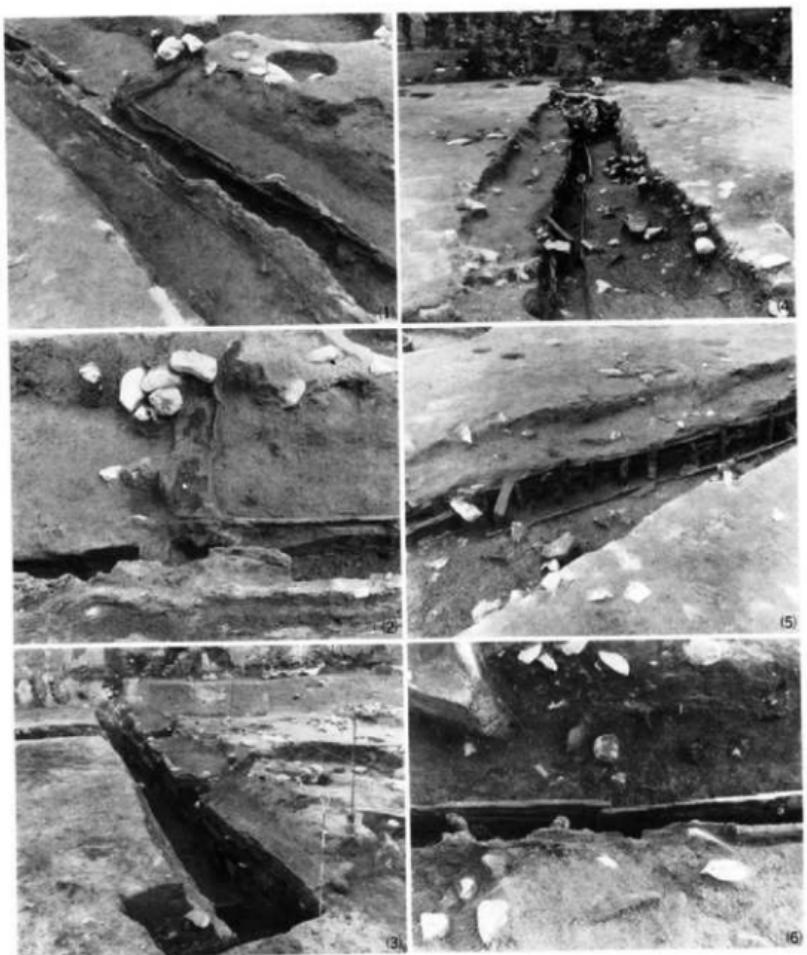


Fig. 55 11号溝検出状況

- (1) 東半部・掘（西より） (4) 西半部（北東より）
 (2) 横（北西より） (5) 西半部南側壁（北より）
 (3) 東半部完掘状況（西より） (6) 西半部北側壁（南東より）

7.1~8.4cmをはかる。环は、7が口径10.4cm, 8~13が12.2~13.5cm, 14が15.0cmである。15・16は大内系环で、16には内外に墨書きがある。17は、内面に白釉、外面に褐釉をかける。外底部には、「周」と墨書きする。21は、鹿角のつけ根の部分を輪切りにした、鉢である。この他、「皇宋通寶」(初鑄1039年)1枚、解読不能3枚の銅錢が出土している。

11号溝 (0353)

第2面道路の南を画する溝である。12号溝を掘り直したもので、12号溝と重複する。溝は、U字形の掘りかたの中に、細長い板材を横向きに立て、杭で内側を押さえている。溝掘りかたの上端は、1.05mをはかる。溝本体部分の幅は、やはり作り直しがある様でわかりにくいが、最も残りの良い中央部西寄りで、20~25cmである。

主軸方位は、N~50°40'~Eにとる。

11号溝には、中央部東寄りの部分で、南側から樋がかけられていた。樋は、幅20cm、深さ20cm程の小溝を掘って、その底と上面にそれぞれ板をあてるもので、南から11号溝に向って傾斜していた。生活廃水をおとしたものと思われる。樋の南端は、近世の井戸に切られており、残っていなかった。しかし、位置関係からみて、後述する4号集石遺構の内側からかけられた可能性が強い。

出土遺物の一部を、Fig. 56~59に示す。1~17…土師器、18~26…青磁、27~29…李朝象嵌青磁、30…黒釉陶器、31・34…備前陶器、32・33・35…土師質土器、36・37…瓦質土器、38…土師質輪羽口、39…石甕、40~43…砂岩製球玉である。土師器皿は、2は口径5.8cm、器高2.0cm、他は口径7.1~8.8cm、器高1.35~1.8cmである。环は、口径11.8~12.8cm、17は16.6cmをはかる。5・6・8・10・11・14の口縁には、煤が付着する。15の内面には、凸様の墨書きがある。17は、口縁内面に朱で鋸歯文、その下に墨でS字状文を描く。その他、「皇宋通寶」(初鑄1039年)1枚、「紹聖元寶」(初鑄1094年)1枚、解読不能3枚の銅錢が出土している。

12号溝 (0354)

第2面道路の南を画する溝である。掘り直されて、11号溝となる。西半分は、全く11号溝と重なっていて、東半部で掘りかたのみが検出された。西半部分の様子がわからないので断定できないが、主軸方位は11号溝よりも若干東へ振れていると思われる。

出土遺物を、Fig. 60・61に示す。1~19・36…土師器、20~28…青磁、29~31…白磁、32…青白釉陶器、33…褐釉陶器、34…タイ陶器、35…李朝象嵌青磁、37・39…土師質土器、38・40…瓦質土器である。土師器皿は、口径7.1~8.7cm、环は、11.4~14.2cmをはかる。5・6・9の口縁部には、煤が付着している。24の外底部には、「吉」と墨書きされている。34は、白化粧の上に鉄絵を描く。鉢の口縁であろうか。この他に、銷のため解読不能の銅錢が出土している。

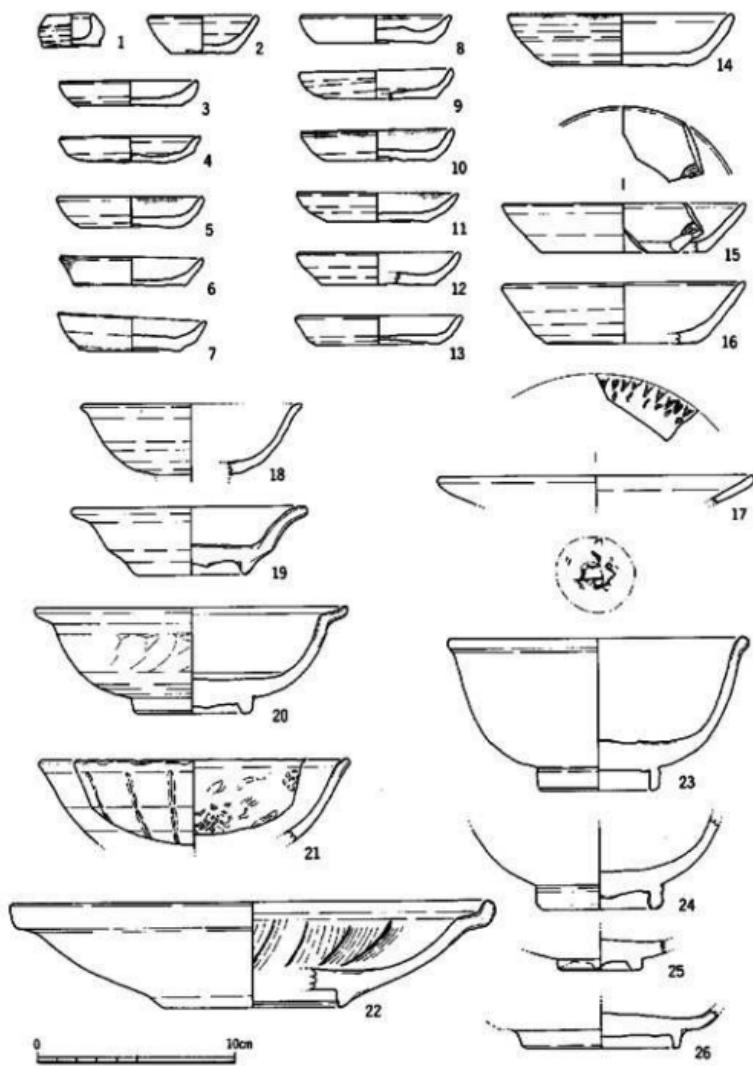


Fig. 56 11号墓遺物実測図1 (1/3)

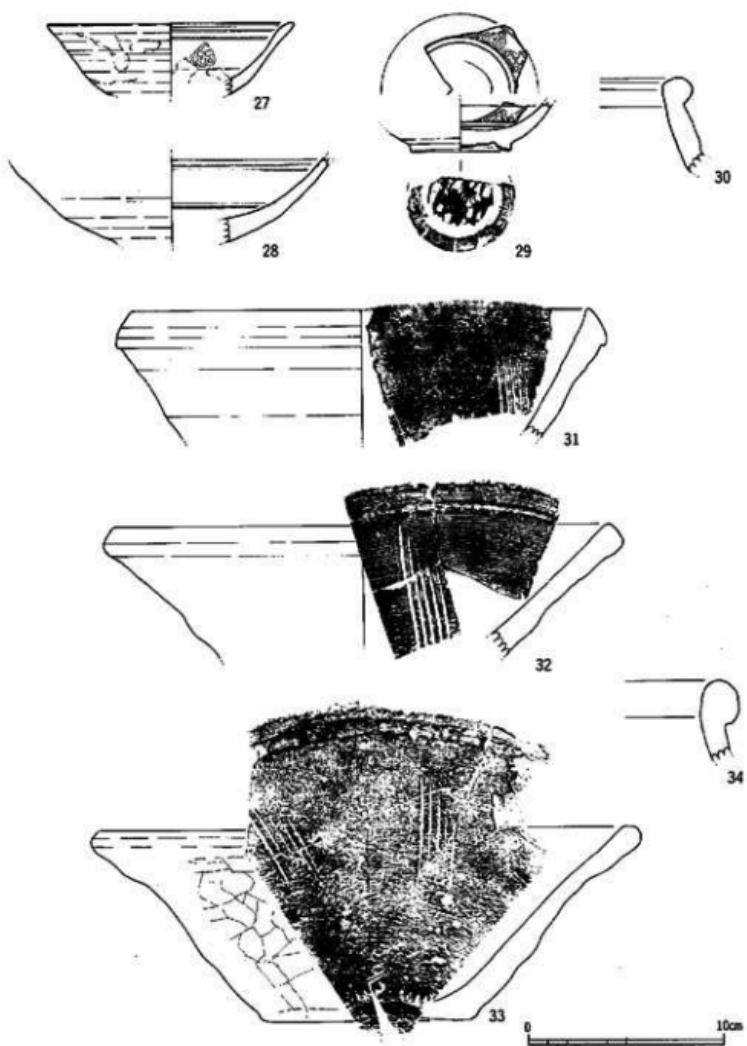


Fig. 57 11号墓遺物実測図 2 (1/3)

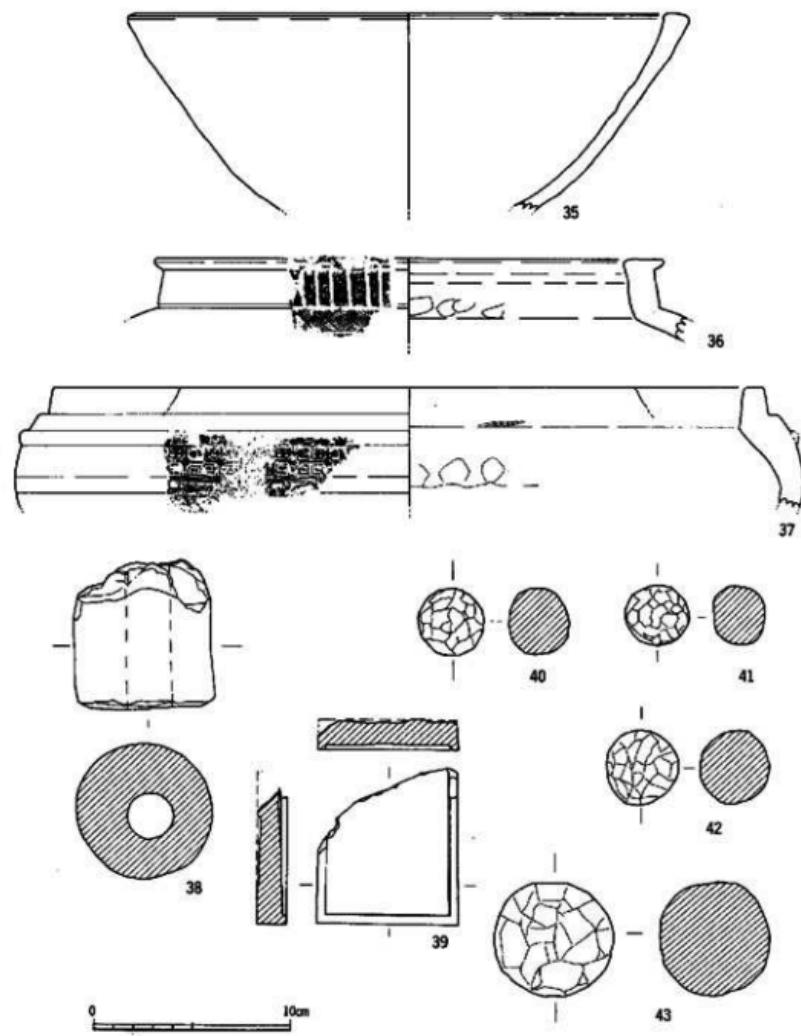


Fig. 58 11号溝遺物実測図 3 (1/3)

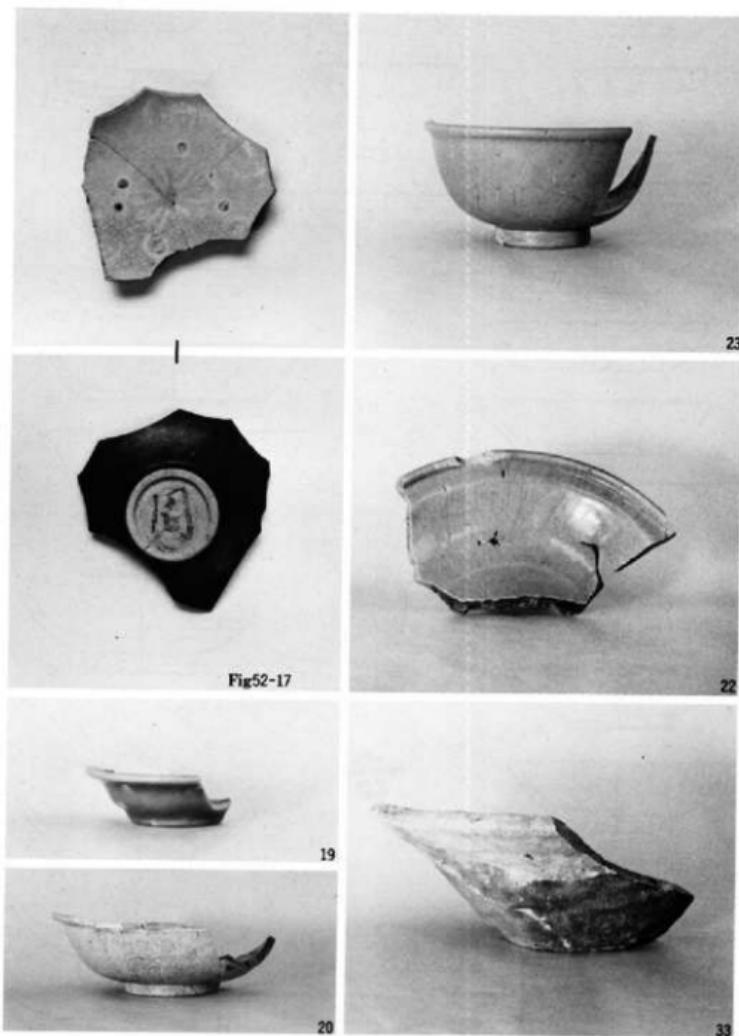


Fig. 59 10号溝・11号溝出土遺物（約1/3）

左上—10号溝出土　他—11号溝出土

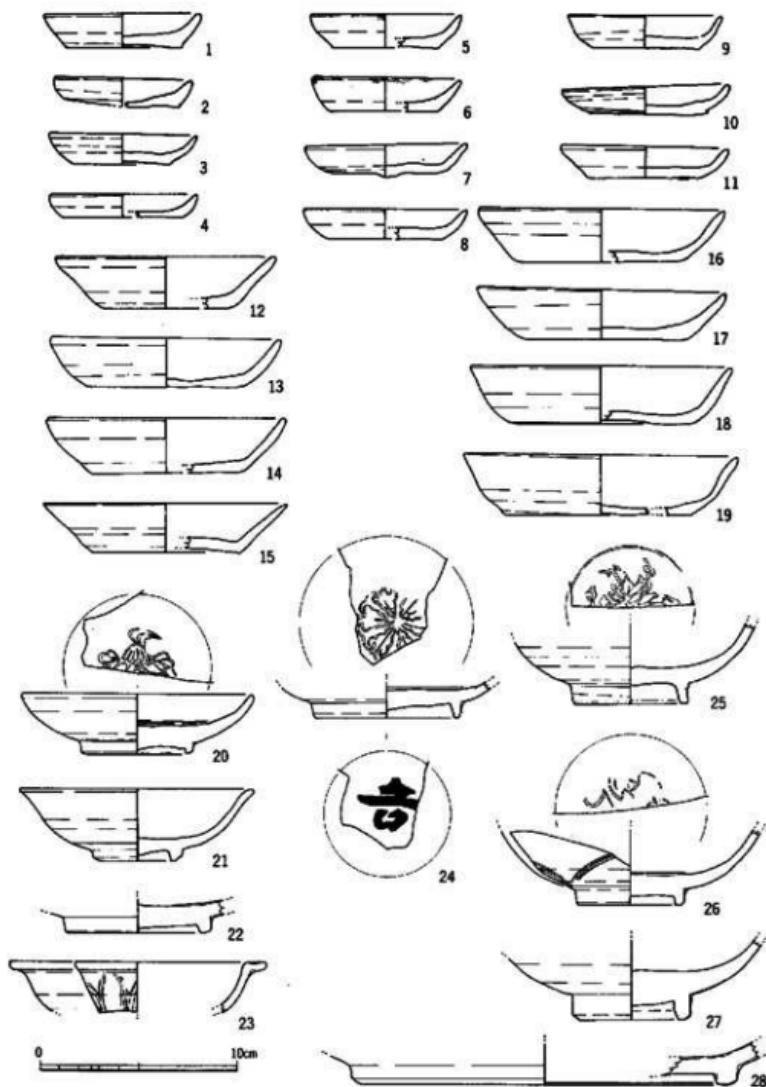


Fig. 60 12号溝遺物実測図 1 (1/3)

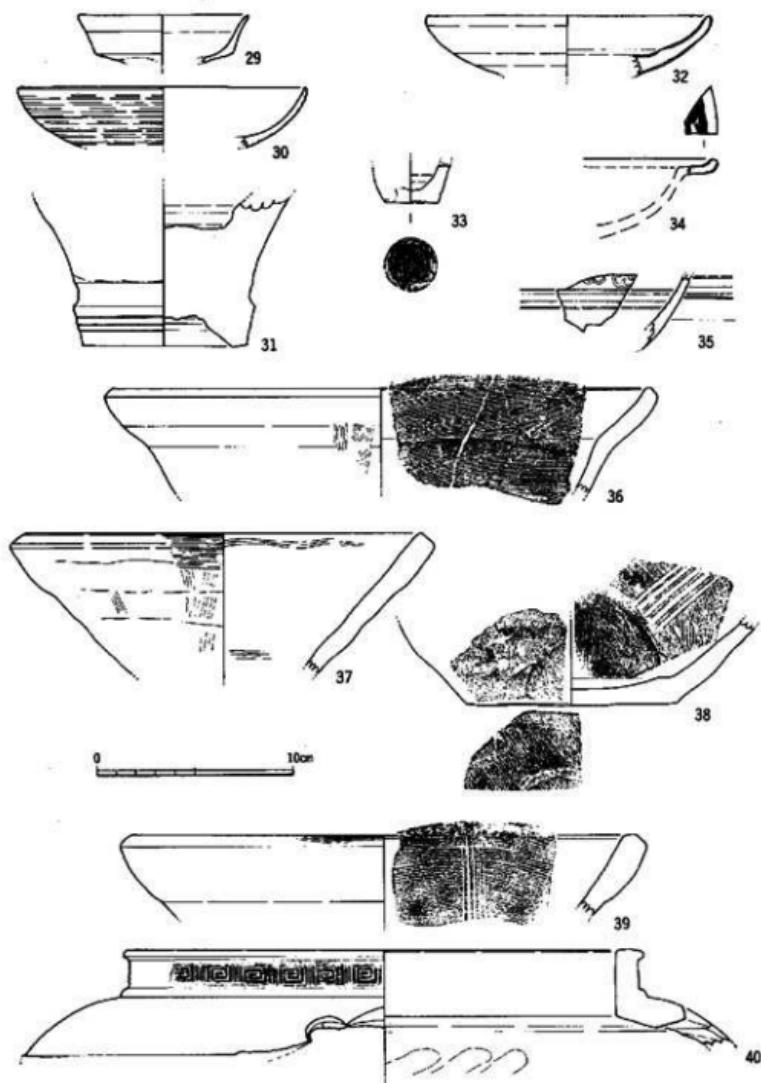


Fig. 61 12号溝遺物実測図 2 (1/3)

13号溝（0363）

調査区南西壁近くで、第2面道路に直交して検出された道路側溝である。第2面道路上で、溝の一部を確認し、トレンチをあけて確認、検出したもので、レベル的にも、また構造的にも、第2面道路の両側溝より先行する。

溝の構造は、10号溝・11号溝と類似する。溝本体部分の幅は、約25cmである。深さは、40~50cmで、延長が短いため判断がむづかしいが、南東から北西へ向って傾斜しているらしい。

出土遺物を、Fig. 63に示す。1~6…土師器、7~8…白磁、9~12…青磁、13…瓦、14…砂岩製毬球玉、15…土師質土器、16~17…備前陶器である。土師皿は、1~2で口径6.0cm、6.3cm、3~5で8.2~8.7cm、6は10.4cmをはかる。この他、銅鏡1枚が出土している（解説不能）。



(1)



(2)

Fig. 62 13号溝検出状況 (1)南東より (2)北東より

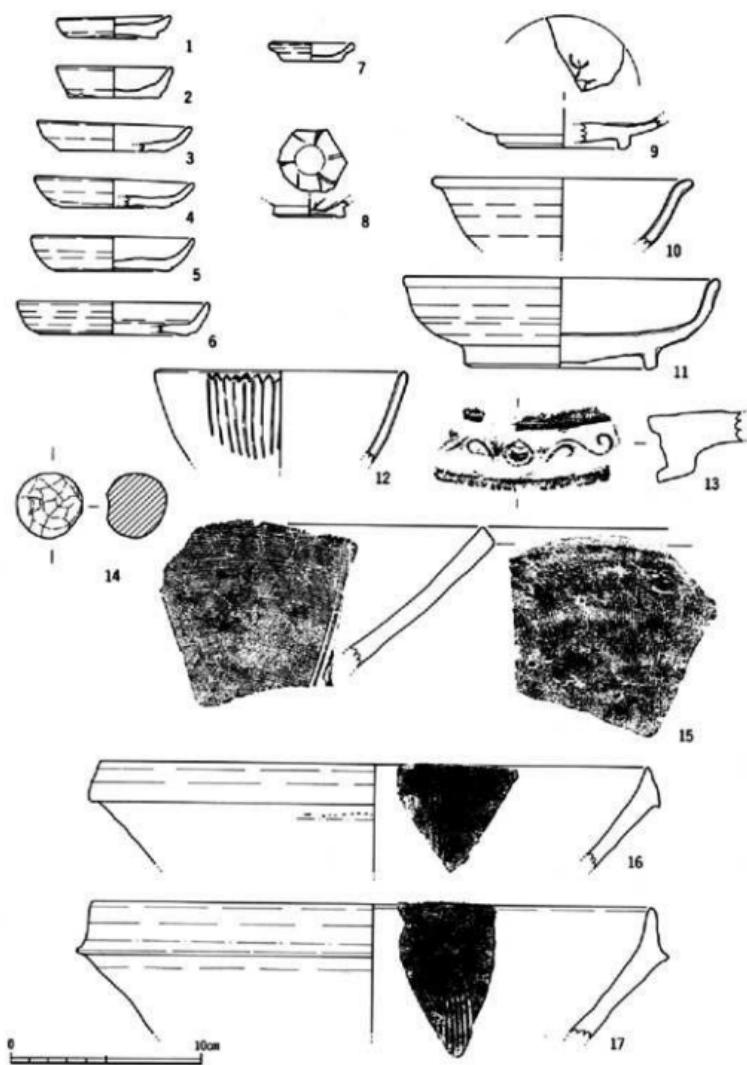


Fig. 63 13号墓遗物素描图 (1 / 3)

(2) 建物遺構

道路の北側には、掘立柱建物（ただし、復原できていない）、道路の南側からは集石遺構が検出されている。

道路北側の掘立柱建物は、一応復原を試みたものが一棟、柱筋の一部を推定しているものが若干ある（Fig. 50）。想定している柱筋は平行し、方位をN-45°30' - Eにとる。第2面道路にほぼ平行しているといえる。

4号集石遺構（0340）

第2面道路南側で検出した集石遺構である。幅95～110cm、深さ30～40cmの溝を「コ」字形に掘り、礫を充填している。所々に、長さ50cmをこえる扁平な石がみとめられるが、断面観察等を含めて、構造的に他の礫と変るところはない。

集石の範囲は、西辺5.5m、南辺4.7mをはかる。北辺は、近世の井戸に切られており、礫のつながりが追えないが、井戸の東側に若干みられる礫につながるとすれば、北辺は6.2mとなる。

集石の内側には、集石と方位を一致させて柱穴が3基みられる。東角の柱穴は、丁度トレチ内にあたっており、トレチでとばされたものとすると、柱穴4基が集石内部に1間×1間で整然と配されていることになる。

集石の東側には、8号集石遺構（0350）が位置する。4号集石遺構とは、溝を共有しないので単一の遺構でないことは明らかであるが、組み合わさって、4号集石遺構の東辺をなす可能性はある。また、8号集石遺構の南の延長上には、5号集石遺構（0341）があり、やはり一度の遺構になる可能性が考えられる。

出土遺物は、Fig. 65 に示す。1～8…土師器、9・10…瀬戸・美濃陶器、11…青磁、12・13…白磁、14…土師質土器、15…瓦質土器である。土師器皿は、1は口径7.6cm、器高1.55cm、2～6は口径8.2～8.8cm、器高1.3～1.7cmをはかる。环は、7が口径10.7cm、8は口径12.3cm、器高2.45cmをはかる。9・10はおろし皿で、見込みには、へらでおろし目が刻まれている。11の体部には、錦蓮弁文が陽刻される。12の口縁部は露胎で、いわゆる口禿げとなる。14は、土師質土器の破片を削って、円盤につくったものである。径4.2～4.4cmをはかる。15は、火舍である。口縁内面から外面は、丁寧にヘラ研磨され、菊花文のスタンプが打たれている。

以上の出土遺物は、溝を充填する礫に混入して出土したものである。



Fig. 64 4号集石道構造物検出状況（北東より）

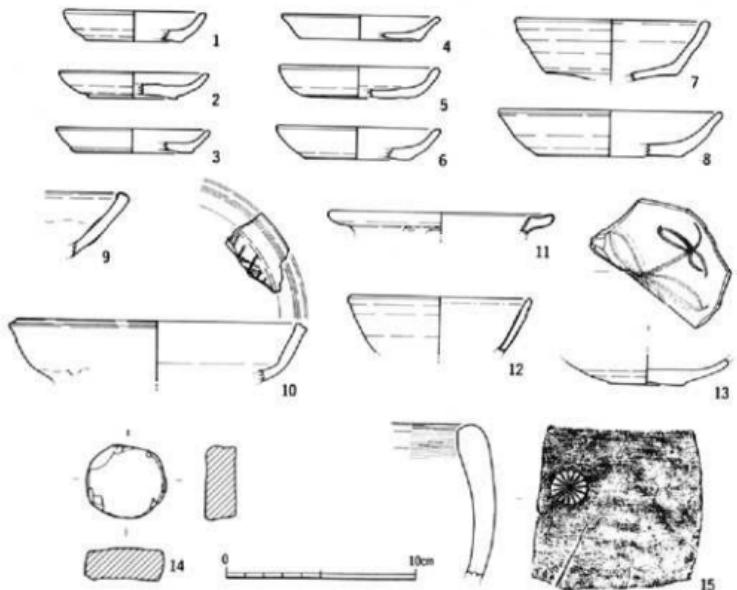


Fig. 65 4号集石道構造物実測図 (1/3)

(3) 土壙

第2面で検出した土壙は、すべて廃棄壙である。墓と考えられるものは、みられなかった。

87号土壙 (0172)

道路造構北側から検出した土壙である。直径約40cmの略円形を呈し、深さは14cmをはかる。

埋土上層には、完形品の土師器が、捨てられていた。

出土遺物は、少量の鉄釘を除けば、すべて土師器である。1は、口径6.0cm、器高1.75cmをはかる。口縁部に煤が付着する。2～8は、口径7.7～8.5cm、器高1.4～1.6cmをはかる。

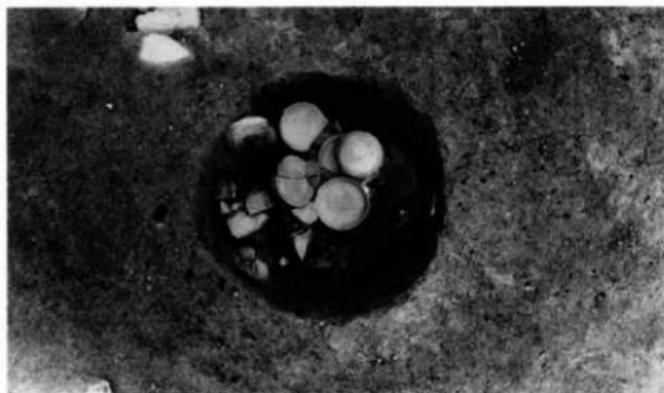


Fig. 66 87号土壙検出状況（西より）

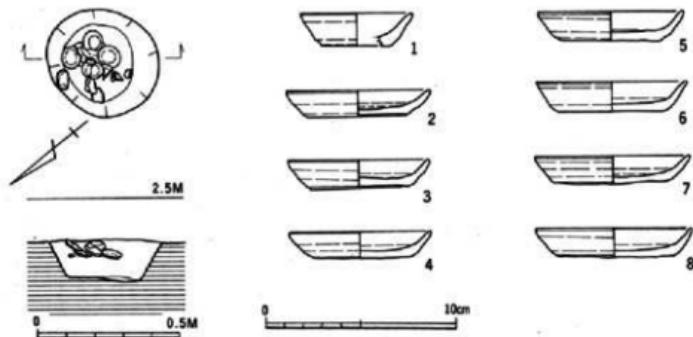


Fig. 67 87号土壙遺構実測図 (1/20)・遺物実測図 (1/3)

88号土壤 (0311)

道路遮構北側で、掘立柱建物に接して検出した遺構である。直径50cm前後の略円形を呈し、深さは約20cmをはかる。廐棄場である。

土壤埋土中から、砾とともに、土師器・天目・青磁・鉄釘・銅錢が出土した。

出土遺物の主なものを、Fig. 69 に示す。1～3…土師器、4…黒褐釉陶器（天目）、5…土師質土器である。土師器皿は、口径7.2cm、器高1.35cm-1.4cm、壺は口径12.4cm、器高2.4cmをはかる。この他、小片のために図示できなかったが、口縁部外面に雷文帯を巡らせる青磁碗片が出土した。また、銅錢では、「元豊通寶」（初説1078年）1枚が出土している。

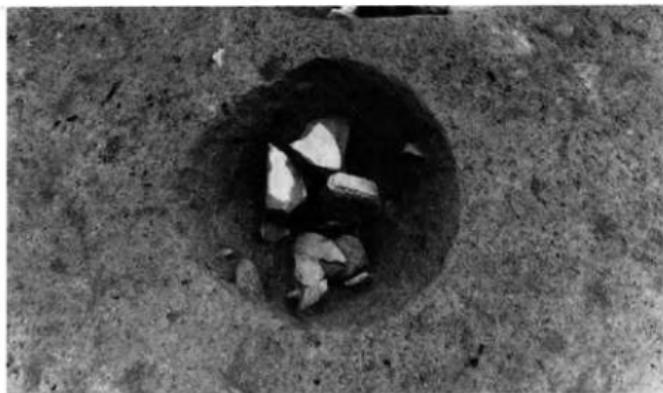


Fig. 68 88号土壤検出状況（西より）

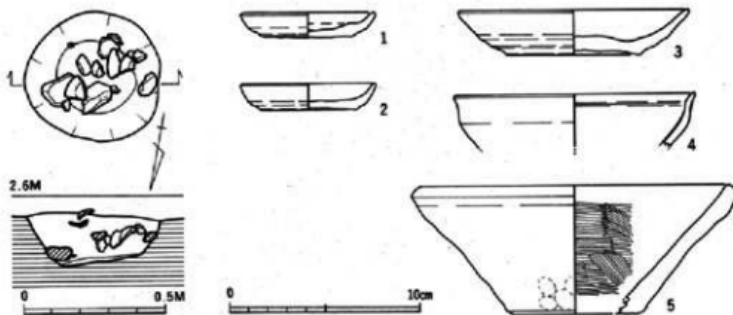


Fig. 69 88号土壤遺構実測図（1/20）・遺物実測図（1/3）

5. 第3面の調査

第2面から、70cm前後掘り下げる調査した遺構検出面である。標高は、1.8m前後をはかる。

第3面で検出した遺構は、溝、土壤、柱穴、集石遺構等である。

21号溝・22号溝と20号溝とは、道路の側溝であると考えられる。21号溝と22号溝とは近接し、おそらくは、22号溝から21号溝へ道路拡幅をともなった掘り直しがあったものと思われる。道路幅は、溝の心々間距離で、それぞれ約3.8m、約5.4mである。

道路遺構の北側には、ほとんど柱穴ではなく、その西端近くにおいていくらか見られる程度である。道路遺構の南側には、集石遺構と排水溝がみられる。排水溝は、道路遺構と方向を一にして縦横に組みあわされており、屋敷地内の建物割りに関連したものであろう。

土壤では、汚水を溜めたと思われる溜槽状の土壤が2基、切り合ってならんでいる。掘りかた内に、板と杭で長方形の枠をつくるものである。

第3面においては、全体に土中の温度が高く、レベル的には水がわからないにもかかわらず、木製品がよく残っていた。掘立柱の柱材も、3本が原位置をとどめていた。また、調査区北西辺の中程から北東よりで、第3面からやや上位で、鳥帽子が出土した。鳥帽子は、上下を縁にはさまれてつぶれており、縁にへばりついた状態で発見された。現場で布痕跡を追跡した所見では、長鳥帽子と思われる。少なくとも、2枚は確認された。遺存状態が悪く、鉢巻部分しか取り上げられなかった。



Fig. 70 第3面遺構全景（北西より）

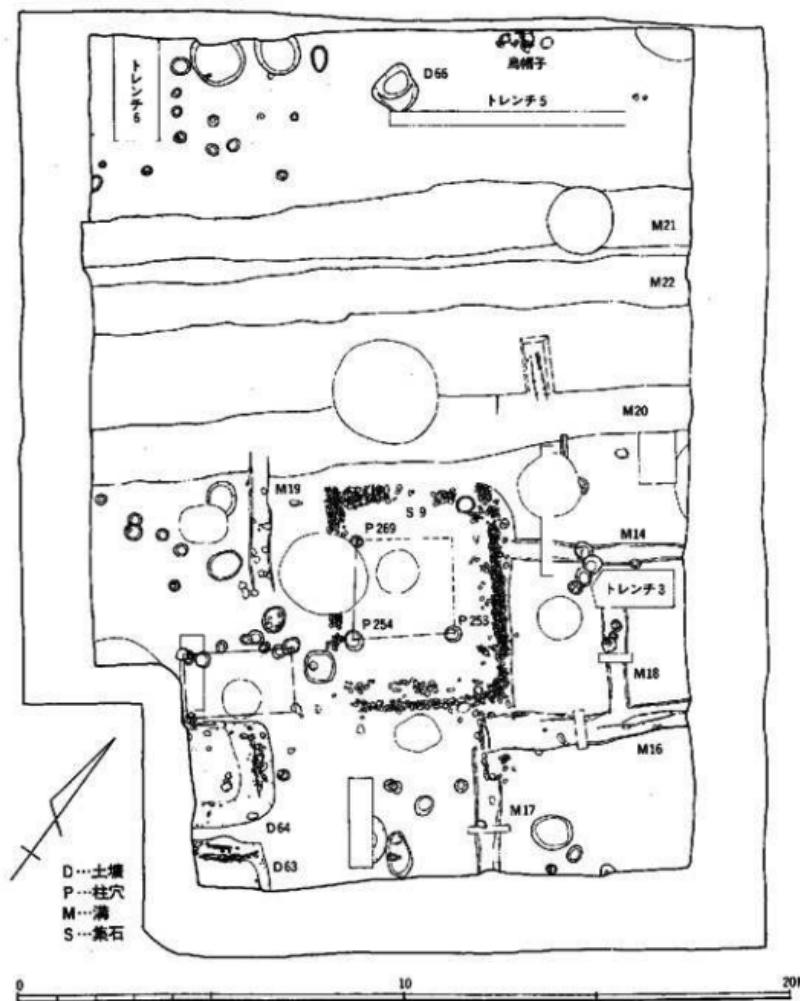


Fig. 71 第3面遺構実測図 (1/150)

(1) 第3面道路

20号溝と21号溝・22号溝に両側を画される道路である。21号溝と22号溝の関係については、両者が極めて近接する点、両者は構造的には同じで、両方とも道路側溝と見做される点から、同時存在したものではなく、一方から他方へ、掘り直されたものであると考えられる。両者の間に直接的な切り合い関係は、認められない。そこで、両者の細かい相違点を抽出し、それを道路の反対側を画する20号溝と比較すると、次のことがわかる。1、22号溝は、最初は網代状に組んだ板材を側壁とし、その後一枚板を横に立てる構造へと変化した。2、21号溝には、網代状の板組みは、みられない。3、20号溝では、その南側壁において部分的に網代状の板組が残り、それが廃されて、すぐ北側に板を横に立てて杭でおさえる側壁がつくられている。これをまとめると、最初網代側壁の側溝がつくられ、やがて板材を横向きに立てる板側壁の側溝に変化しており、したがって、22号溝を廃して、21号溝を新たに掘り直したことがわかる。これによって、道路幅は、約3.8mから約5.4mに拡幅される。なお、この拡幅された道路幅は、第2面道路幅に近似したものであり、この点からも上の判断が裏付けられる。

第3面道路上は、砂利を含む泥土層がうすくおおっている。これは、側溝よりかき上げられた土と思われ、木製品、貝殻などの有機質遺物が多くまじる。

道路部分の土層断面を取ると、道路上面を覆う泥土層の下には、整地層はみられない。また、側溝の断面もみられず、第3面道路の下には、道路は營まれていないことがわかる。したがって、20号溝と22号溝で画された幅3.8mの道路が、この地点における道路の初源であり、まもなく幅5.4mに拡幅され、その後連続と第1面道路まで続くことになる。

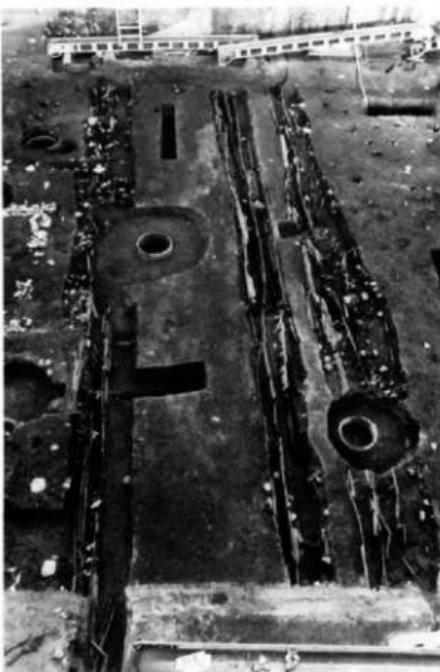


Fig. 72 第3面道路（北東より）

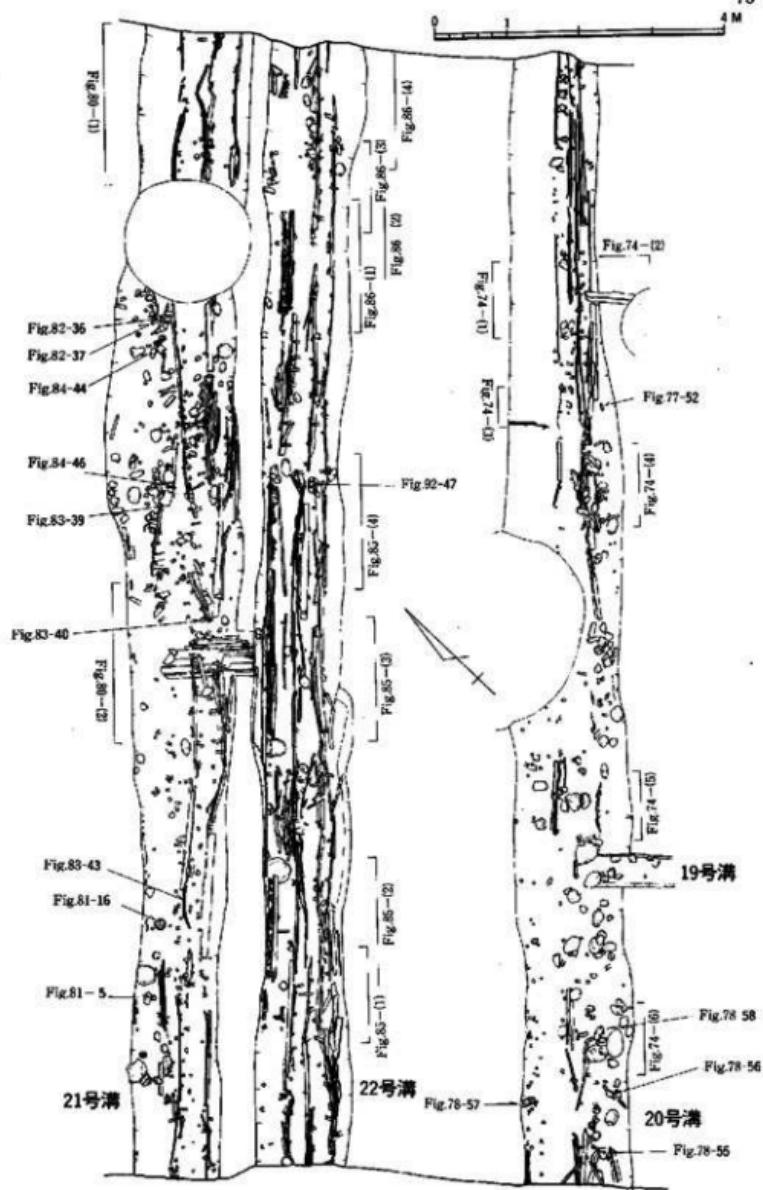


Fig. 73 第3面道路平面図 (1/80)

20号溝 (0417)

第3面道路の南を画する溝である。U字形の掘りかたに、板材を横向きに立て、その内側を杭でおさえる。掘りかたの上端は、120~165cmではかる。側溝部分は、何回かの修復、作り直しが重複し、溝幅を特定しにくいが、最終的な溝部分が確認できた個所では、幅16cmをはかる。南西から北東へ傾斜している。

溝の構造を仔細に観察すると、溝の南側において、網代に組まれた板材が散見される (Fig. 74-4・5)。網代は、下端は完存し、上端を欠く。下端のレベルはそろっており、溝内側にむかって傾斜し、ほとんど水平に近く倒れているものもみられる。また、下端のレベルは、溝底に対して比較的高い。後述する様に、22号溝においても網代に組んだ溝側壁が検出された。22号溝においては、網代に板材を組む側壁は、最も早い段階のものと判断された。これらを考えあわせると、20号溝においても、当初は網代の側壁が用いられたものと思われる。この網代壁が倒れ込んだ後、改めて溝が掘削され、以後は網代ではなく、細長い板材を横にねかせて立て、これを内側から木杭で押さえて倒壊を防ぐ構造に変化したものと考えられる。その後、幾度かの作り直しがなされているが、構造的には変化していない。主軸方位は、N-51°30'-Eにとる。

20号溝の東側中央部辺りには、南から櫛がとりついている。第2面道路11号溝にかけられていた櫛と場所的にはほぼ同じだが、縦密には20cmほど東にずれている。櫛は、幅15cmほどのV字溝を掘り、その壁に2枚の板材を貼ったもので、板材もV字形にあわされている (Fig. 74-1・2)。櫛は、南から溝に向って水をおとすが、南側は近世の井戸に切られ、残っていない。

また、西側の中程には、南から19号溝がとりつく。これは、側壁に板を立てるもので、南から道路側溝へ向って導水した排水溝である。排水溝の南端は、自然に上っている。

出土遺物の一部を、Fig. 75~78に示す。内訳は、1~24・32~34…土師器、25…白磁、26~29…青磁、30…黒褐釉陶器、31…褐釉陶器、35・36…土師質土器、37…須恵質土器、38~42…真實土器、43~51…石製品、52・55~58…木製品、53・54…漆器である。土師器皿は、口径6.1~9.2cmをはかるが、1の6.1cm、2の6.7cm、3~14の7.4~8.6cm、15~16の9.2cmにわかる。1は、口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使われたことを示している。15の内面には、同心円もしくは渦巻と思われる墨書きがみられる。环は、17~23が口径11.8~13.1cm、24は14.5cmをはかる。25は、口縁部を露胎とする、いわゆる口禿の皿である。29の体部外面には、錦蓮弁文がみられる。32~34は土鍋で、外面には煤が付着している。37は、車輪系須恵器である。43は、滑石製石鍋である。44~51は、砂岩を槌打して球形に作った毬球である。52は、表裏から刀子で刻みを入れた、薄い板製品である。下端中央に孔がみられる。用途不明であるが、穿孔に注目すれば、他の加工板材と組み合せになって、石塔形木製品を形作る相輪にあたる部分と思われる。53は皿で、内面には朱漆、外面には黒漆をかける。54は内外とも黒



Fig. 74 20号溝検出状況

- | | |
|----------------------|----------------------|
| (1) 築検出状況（北西より） | (4) 網代板組（南東より） |
| (2) 同上 （北東より） | (5) 同上 |
| (3) 石塔形木製品出土状況（北西より） | (6) 下駄・板草履出土状況（南東より） |

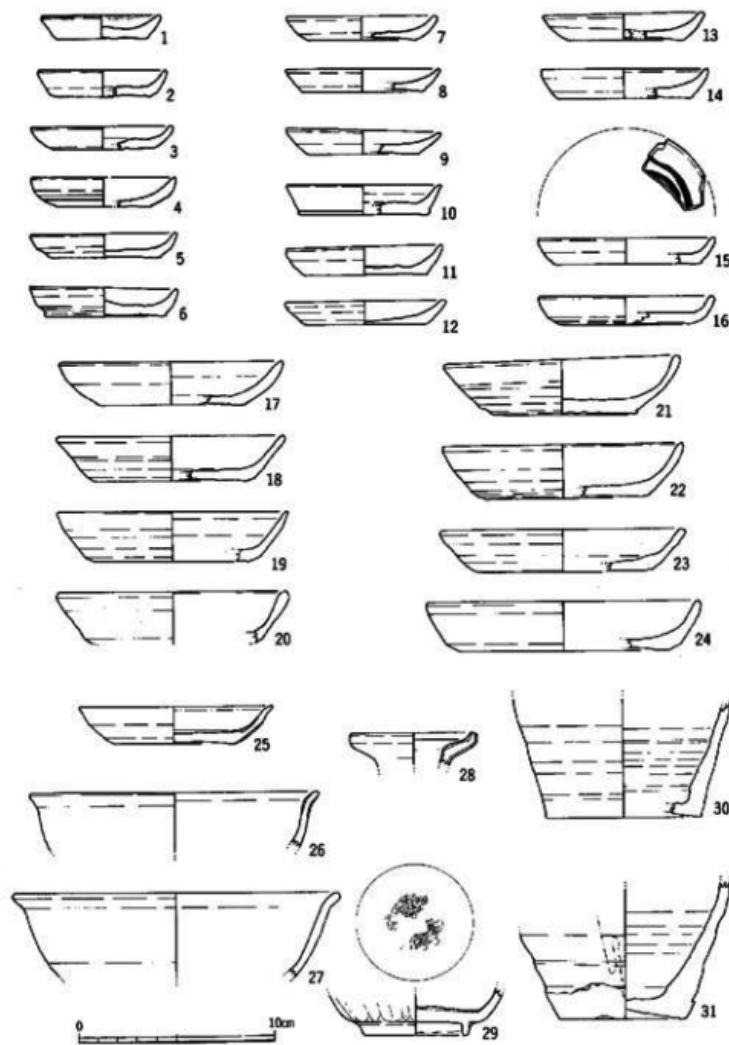


Fig. 75 20号满遗物实测图 1 (1/3)

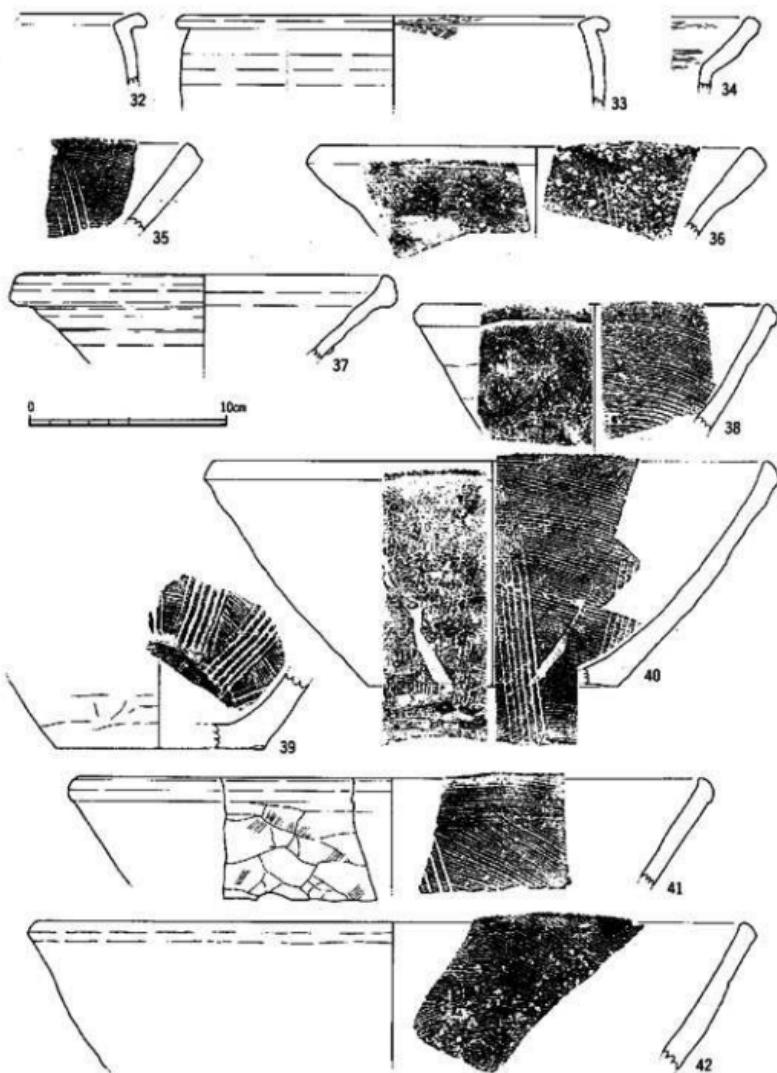


Fig. 76 20号溝遺物実測図 2 (1 / 3)

漆を施す。見込み中央に朱漆で文様を描いており、その朱漆の一部がかろうじて残っている。55～58は下駄である。57は、一木から歯を削り出す。他は、台と歯は別作りで、歯は嵌め込み式になっている。その他、「元豊通寶」(初銅1078年)が2枚出土している。

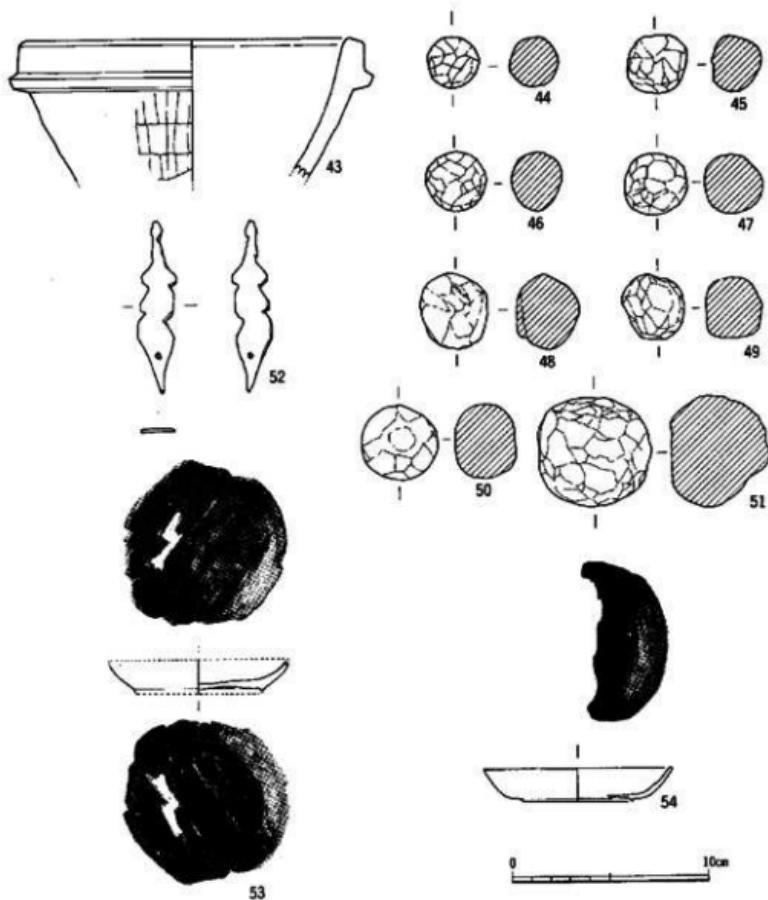


Fig. 77 20号満遺物実測図 3 (1/3)

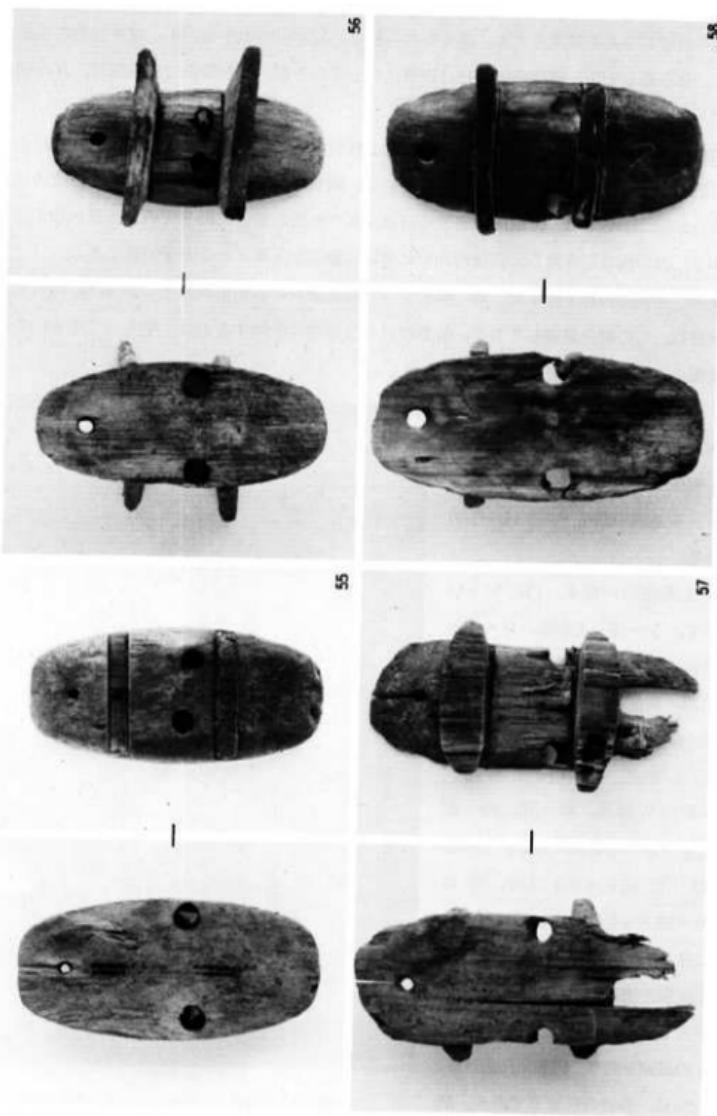


Fig. 78 20号 sondage出土物(約1/4)

21号溝 (0418)

第3面道路の北を画する側溝である。U字形の掘りかた内に、板材を横にねかせて立て、内側から杭でおさえる構造をとる。掘りかたの幅は、120~187cmをはかる。度々にわたる掘り直しと、作り直しとで、溝部分の板材は複雑になっているが、最終段階での溝幅は、45~52cm程度である。主軸方位は、N-50°40'-Eにとる。

溝の掘りかた内にみられる木杭は、おそらく板材を押さえていたものであり、掘りかえ・修復以前に、板材は抜き取られたものと思われる。調査時に板材で側壁をつくっていた溝は、掘りかたの南によっており、最終段階での溝は、掘りかたの南辺に沿っていたと思われる。この点から、21号溝は掘り直し・修復のたびに南に移動したと考えることが可能である。

また、中央部の最下部には、溝と直交する方向に数枚の板が敷かれている (Fig. 80-2)。溝の杭材は、この材を貫通しており、板敷部分が21号溝に先行するのは、明らかである。この板敷造構は、22号溝に行き止まっている。確認のために、板敷造構の延長方向の道路上にトレンチを入れたが、板敷造構の延長はみられなかつた。板敷造構の性格・実態は、不明である。

出土遺物の一部を、Fig. 81~84に示す。1~16…土師器、17~18…青白磁、19~20…青磁、21~22…白磁、23…象嵌青磁、24~28~29…瓦質土器、25…漆器、26…骨製品、27…土製品、30…褐釉陶器、31~37…石製品、38…瓦、39…鹿角、40~47…木製品である。土師器皿は、口径7.6~9.1cm、高さは12.0~13.8cmをはかる。15は耳皿風に口縁をひずませる。16の内面には、山水画風の墨書きがみられる。25は、内外とも黒漆をかける。28~30は、破片の周囲を削り、円盤に仕上げる。29~34は、砂岩の毬球玉である。35



Fig. 79 21号溝・22号溝検出状況（北東より）



(1) 東端部(北西より)



(2) 溝下部板敷(北西より)

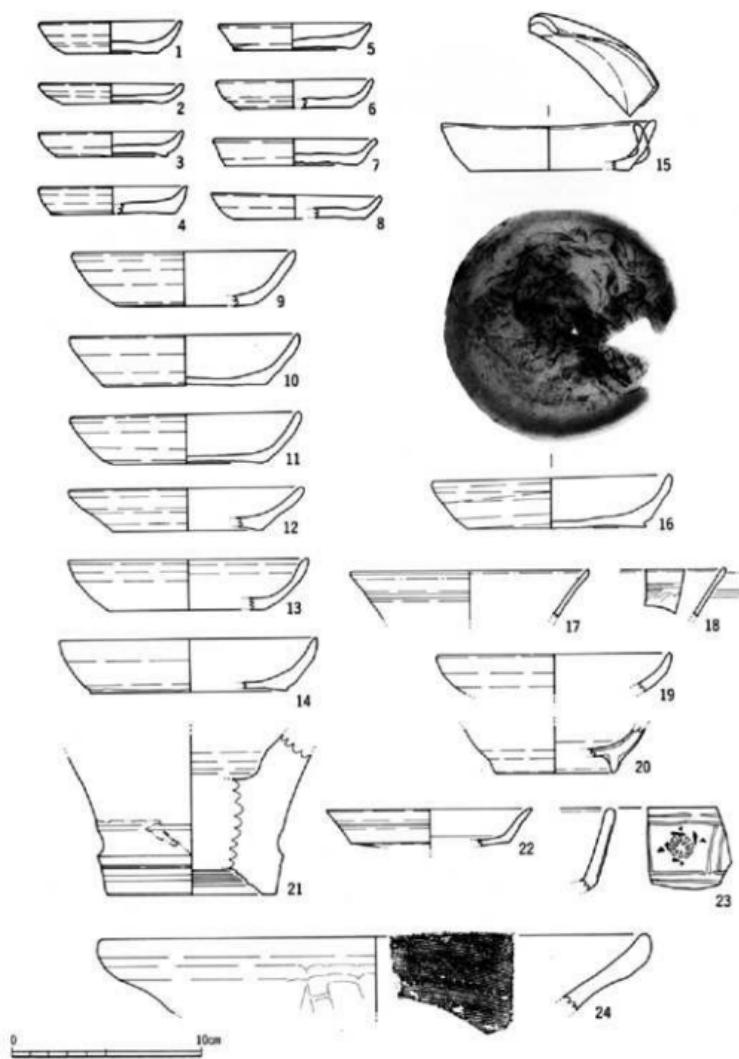


Fig. 81 21号满墓物实测图 1 (1/3)

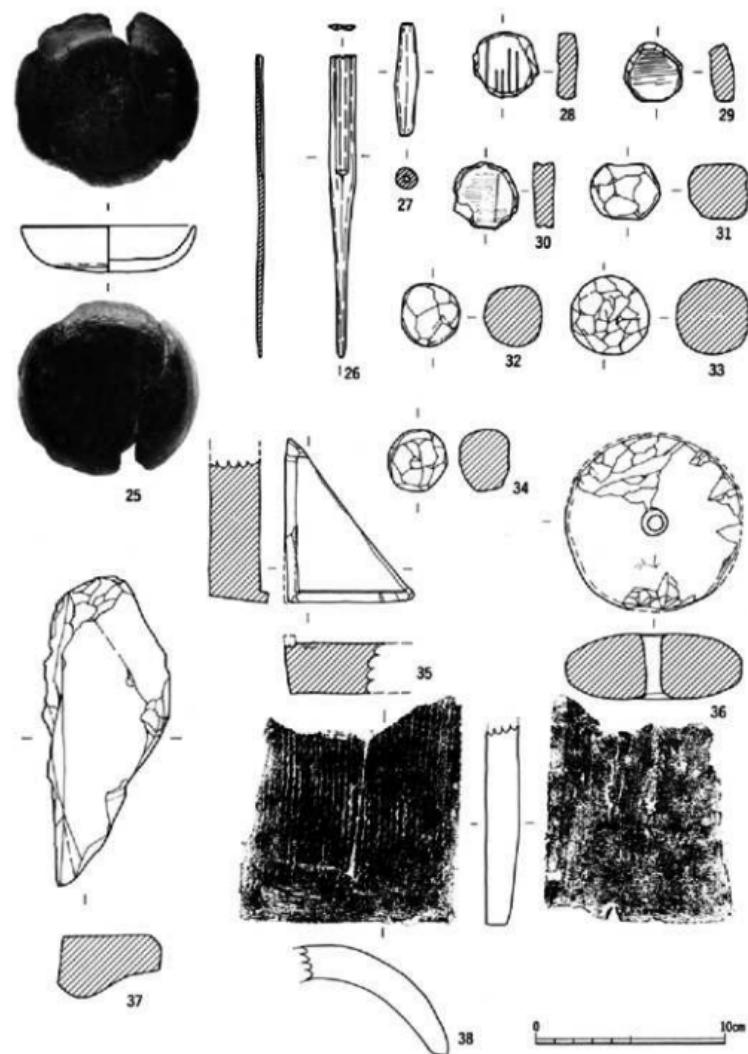


Fig. 82 21号構造物実測図 2 (1/3)

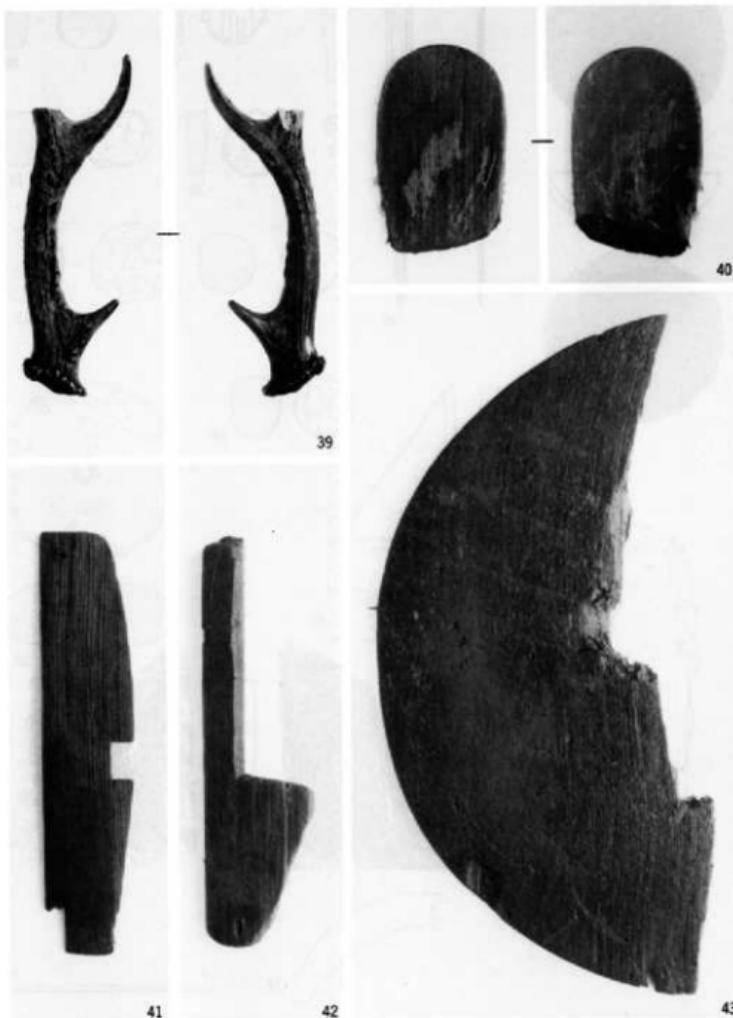


Fig. 83 21号溝出土遺物1（約1/3）

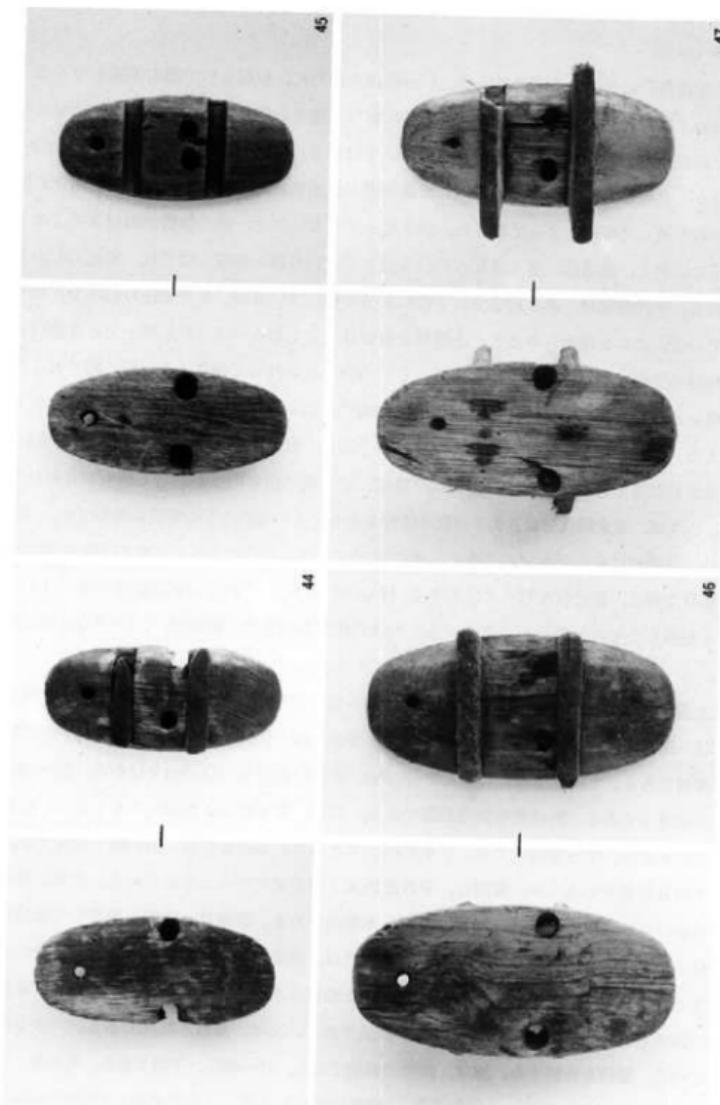


Fig. 84 21号出土遺物2 (約1/4)

は、硯である。36は滑石製石錘。37は磁石である。41は、草履状板製品である。この他、銅鏡が16枚出土している（内訳は、P.129表3参照）。

22号溝（0439）

第3面道路の北を画する側溝である。U字形掘りかたに、板材と杭で溝の側壁をつくる。掘りかたの上端は105~135cmをはかる。側溝の板材は、度々の作り直しのため、複雑になっているが、最終段階と思われるもので、溝幅25cm弱をはかる。主軸方位は、N-51°20'-Eである。

掘りかた北壁から、板を網代組みにした溝側壁が検出された。これと対になる反対側の側壁が溝の作り直しの板材によって壊され、全く残っていないこと、他の側壁が板材と杭よりなっているのに対し、構造的に全く異なっている点から、22号溝の側壁の中では、最初のものと考えられる。網代側壁は、溝の約3分の2にわたって残っているが、その構造は細部でかなり異なっている。これを西からみると、①板材を矢板状に立てならべる（Fig. 85-1）。②網代に組んだ板材の下部に横にわたした板をあて、その内側に杭を打って押さえる（Fig. 85-2）。③背面に横にわたした板を置き、その前面の下部に網代を組んだ板をあて、木杭で網代・横板ともに押える（Fig. 85-3）。④網代に組んだ板材の上端に、横に板をあてる。ただし、この横板は、後になされたとも思われる。また、網代下端に、一部網代板に引っかかって横板がたおれいるが、これが、本来網代をおさえていた可能性もある。この場合、②の構造に類似する。（Fig. 85-4）。⑤網代に組んだ板材の前面に、細竹をびっしりと立てならべる。その下部を横にわたした板材で押え、更に杭を打って固定する（Fig. 86-1・2）。これらの構造細部の違いは、作業単位を反映したものと思うが、そうすると一回の作業単位または範囲は、1.5~2.7mの長さとなる。

出土遺物の一部を、Fig. 87~92に示す。1~12…土師器、13~15…青磁、16…青白磁、17~21…瓦質土器、22…備前陶器、23~25…石製品、26…骨製品、27~33・35~48…木製品、34…漆器である。土師器皿は、口径7.5~9.2cm、环は口径12.2~13.3cmをはかる。23・24は、砂岩の鉈球玉である。25は滑石製の石錘である。26は、骨を削って面取りするもので、左右及び下に孔をあけ、中を空洞にする。丁寧に面取りされている表面には、細刻線で施文する。中央の文様は花菱であろうか。周囲は、平行沈線文・格子文でびっしりとうめる。全面に濃褐色の漆をかけている。用途不明。28は、車輪状木製品である。表面は、圓線を墨書して周縁帯と内区に2分割する。内区には花文を描く。周縁帯は、墨書がうすれ、はっきりと見えないが、木葉文と珠文（？）を配している。表から裏へ、車輪状に木棒を通す。34は、椀である。黒漆地に朱で浜千鳥文を描く。35・40は草履状木製品である。36は、舟形木製品である。一木を抉り込んで作る。籠側を折損する。38は、曲物の底板である。41~48は、下駄である。その他、「開元通寶」（初鉄621年）1枚、「皇宋通寶」（初鉄1039年）1枚、「嘉祐通寶」（初鉄1056年）2

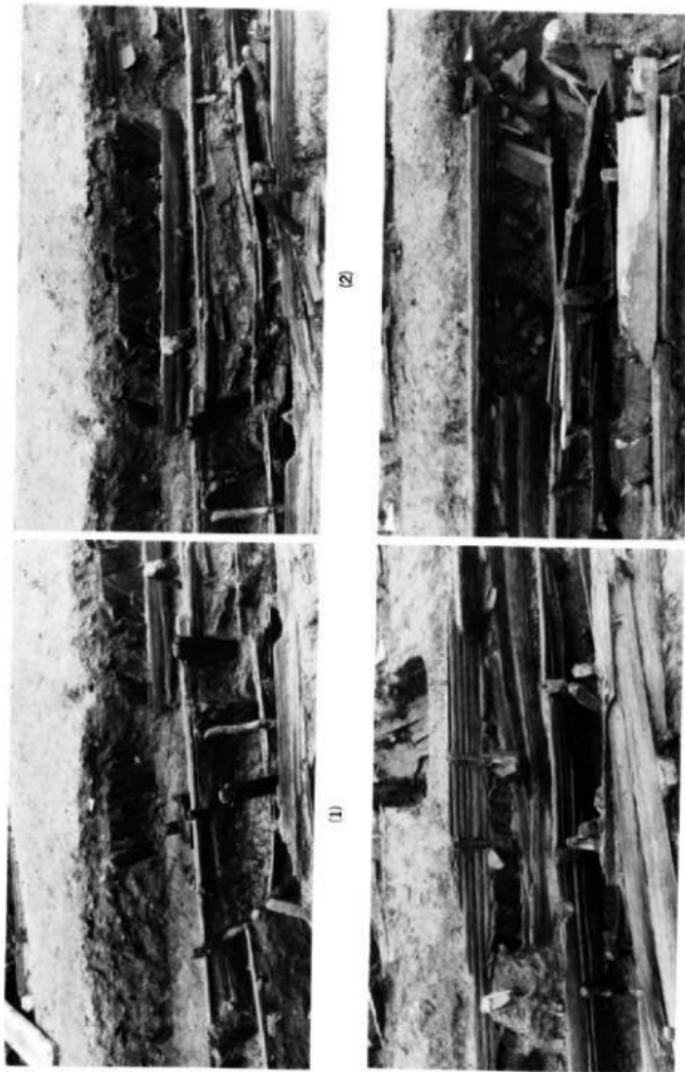


Fig. 85 22号溝出狀況 1 (写真1)～(4)中央、南東より)



(2)



(4)



(1)



(3)

Fig. 86 22号機出状況2 (1)(3)(1)-(4)號、南東より)

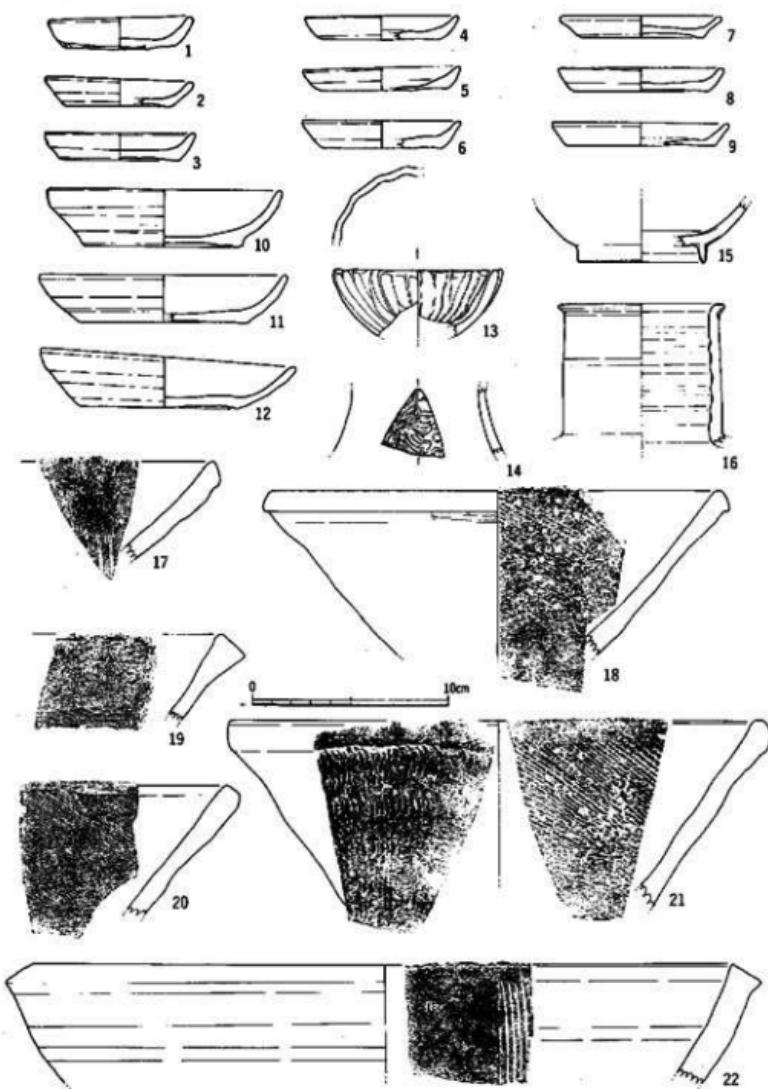


Fig. 87 22号溝遺物実測図 1 (1/3)

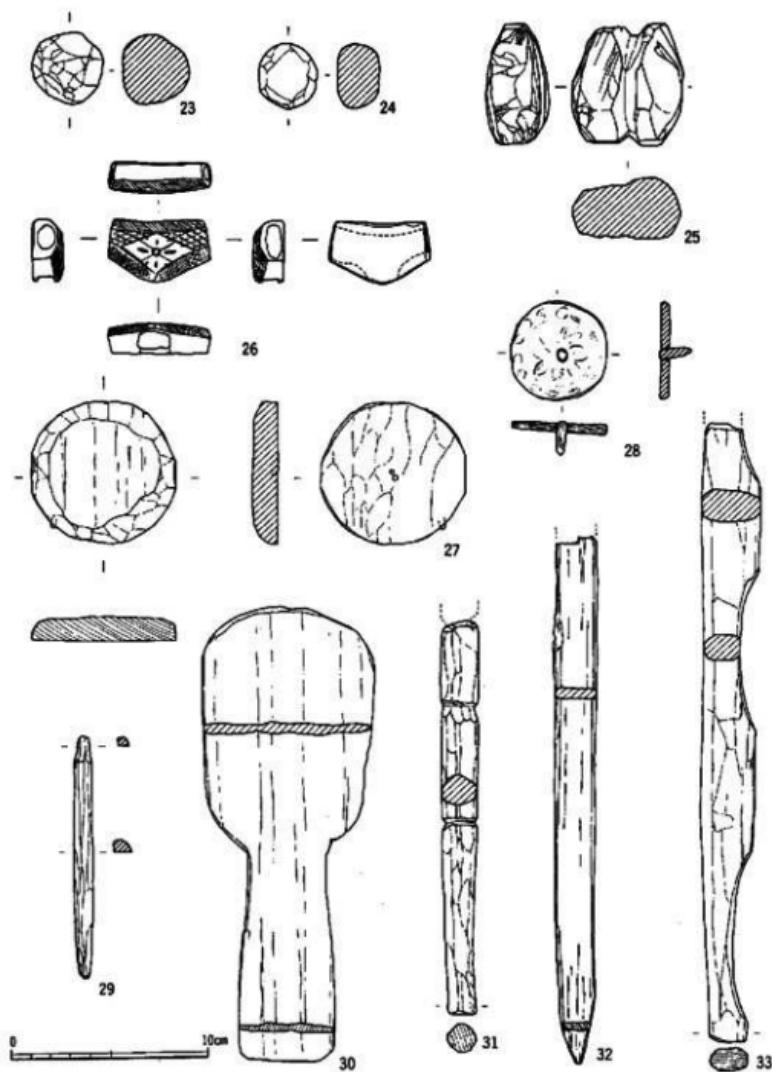


Fig. 88 22号溝遺物実測図 2 (1/3)

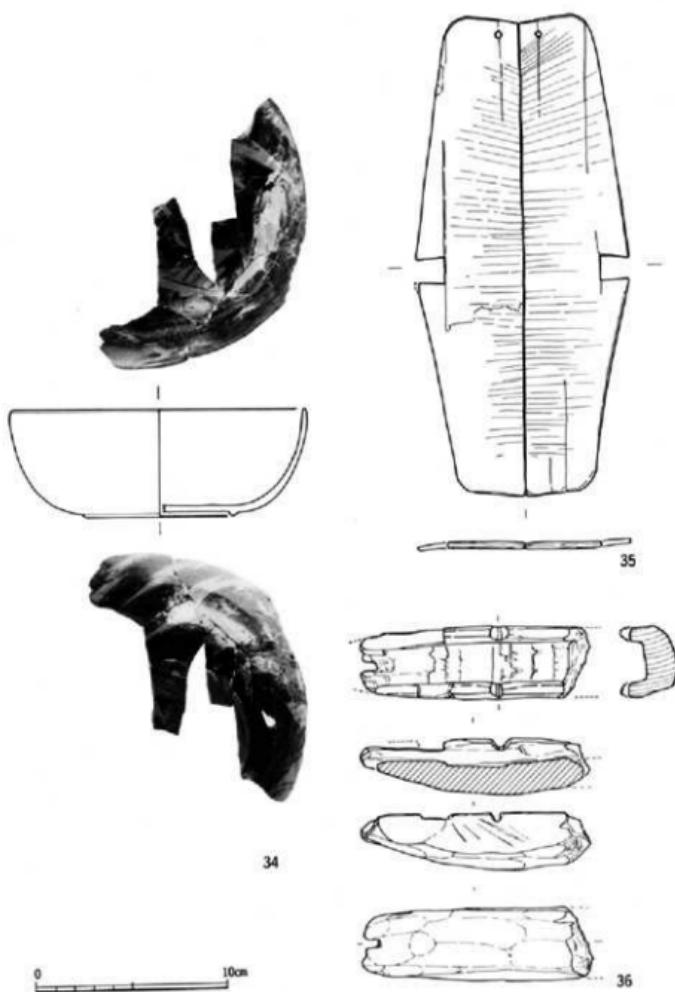


Fig. 89 22号墓遺物実測図 3 (1/3)

枚、「治平元寶」(初鋤1064年) 1枚、「元豐通寶」(初鋤1078) 3枚が出土している。

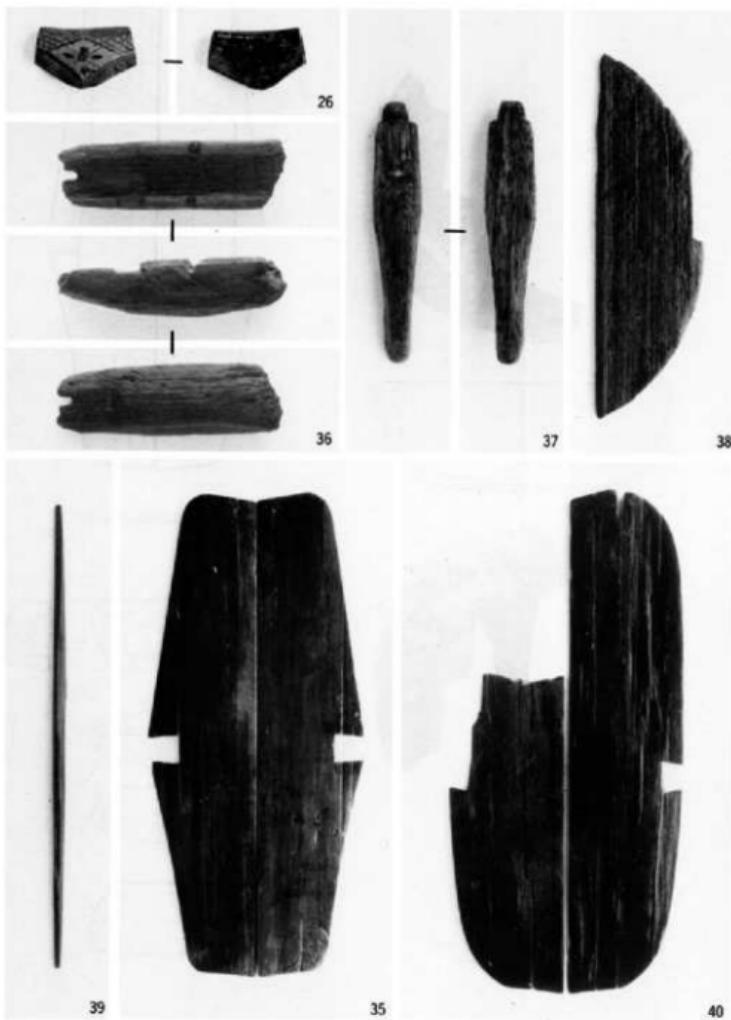


Fig. 90 22号溝出土遺物 1 (約 1 / 3)

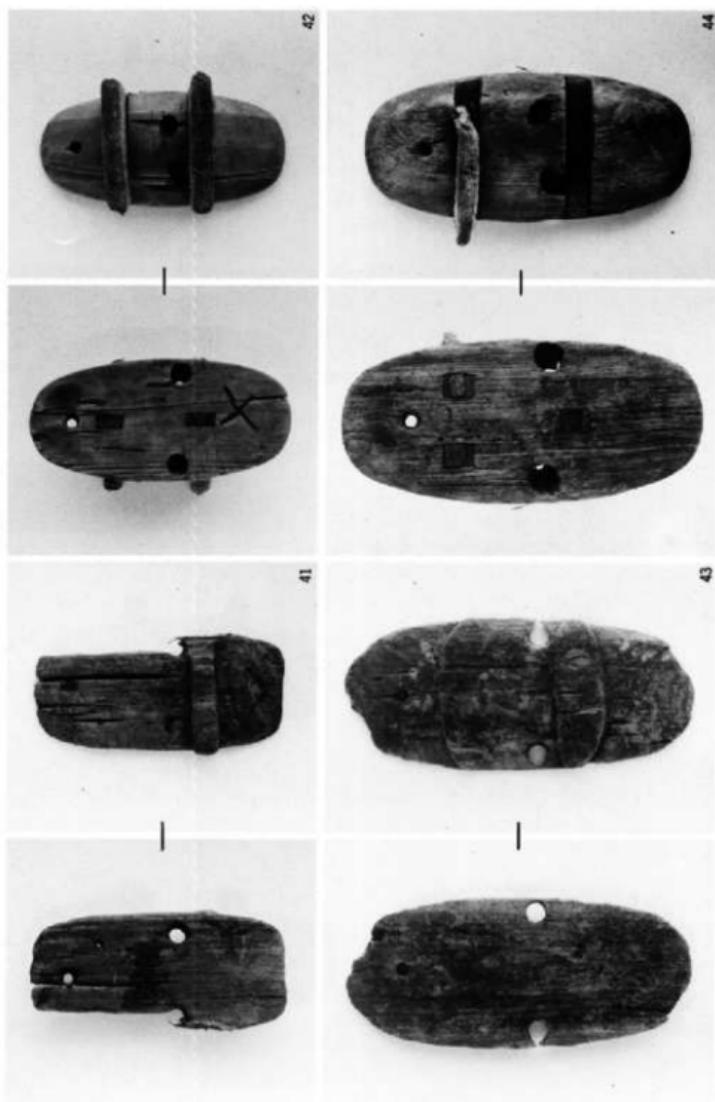


Fig. 91 22号溝出土遺物2 (約1/4)

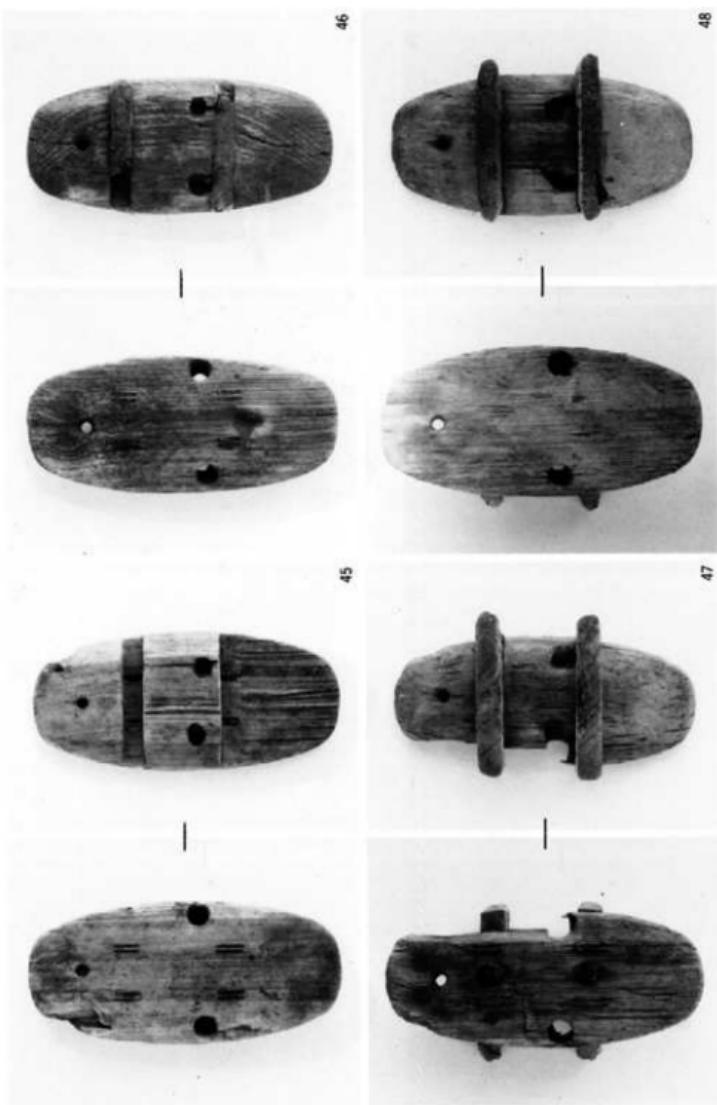


Fig. 92 22号墓出土物3 (约1/4)

(2) 排水溝

第3面道路の南側には、9号集石遺構を中心として、排水溝が配されている (Fig. 71)。以下、それらについて、略述する。

14号溝 (0386)

9号集石遺構の東辺からびる、素掘りの溝である。幅37.5~50cm、深さ5~7cmをはかる。9号集石遺構掘りかたにとりつく南西から、北東側へ傾斜している。雨水処理溝であろう。

遺物は、小片のため図示していない。土師器・白磁・青磁・陶器・須恵質土器・瓦質土器等が出土し、青磁には輪廻文文の碗片が、白磁には口禿げの皿片が含まれていた。

16号溝 (0376)

9号集石遺構の東隅から北東へのびる溝である。両側に板を立て、杭で押さえている。幅90cmをはかる。溝の南西端は、板を立てて閉塞している。また、これにそって、コ字形に礫を並べている。この部分から排水したものであろう。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・土師質土器等であるが、小片が多く、土師器を図示するにとどまった。Fig. 95、1~19は土師器皿で、口径7.2~8.3cm、器高0.9~1.5cmをはかる。坏は、20~22が口径11.2~11.7cm、器高2.3~2.85cm、23が、口径13.0cm、器高2.35cmをはかる。なお、青磁には輪廻文文碗が、白磁には口禿げの皿が含まれていた。

17号溝 (0374)

16号溝の端部から、これと直角に南東にのびる溝である。素掘りの溝で、幅55~70cm、深さ5cm前後をはかる。傾斜はほとんどみられない。形の上では16号溝に切られるが、おそらくは同時に營まれていたものであろう。

出土遺物の主要なものを、Fig. 96に示す。1~10…土師器、11…白磁、12~18…青磁、19~20…褐釉陶器、21~23…須恵質土器、24~25…瓦質土器である。土師器皿は、口径7.5~9.1cm、器高1.0~1.2cm、坏は口径13.8cm、器高2.2cmをはかる。11は、口縁を露胎にする口禿げの皿である。17の外底部には、「十」の墨書きがみとめられる。23の外底部には、回転糸切り痕がみられる。

18号溝 (0377)

14号溝と16号溝をつなぐ溝である。素掘りの溝で、幅45~65cm、深さ10cmをはかる。溝底はほとんど水平であるが、14号溝の方が16号溝よりも溝底の標高は高いため、水は14号溝から18号溝を通って16号溝に流れる。

出土遺物は、Fig. 98に示している。1~8…土師器、9…瓦器、10…白磁、11…青磁、12…須恵質土器、13…瓦質土器。土師器皿は、口径7.5~8.5cm、器高0.9~1.5cm、坏は、口径12.3cm、器高2.3cmをはかる。9は楠葉型瓦器である。10は、口縁部を口禿げにする。



(1)北より



(2)南東より

Fig. 93 14・16~18号溝検出状況

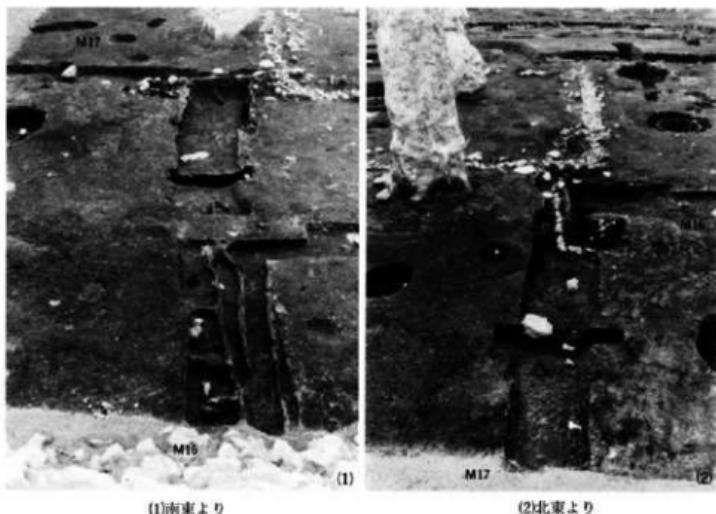


Fig. 94 16・17号溝検出状況

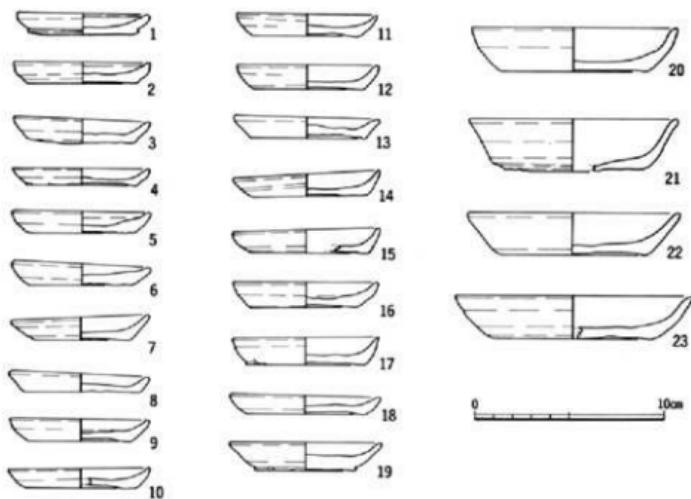


Fig. 95 16号溝遺物実測図 (1 / 3)

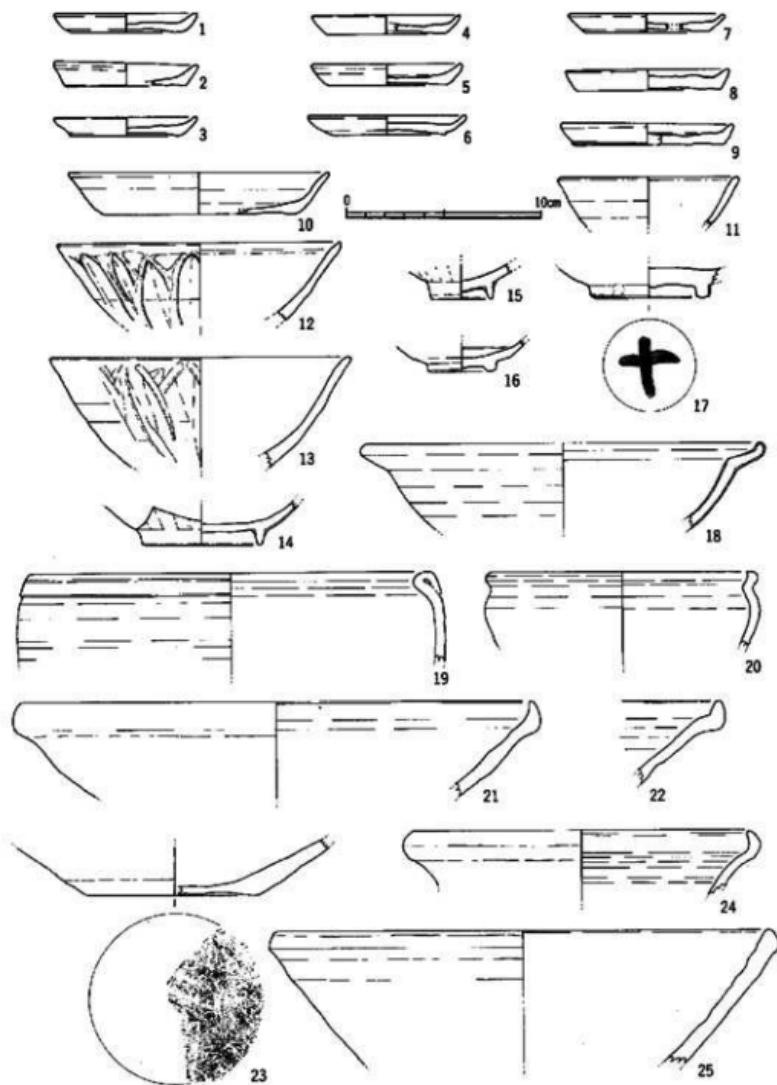


Fig. 96 17号溝遺物実測図 (1 / 3)



Fig. 97 18号溝検出状況（北より）

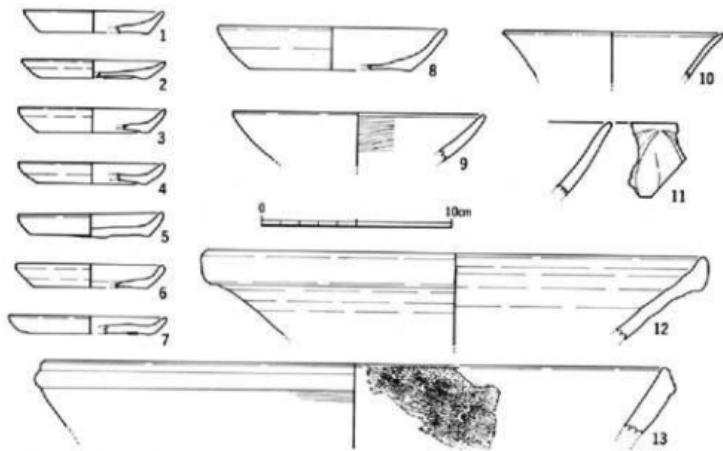


Fig. 98 18号溝遺物実測図（1/3）

(3) 建物遺構

第3面道路の南に接して、9号集石遺構が検出された。

9号集石遺構 (0387)

浅い溝を掘り、その中に砾を充填するもので、ほぼ長方形に巡っていた。集石は、その外側で長辺5.9m、短辺4.25mの長方形をなし、集石列の幅は、35~50cmをはかる。北西辺の中央と、南西辺の南隅寄りに、集石の見られない部分がある。あるいは出入口にでもなろうか。

集石で囲まれた内からは、柱穴が3基検出された。3基の柱穴は、集石列と方向をあわせており、集石遺構の上部構造にかかわるものと思われる。ただし、北角にあたる柱穴は、随分と探したが、ついに検出できなかった。

9号集石遺構南隅の集石列の切れ目の正面には、1間×1間(1.6m×2.8m)の礎石立ちの建物が推定できる(P.73, Fig. 71)。この切れ目に集石遺構への出入口を想定すれば、出入口前面に屋根がかかる構造となろう。

出土遺物の内、図化したものをFig. 100に示す。内訳は、1~13…土師器、14~15…青磁、16…白磁、17…瀬戸・美濃陶器、18…瓦質土器、19…須恵質土器である。土師器皿は、口径7.8~8.8cm、器高0.9~1.7cmをはかる。壺は、8~12で口径12.4~13.0cm、器高2.2~2.9cm、13は口径13.7cm、器高2.9cmをはかる。11~12の口縁部には、煤が付着している。17は、水注である。口縁部と体部下半を欠く。肩部と胴部に、平行沈線を施す。灰釉が施されている。この



Fig. 99 9号集石遺構検出状況（北東より）

他に、銅錢が4枚出土している。内訳は、「開元通寶」(初鑄621年)1枚、「皇宋通寶」(初鑄1039年)1枚、「聖宋元寶」(初鑄1101年)1枚、解説不能1枚である。

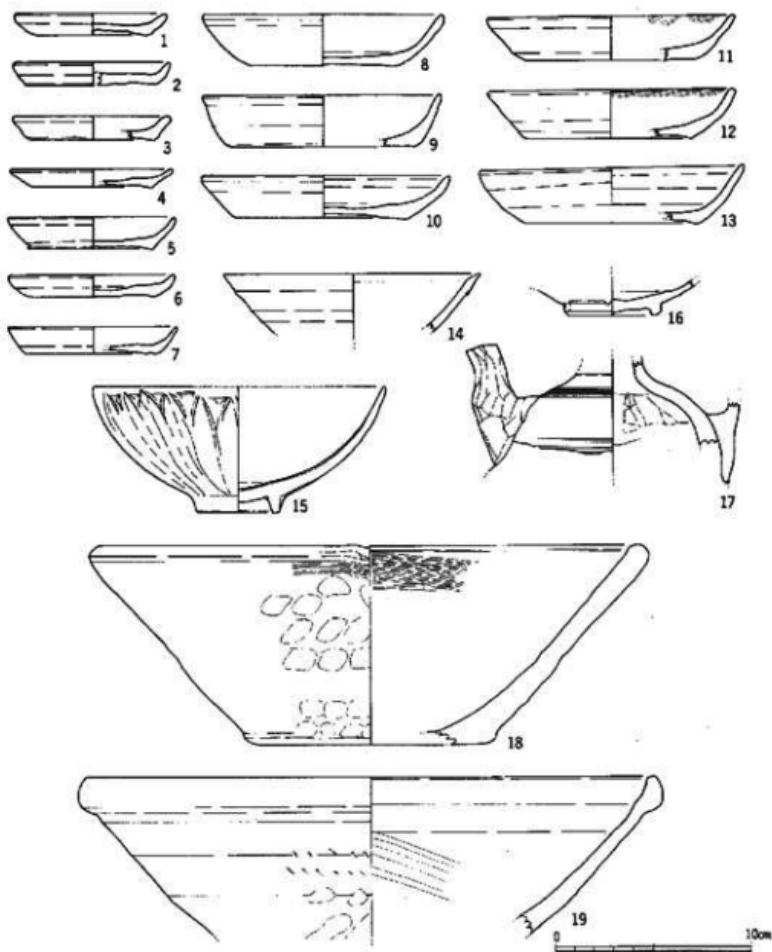


Fig. 100 9号集石造構造物実測図 (1/3)

(4) 土壌

第3面からは、廃棄場・溜枡状土壌などが検出された。

63号土壌 (0396)・64号土壌 (0397)

第3面南隅近くで検出された土壌である。2基がならんで検出されたが、壁面の土層観察から、64号土壌が63号土壌を切っていることがわかる。両者とも、大部分が調査区外に出たため、一部しか調査できなかつた。

両土壌ともに、同様な構造をもつ。それは、ほぼ方形の土壌を掘り、その内側に板材と杭で方形の枠をつくるものである。土壌内には、暗褐色～濃褐色の泥炭化しきっていない腐植土が厚く堆積しており、この中に有機質遺物が封入されている。博多遺跡群では、都市計画道路博多駅築港線関係第3次調査の698号土壌がこれと同じ構造を持つもので、溜枡（汚水槽）の機能を想定している（福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集 1989年）。63号土壌・64号土壌も同様の機能をあてることができよう。

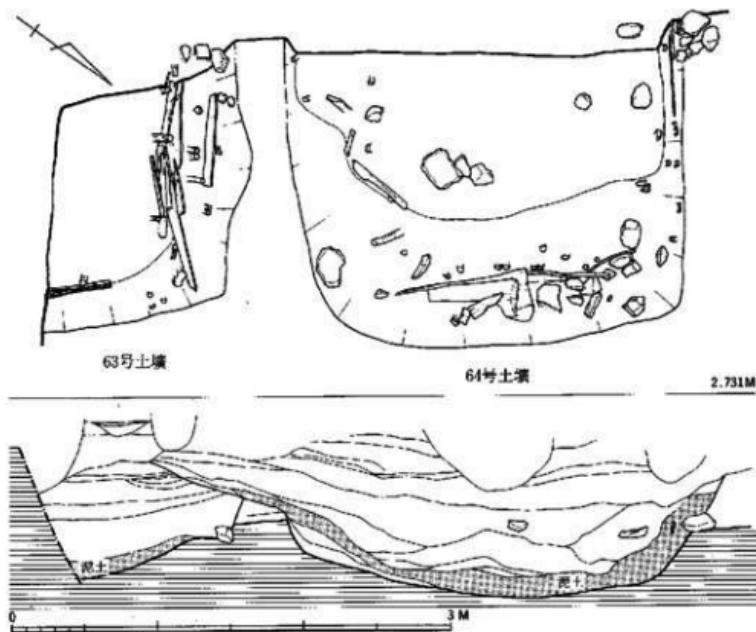


Fig. 101 63号土壌・64号土壌遺構断面図 (1/40)



(1)北東より



(2)南東より

Fig. 102 63号土塙検出状況



(1)南西より



(2)北東より

Fig. 103 64号土壤検出状況

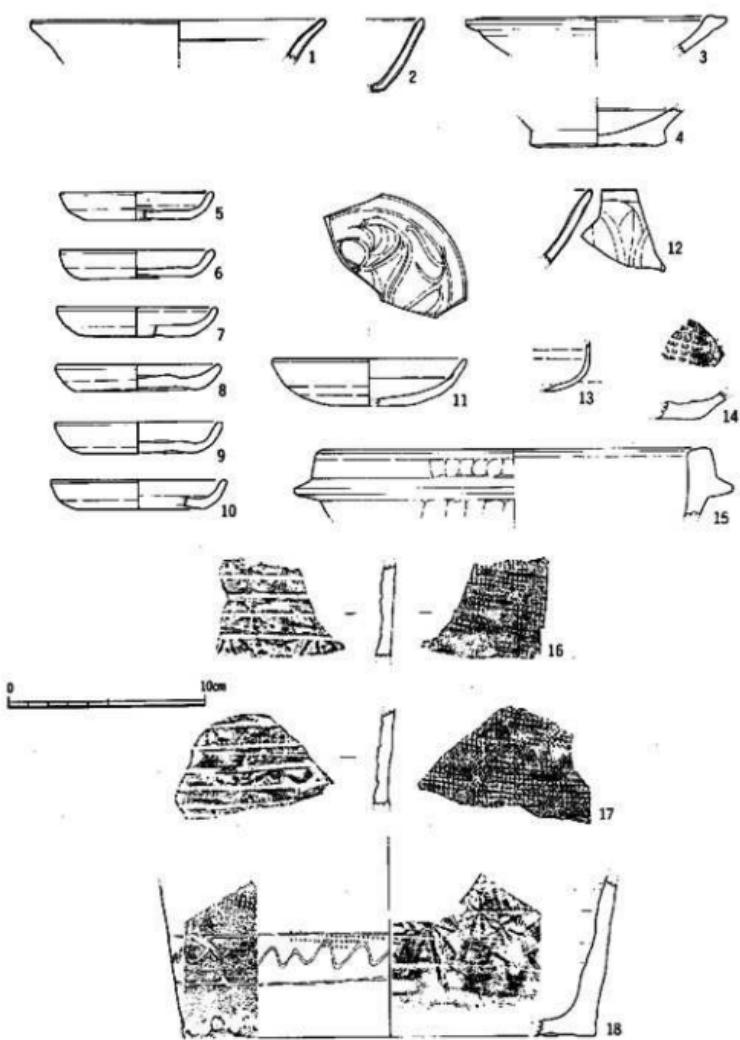


Fig. 104 63号土壤・64号土壤遺物実測図（1 / 3）

Fig. 104 の 1～4 は、63号土壤出土遺物である。1・2…青磁、3…褐釉陶器、4…白磁。この他、「天祐通寶」(初鎔1017年) 1枚が出土した。5～18は、64号土壤出土遺物である。5～10…土師器、11…白磁、12…青磁、13…褐釉陶器、14…瀬戸・美濃陶器、15…石製品、16…黒褐釉陶器。土師器皿は、口径8.0～9.2cmをはかる。15は、滑石製石鍋である。この他、「天聖元寶」(初鎔1023年) 1枚が出土した。

66号土壤 (0419)

第3面道路の北側で検出した土壤である。埋土は暗褐色泥土で、多量の木製品が含まれていた。

出土遺物の一部を Fig. 107 に示す。1～7…木製品、8～10…漆器。1は、櫛である。漆はかけられていない。2は、小形の曲物である。底部中央には孔があり、木でふさいでいる。3～7は箸で、3の先端は焦げている。8・9は、黒漆地で内面に朱漆で竹葉を描く。10は、内外面とも黒漆塗りである。その他、土師器・青磁・土師質土器・瓦質土器の小片が出土した。また、銅鏡が2枚出土した。内訳は、「開元通寶」(初鎔621年) 1枚、「熙寧元寶」(初鎔1068年) 1枚である。

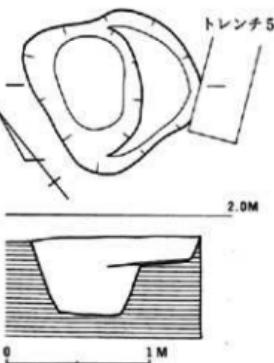


Fig. 105 66号土壤構造実測図 (1/40)



Fig. 106 66号土壤検出状況 (南東より)

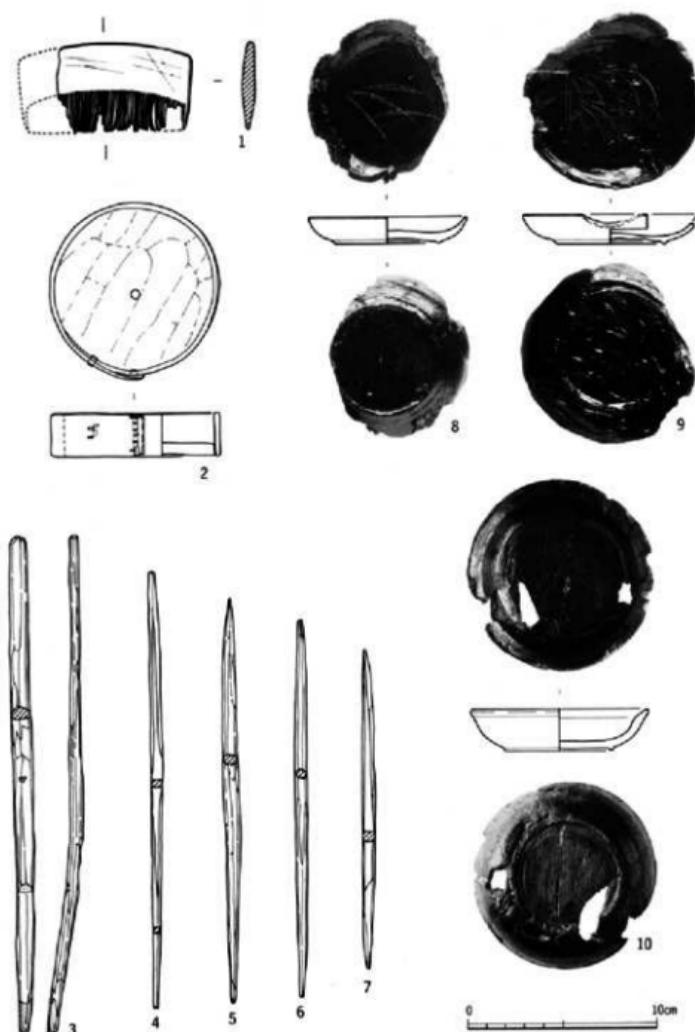


Fig. 107 66号土塘造物実測図 (1/3)

6. 第4面の調査

第3面から0.5~1.8m掘り下げて調査した遺構検出面である。標高0.3~1.3mをはかる。第3面調査時までは、第4面の存在を予想していなかった。ところが、第3面の調査を終了した段階で第3面の南端に駄目押しのトレンチを入れたところ、遺構が検出され、急速調査区の南端から遺構検出面を追いつつ排土して、調査を行なった。

第4面で検出した遺構は、溝・土壙・柱穴等である。遺構検出面は、第4面調査区のほぼ中程から北西にかけて傾斜しており、遺構も南東部分に集中し、北西部には、ほとんどみられない。これは、自然地形の制約を受けた結果であり、第4面当時（12世紀後半～13世紀前半）の博多遺跡群における生活面の平面的な限界の一端を示すものである。

調査区の北東壁に設けたトレンチ12（T-12）の土層観察結果から見ると、第4面は、旧河川の河口域近くの湿地を人工的に埋め立てた上に営まれた生活面である（第二章 2 層序について 参照）。

すなわち、第40次調査地点においては、最も時代的に遡る生活面であり、この生活面が旧地形を反映して傾いていることは、第4面から第3面にいたる間に、再びかなり大規模な埋め立て・整地がなされたことを示している。また、トレンチ12の下部からは、流入したと思われる状態で、女性の頭骨が出土した。



Fig. 108 第4面遺構全景（北東より）

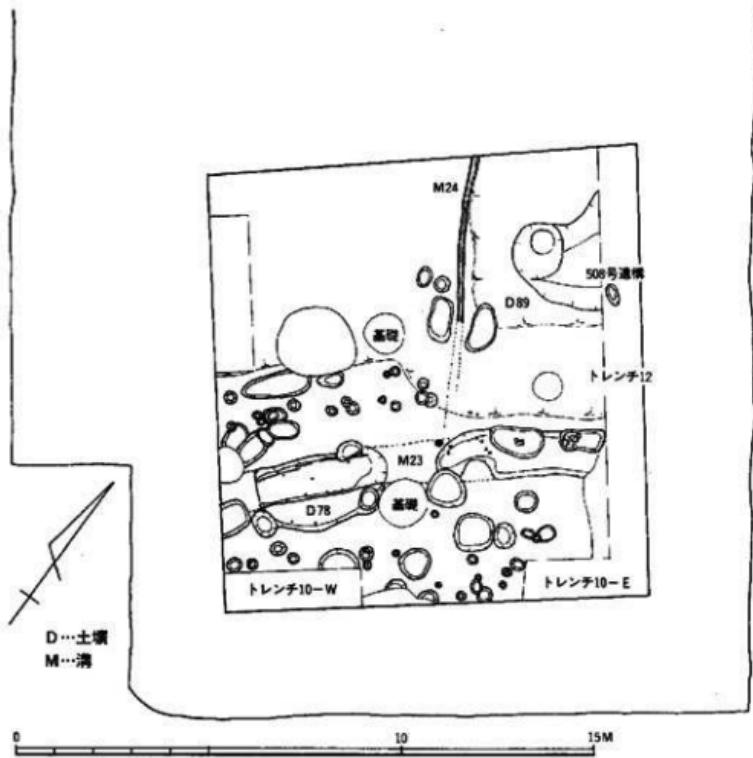


Fig. 109 第4面造構実測図 (1/150)

(1) 溝遺構

第4面からは、2条の溝遺構が検出された。

23号溝(0498, 0507)

第4面を南西から北東に横切る溝である。調査時においては、その東半と西半を別の遺構として調査するという誤りをおかしている。特に西半(0507)は、楕円形の大型土壙(78号土壙)と重複して検出・調査しており(78号土壙に切られている)、遺物も別々に取りあげた。

溝は、浅い箱形の断面を呈する溝の両側壁に、板材を横に立ててあてたもので、板材は内側に杭を打って押さえている。溝の幅は、1.0m前後、深さ28~31cmをはかる。溝底は、南西から北東へ傾斜している。

出土遺物は、溝の西半と東半とで別々に図示している。これがあわせて内訳を示すと、1・24~30…土師器、2・3・31・32…瓦器、4~16・33~43…白磁、17・18…青白磁、19・44~50…青磁、20・21・52~55…褐釉陶器、51…白釉陶器、56・57…無釉陶器、22…須恵質土器、23…石製品である。土師器皿は、口径8.45~9.5cm、器高0.9~1.25cm、坏は、28・29で口径13.2cm、器高2.6cm・2.8cm、30は口径15.4cm、器高2.8cmをはかる。底部は、すべて回転糸切りする。1・24・27・28において、外底部に板状压痕、内底部にナデ調整がみられる。10・42・46・48・57の外底部には、墨書きがみられる。10は「上」、42は「八綱」、46は「大」、48は解説できないが、漢字であることは間違いない。57は、部分的にしか残っていないが、花押であろう。55は、鉢、



Fig. 110 23号溝西半部(0507)検出状況(北西より)

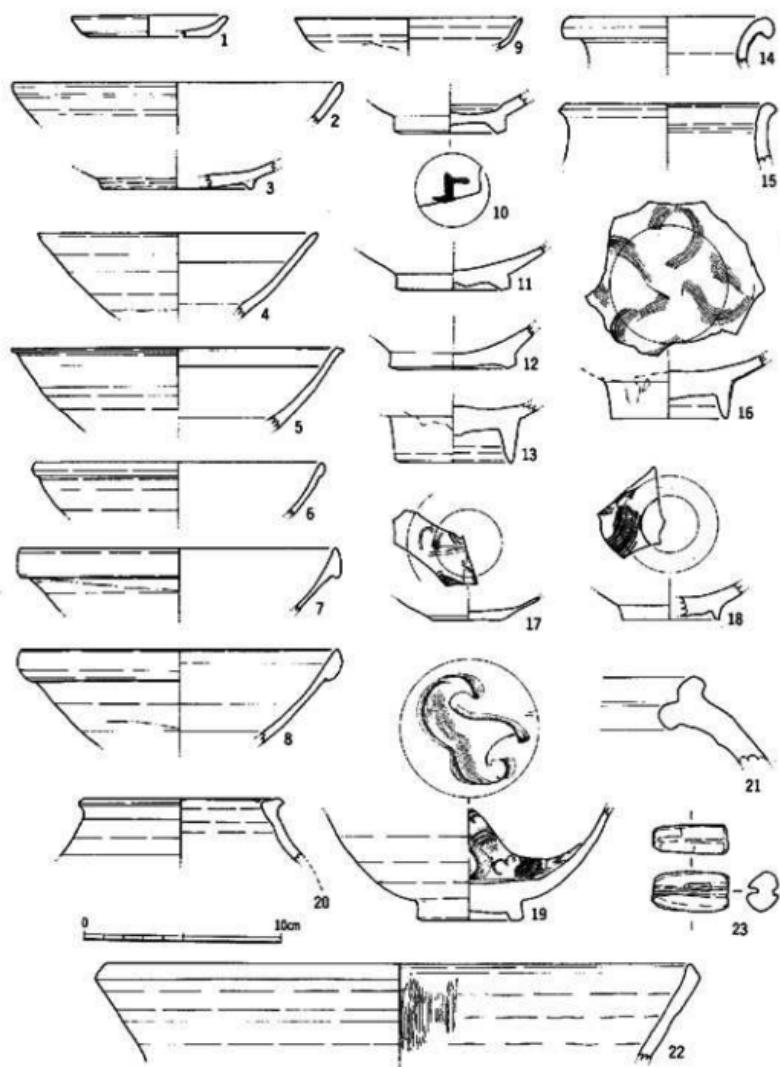


Fig. 111 23号溝西半部(0507)遺物実測図(1/3)

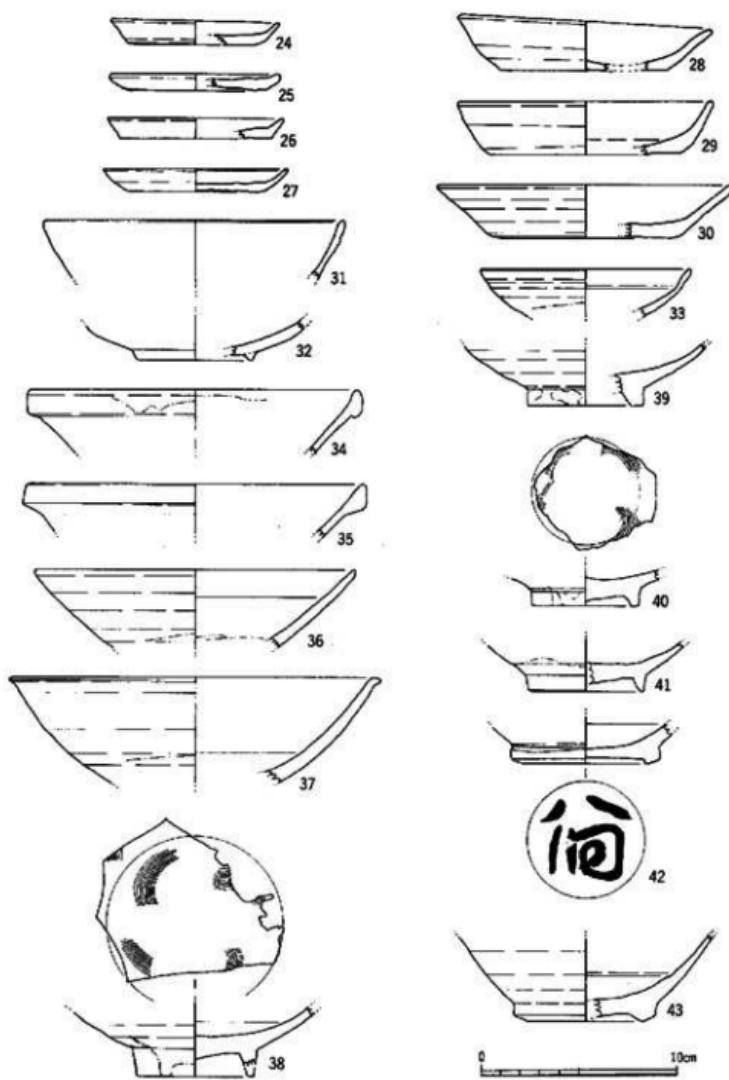


Fig. 112 23号溝東半部 (0496) 遺物実測図 1 (1/3)

56・57は、こね鉢である。22は、東播系須恵質土器の鉢である。神出窯の製品か。23は、滑石製の石錘である。石鍋片の再生品であろう。

24号溝 (0502)

第4面を北西から南東に走る溝である。北西は、第4面調査区外へのびる。南東は、第4面調査区の中程で、溝としては迫えなくなり、数本の杭がこの延長上にみられるのみである。

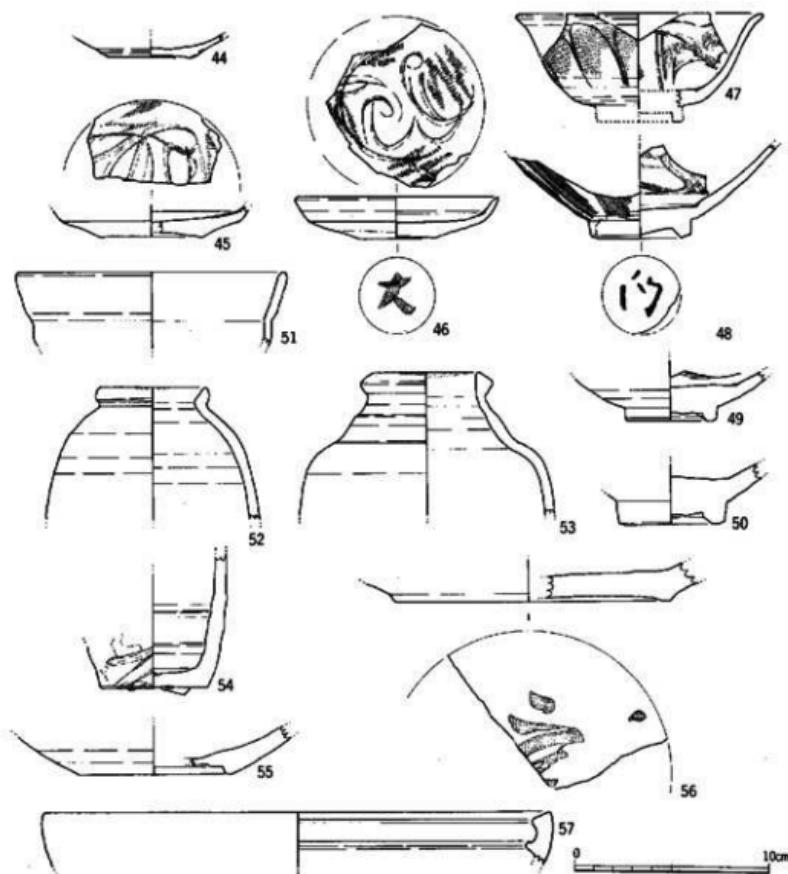


Fig. 113 23号溝東半部 (0498) 遺物実測図 2 (1/3)

溝は、U字形の掘りかたに、板・竹等で側壁をつくるもので、掘りかたの上端で幅16~35cm、溝本体部分で幅16~24cmをはかる。深さは、10~23cmで、南東から北西に傾斜している。側壁の作り方は一定せず、西壁は板を横に立てて内側から杭で押える。東側は、板材を網代に組む部分、竹をねかせてその両側に細竹を刺して固定する部分、板を横に立てる部分など様々である。むしろ東側壁には、あまり気をつかっていないとすら見える。

機能としては、南側の柱穴等が検出された生活領域から、北側の遺構の分布しない傾斜面への排水であろう。

出土遺物は、1…土師器、2…黒色土器、3…瓦器、4~8…白磁、9~10…青磁、11~12…褐釉陶器などである。土師器坏は、底部を回転糸切りする。口径15.7cm、器高2.5cmをはかる。

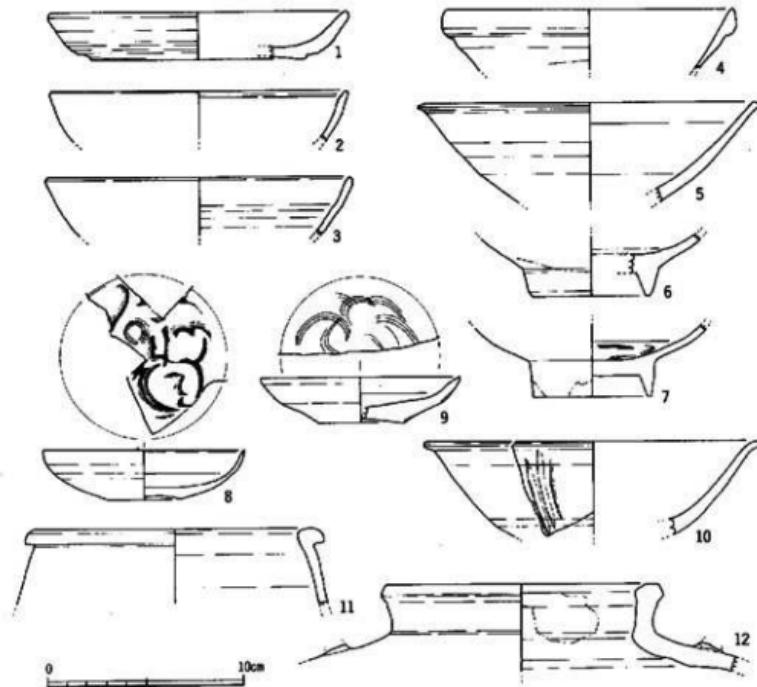


Fig. 114 24号溝遺物実測図 (1/3)

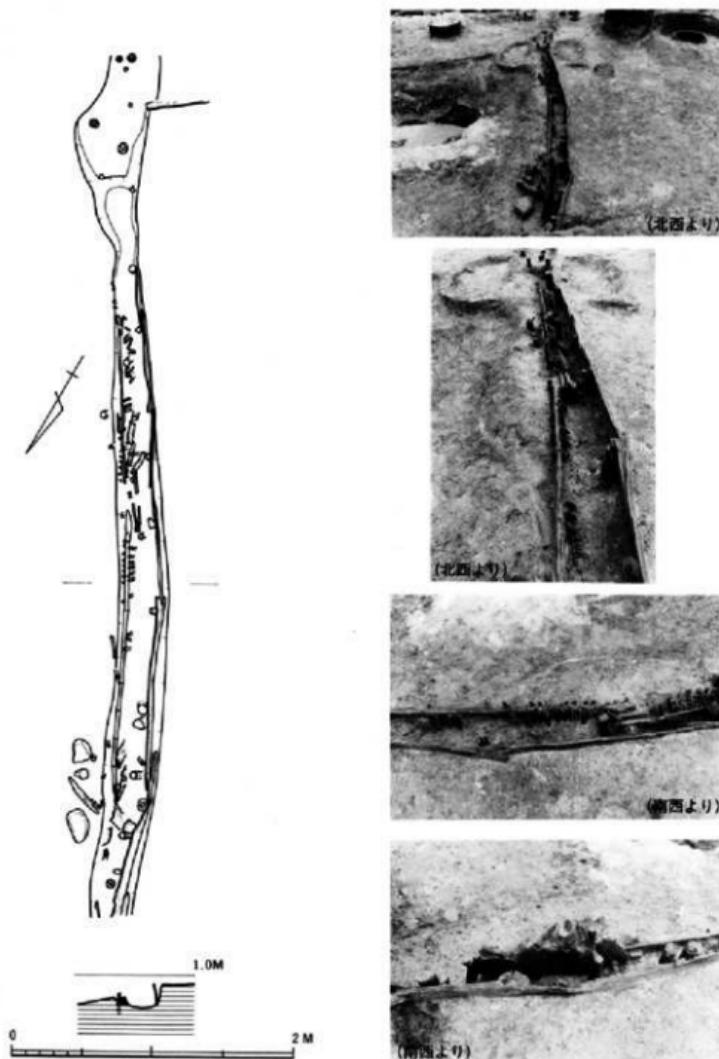


Fig. 115 24号構造橋実測図 (1/40)・検出状況

(2) その他の遺構

508号遺構 (0508)

トレンチ12 (T-12) の下面から検出した、人骨を含む土壤状の凹みである。出土層位は、旧河川の残存地形の湿地に堆積した砂層である。この砂層からは、越州窯系青磁 (Fig. 124-1)・灰釉陶器片が出土している。上層は、間に1層をおいて、人為的に埋め立てたとされる砂質土層となり、その上面が第4面となる。また、508号遺構は、第4面の89号土壤下面の直下にあたる。

508号遺構は、上述した砂層中に溜ったブロック状の暗灰色砂質土で、女性頭骨が頭頂部を下にして出土した。下顎骨及び他の骨は、全く含まれていない。他の地点から湿地内に流れ込み、溜りにしづんだものと思われる。なお、頭骨と一緒に、土師器が一点出土した。底部をヘラ切りする皿もしくは壺の底部で口縁部を欠く。底部はやや丸味を持ち、体部との境も明瞭な稜を作らず、丸味を持つ。体部は直線的に開く。口径等がわからないので判断できないが、11世紀から下ることはない土器で、もう少し遡るものとの感触を持っている。

土師器の年代観及び、出土層位から、人骨は11世紀以前のものであろう。

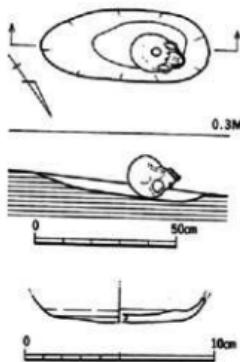


Fig. 116 0508号遺構・遺物実測図
(1/20・1/3)



Fig. 117 0508号遺構検出状況 (北より)

7. トレンチ 1 の調査

前述した様に、調査予定地北辺の2m程内側に並ぶコンクリート基礎杭列と、同じく6m程内側に並ぶコンクリート基礎杭列との間は、実質的に調査不可能であると判断して、調査範囲から除外した。第1面調査時に、第1面以下の土層堆積状況と以後の調査の見通しを立てるために、この部分に設定したのが、トレンチ1である。

トレンチ1は、重機によって掘削した。トレンチ壁面の倒壊を防ぐため、トレンチ上端は基礎杭から基礎杭までほとんどいっぽいにとって掘り下げた。トレンチ1を設定した時点では、トレンチの底に網代に組んだ板壁が顔を出した所で、一旦掘削を中止した。その後、調査が終盤に近付いた時点で再び重機を使って掘削、板壁を追う形でトレンチを延長した。その結果、網代に組んだ板を立てた遺構（510号遺構）と、網代を床に敷き、板を立て並べて壁をつくった地下室状の遺構（509号遺構）とを検出したのである。しかし、トレンチの深さは3.4mに達し、土砂崩壊の危険があるため、トレンチの下端を拡幅することは断念した。そのため、十分な調査が行なえず、多くの疑問を残している。

509号遺構（0509）

トレンチ1の西半部で検出した、地下室状の遺構である。床面には、中央部を長軸方向に2～3本の竹をならべ、その上に網代に組んだ板材を敷いている。ただし、板材が全くみられない部分もあり、床全面に板を敷いたものとは考えられない。壁は、板材を立て並べたもので、



Fig. 118 509・510号遺構検出状況（南西より）

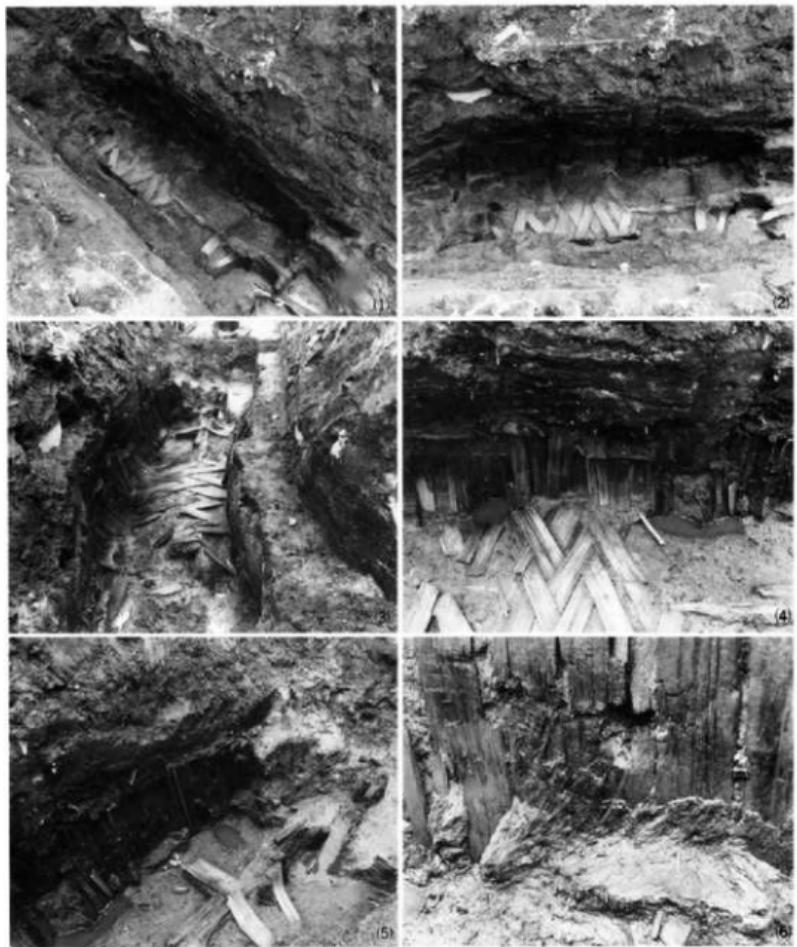


Fig. 119 509号造構検出状況

- | | |
|-----------------|---------------------|
| (1) 全景(東より) | (2) 側壁検出状況(南東より) |
| (3) 全景(南西より) | (4) 同上 |
| (5) 北側検出状況(南より) | (6) 側壁際ワラ付着状況(南東より) |

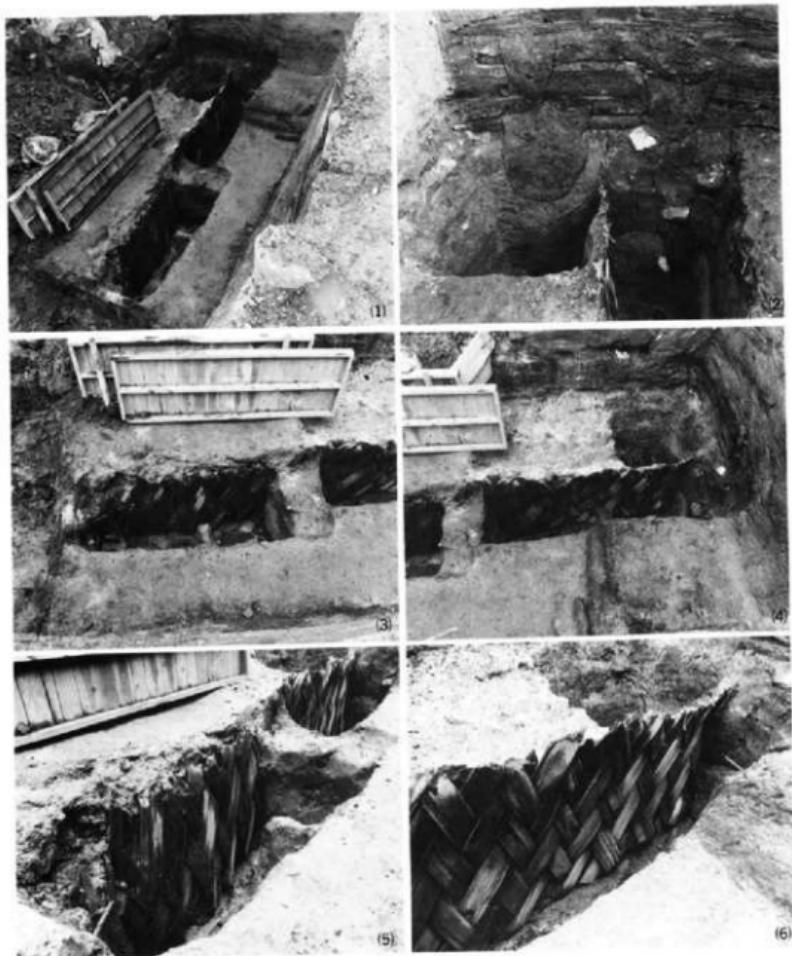


Fig. 120 510号遺構検出状況

- | | |
|---------------|-------------------|
| (1) 全景(南より) | (2) レンチ1北東壁土刷堆積状況 |
| (3) 西半部(南東より) | (4) 東半部(南東より) |
| (5) 近景(南より) | (6) 同左 |

北西壁において良好に残っていた。北西壁では、床面から48cm程上方の板材の背後に、横に棒材をわたしているのがみとめられた。ただし、この棒材の機能、板材との固定方法等については、壁面の土砂崩壊の恐れがあり、確認できていない。北東壁は、北西壁から直角に曲ってすぐ、近世以後の井戸によって切られており、ほとんど残っていなかった。この角部分の内側には、杭が一本打たれていた。南東壁は、はっきりとは検出できていない。重機で掘削した際、レンチの南東壁にへばりついて、板材が立て並べられており（間もなく剥落した）、これが、南東壁にあたるものと思われる。南西壁は、レンチが延長不可能となり、調査できなかつた。また、北西壁の床際の一部に薬が付着しており、床に薬を敷いていた可能性も考えられる。

出土遺物は少なく、Fig. 121 の 1・2…土師器と瓦片のみである。土師皿は、口径7.4~7.6cm、器高1.2cmをはかる。

510号遺構（0510）

レンチ 1 の東半分から検出した、網代組みの板壁を立てた遺構である。網代組みの板壁は、高さ90cm内外が残り、調査した延長は5.6mにわたっている。網代組みの下端部は完全に残っていた。また、遺存状態は、極めてよく、未だ木の弾性が失われていなかつた。

レンチ 1 北東壁の土層の観察から、網代壁は溝もしくは地下室の壁にあてられていた可能性が強いと思われた (Fig. 122)。すなわち、網代の前と後ろで土層の堆積の仕方にわずかな違いがあり、異なる状況下でそれぞれに堆積したものと思われたのである。したがって、堀として地上に立っていたとは考えられない。このことは、網代壁が、これを固定するための横木や柱をともなわない点からも推定できることである。また、網代壁には、その北西に接して点々と杭を打っており、網代壁の北西側が溝または地下室の内側で、内側から壁にそって杭を打ち、網代を掘りかたの壁におさえつけていたものと思われる。

出土遺物は、3~5…土師器、6…漬戸・美濃陶器、7…白磁である。土師皿は、口径7.4~7.8cm、器高1.2~1.6cmをはかる。7は、いわゆる口禿げの皿である。

509号遺構・510号遺構とも、14世紀前半代に位置付けられる。

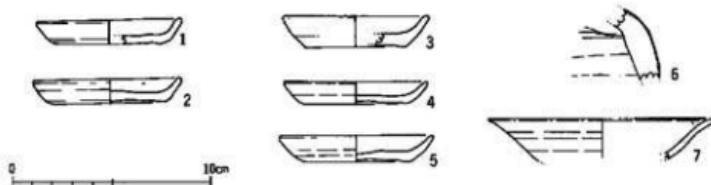


Fig. 121 509・510号遺構遺物実測図 (1/3)

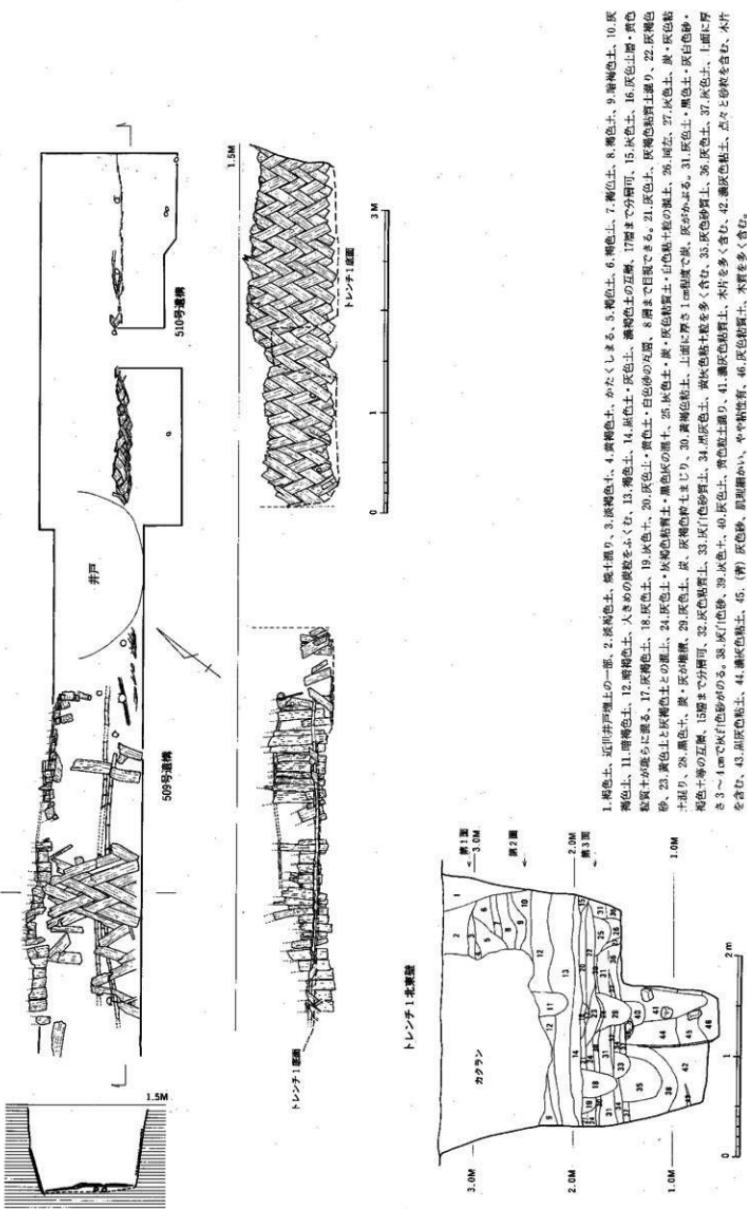


Fig. 122 50%付近・510号透構実測図 (1/40)、トレンチ1北東壁上端実測図 (1/40)

8. その他の出土遺物

これまで略述してきたのは、第40次調査で検出された遺構・遺物の一部である。そこで、これまでで触れることのできなかった遺物の内、看過できないもの、代表的なものを若干ではあるが示すこととする (Fig. 123~125)

(1) 土器・陶磁器・石製品・木製品

1は、越州窯系青磁碗である。第40次調査では、越州窯系青磁の出土は少なく、わずか3点にとどまった。これは、当該期においては本地点は未だ湿地で、生活の場となりえなかつたことによるのであろう。2は、ベトナム陶器である。青釉陶器の碗で、外底の露胎部には、花押が墨書きされている。見込みには、点々と目痕が残る。3・4は、白磁である。第1面から第2面への掘り下げの時、出土したもので、3のタイプが7枚、4のタイプが3枚、すべて重なって1セットとなつて出土した。5は、青磁の擂鉢である。体部内面の下半は露胎となるが、この部分にヘラ沈線で撻目が入れられる。6は、高麗の象嵌青磁である。高麗・李朝の陶磁器も多く出土し、器種も碗・皿・壺等多岐にわたっている。7は、墨書き土師器である。内面中央には、向い合って飛ぶ2羽の雀、その上に金袋、下に鼓、左右にそれぞれ竹と松を配する。外面は、外面中央に太陽または月を置き、体部に竹と金袋を描く。輪郭は墨で引き内を赤く彩色したもので、宝尽しの絵柄である。8は、骨を削った笄である。9は、薄板を削った蓋串である。10は、車輪状木製品である。ほぼ正円形に仕上げた板の中央に、穿孔する。板の両面には、細刻線で円を描いて車輪の輪郭をとった後、墨塗りして、車輪と車轔を描いている。御所車の車輪を思わせるもので、玩具の一部でもあろうか。11は、鞘状木製品である。劍先形のスリットを削り込む。12は、龍泉窯青磁の小鉢である。見込み中央に双魚文を貼る。体部外面は鷄蓮弁文である。完形品。第40次調査地点西隣りのビル建設に伴なう立会調査で出土したものであるが、この機を得て紹介しておく。

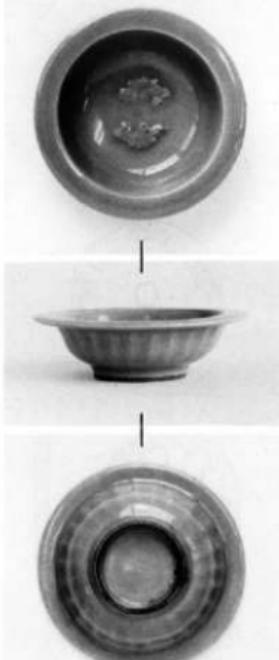


Fig. 125 に示したのは、様々な墨書きである。墨書きの内 Fig. 123 立会調査出土青磁小鉢 (約1/3)

容は、人名・数字・花押など多岐にわたっている。

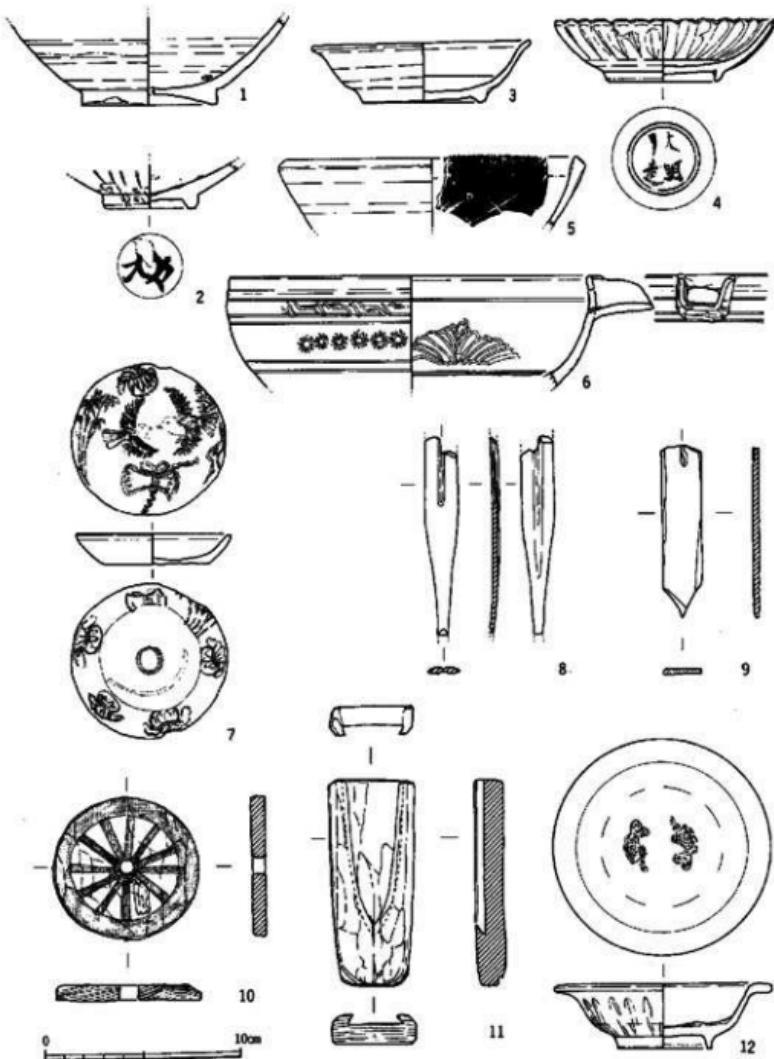


Fig. 124 その他の出土遺物 (1/3)

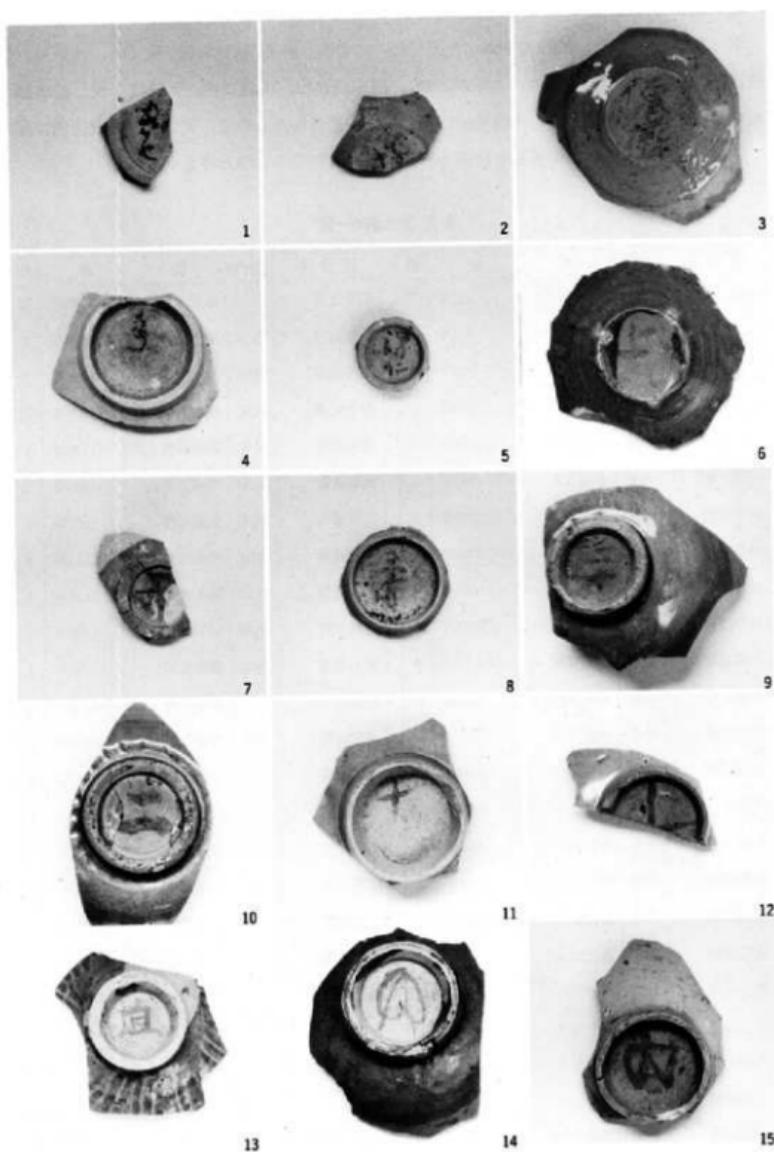


Fig. 125 黑書土器 (約 1 / 3)

(2) 銅錢

第40次調査からは、432枚の銅錢が出土した。この内、解説不能136枚を除くと、内訳は、唐錢22枚、五代錢（前蜀）1枚、北宋錢234枚、南宋錢10枚、明錢25枚、琉球錢1枚、日本錢3枚である。「金圓世寶」は、琉球の尚圓王の代に鋳造されたもので、管見の限り出土例は極めて少ない。博多と琉球との貿易を物語る、数少ない資料のひとつと考える。

表2 出土銅錢一覧

錢貨名	時代	初	銘	数	錢貨名	時代	初	銘	数	
開元通寶	唐	武德4年		621年	22	紹聖元寶	北宋	紹聖元年	1094年	10
光天元寶	前蜀	光天元年		918年	1	紹聖通寶	北宋	紹聖元年	1094年	1
宋通元寶	北宋	建隆元年		960年	1	元符通寶	北宋	元符元年	1098年	1
太平通寶	北宋	太平興國元年		976年	3	聖宋元寶	北宋	建中靖國元年	1101年	12
淳化元寶	北宋	淳化元年		990年	4	聖宋通寶	北宋	建中靖國元年	1101年	1
至道元寶	北宋	至道元年		995年	3	崇寧重寶	北宋	崇寧3年	1104年	1
咸平元寶	北宋	咸平元年		998年	5	大觀通寶	北宋	大觀元年	1107年	6
景德元寶	北宋	景德元年		1004年	6	政和通寶	北宋	政和元年	1111年	8
祥符元寶	北宋	大中祥符元年		1008年	10	宣和通寶	北宋	宣和元年	1119年	1
祥符通寶	北宋	大中祥符元年		1008年	3	紹熙元寶	南宋	紹熙元年	1190年	1
天禧通寶	北宋	天禧年間		1017~21年	8	慶元通寶	南宋	慶元元年	1195年	1
天聖元寶	北宋	天聖元年		1023年	13	開禧通寶	南宋	開禧年間	1205~1207年	1
明道元寶	北宋	明道元年		1032年	1	嘉定通寶	南宋	嘉定年間	1208~1224年	1
景祐元寶	北宋	景祐元年		1034年	4	大宋元寶	南宋	寶慶元年	1225年	1
皇宋通寶	北宋	齊元2年		1039年	33	紹定元寶	南宋	紹定年間	1228~1233年	1
至和元寶	北宋	至和元年		1054年	3	皇宋元寶	南宋	寶祐元年	1253年	2
至和通寶	北宋	至和元年		1054年	2	咸淳元寶	南宋	咸淳元年	1265年	2
嘉祐元寶	北宋	嘉祐元年		1056年	3	洪武通寶	明	洪武元年	1368年	7
嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年		1056年	6	永樂通寶	明	永樂元年	1403年	18
治平元寶	北宋	治平元年		1064年	7	金圓世寶	琉球		1470年	1
治平通寶	北宋	治平元年		1064年	2	寛永通寶	江戸			1
熙寧元寶	北宋	熙寧元年		1068年	23	半錢銅貨	明治			2
元豐通寶	北宋	元豐元年		1078年	33	解説不能				136
元祐通寶	北宋	元祐元年		1086年	20	総計				432

表3 銅錢出土遺構一覧

検出面	出土遺構	銭貨名	數
1面	7号土壤	熙寧元寶	1
	17号土壤	天聖元寶	1
	21号土壤	永樂通寶	2
	23号土壤	永樂通寶	1
	24号土壤	永樂通寶	1
	25号土壤	祥符元寶	2
	34号土壤	祥符元寶	1
		嘉祐通寶	1
		解説不能	1
	36号土壤	天祐通寶	1
		永樂通寶	1
		解説不能	1
	41号土壤	解説不能	1
	44号土壤	天聖元寶	1
		元祐通寶	2
		紹聖元寶	1
		解説不能	1
	45号土壤	元祐通寶	1
		解説不能	2
	1号井戸	解説不能	1
	2号井戸	永樂通寶	1
	3号井戸	開元通寶	1
		開祐通寶	1
		解説不能	3
	4号井戸	淳化元寶	1
		元豐通寶	1
	5号井戸	天聖元寶	1
		聖宋元寶	1
		永樂通寶	1
	5号井戸トレンチ	咸淳元寶	1
2面	5号井戸トレンチ	解説不能	1
	6号井戸	解説不能	1
	8号井戸	半錢銅貨	1
	5号溝	景祐元寶	1
	6号溝トレンチ	開元通寶	1
		咸平元寶	2
		天聖元寶	1
		皇宋通寶	1
		元祐通寶	1
		聖宋元寶	1
		洪武通寶	1
	解説不能	3	
	7号溝	開元通寶	1
		大觀通寶	1
		解説不能	1
	50号土壤	祥符元寶	1
		大觀通寶	1
		解説不能	1
	51号土壤	永樂通寶	1
	52号土壤	解説不能	1
	53号土壤	解説不能	2
	59号土壤	開元通寶	8
		宋道元寶	1
		卒道元寶	2
		景德元寶	3
		祥符元寶	2
		祥符通寶	2
		天祐通寶	2
	天聖元寶	3	

検出面	出土遺構	銘貨名	数
2面	59号土壤	景祐元寶	2
		皇宋通寶	11
		至和元寶	1
		至和通寶	1
		嘉祐元寶	1
		嘉祐通寶	2
		治平通寶	1
		熙寧元寶	8
		元豐通寶	9
		元祐通寶	9
		紹聖元寶	3
		元符通寶	1
		聖宋元寶	6
		政和通寶	4
		解説不能	2
	60号土壤	解説不能	4
	87号土壤	解説不能	2
	90号土壤	解説不能	1
	92号土壤	熙寧元寶	2
		大觀通寶	1
		永樂通寶	1
	106号ピット	開元通寶	1
		光天元寶	1
		景德元寶	1
		天禧通寶	1
		熙寧元寶	1
		政和通寶	1
		解説不能	2
	107号ピット	熙寧元寶	1
	111号ピット	洪武通寶	2
	113号ピット	解説不能	1
検出面	出土遺構	銘貨名	数
2面	120号ピット	解説不能	1
	157号ピット	解説不能	1
	185号ピット	永樂通寶	1
		解説不能	1
	199号ピット	解説不能	1
	208号ピット	洪武通寶	1
	209号ピット	解説不能	2
	218号ピット	元豐通寶	1
	226号ピット	元祐通寶	1
	229号ピット	元祐通寶	1
		解説不能	1
	10号溝	皇宋通寶	1
		解説不能	3
	11号溝	皇宋通寶	1
		紹聖元寶	1
		解説不能	3
	12号溝	解説不能	1
	13号溝	解説不能	1
検出面 (縦状のもの)	至道元寶	1	
	天聖元寶	1	
	皇宋通寶	3	
	至和元寶	1	
	嘉祐元寶	2	
	治平元寶	1	
	熙寧元寶	1	
	元豐通寶	5	
	元祐通寶	1	
	紹聖元寶	2	
	聖宋元寶	1	
	政和通寶	1	
	經熙元寶	1	

検出面	出土遺構	銭貨名	数
2面	検出面(縁状のもの)	嘉定通寶	1
3面	61号土壤	咸平元寶	1
		天聖元寶	1
	62号土壤	解説不能	2
	63号土壤	天禧通寶	1
	64号土壤	天聖元寶	1
	66号土壤	開元通寶	1
		熙寧元寶	1
		皇宋通寶	1
	69号土壤	祥符元寶	1
	16号溝	解説不能	2
	18号溝	元祐通寶	1
	19号溝	熙寧元寶	1
		解説不能	2
	20号溝	元豐通寶	2
		解説不能	1
21号溝	開元通寶	1	
	咸平元寶	1	
	景德元寶	1	
	天禧通寶	1	
	皇宋通寶	1	
	元豐通寶	2	
	治平元寶	2	
	熙寧元寶	2	
	大觀通寶	2	
	紹定元寶	1	
	解説不能	4	
22号溝	開元通寶	1	
	皇宋通寶	1	
	嘉祐通寶	2	
	治平元寶	1	

検出面	出土遺構	銭貨名	数
3面	21号溝	元祐通寶	3
		元祐通寶	1
		解説不能	1
	9号龜石	開元通寶	1
		皇宋通寶	1
		聖宋元寶	1
		解説不能	3
	252号ピット	解説不能	2
	253号ピット	解説不能	1
	260号ピットトレンチ	熙寧元寶	1
	261号ピット	開元通寶	1
	264号ピット	天聖元寶	1
		皇宋通寶	1
		元祐通寶	1
		紹聖通寶	1
	268号ピット	祥符元寶	1

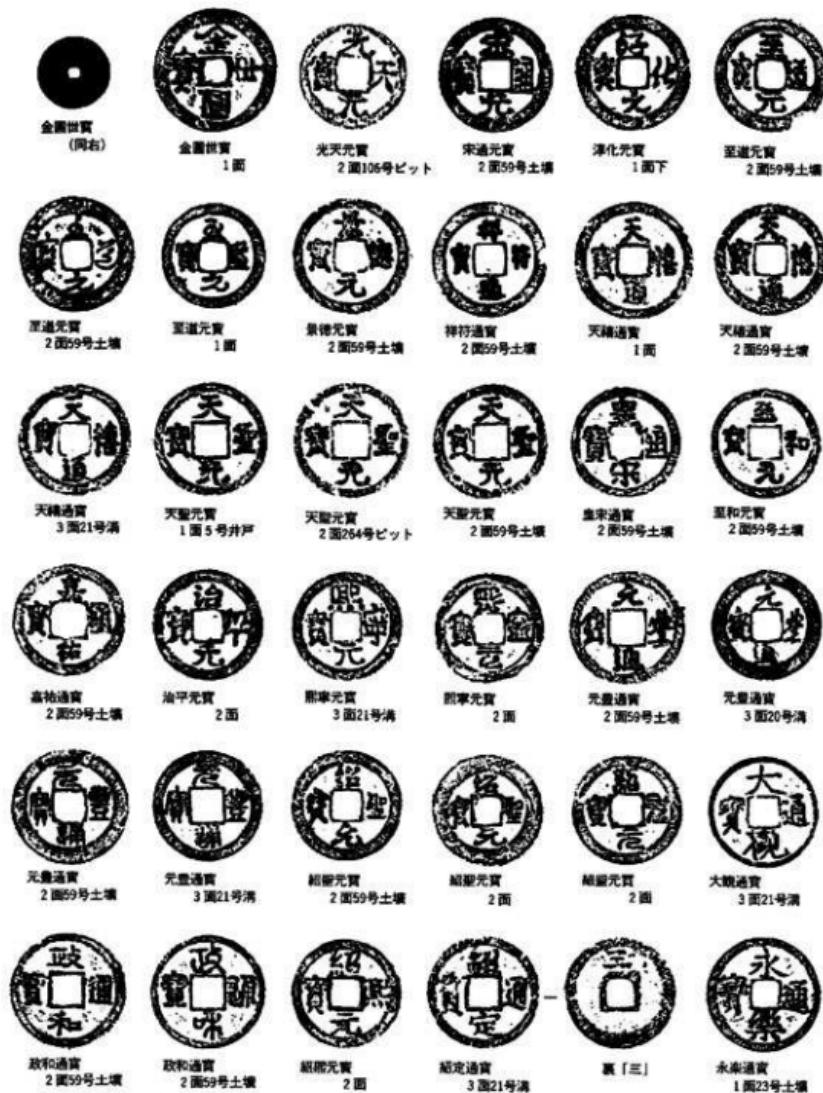


Fig. 126 出土銅錢拓本 (4/5)

第三章 小 結

以上、博多遺跡群第40次調査の概要について、主要な遺構を中心に略述してきた。報告書の末尾にあたって、本調査の成果についてまとめておきたい。

本調査によって得られた成果は、次の通りである。

1. 本調査地点は、古くは河川の流路であり、博多遺跡群の他の地点とは異なり、砂丘上には位置していない。
2. 本調査地点に人間の営みがみられるのは、12世紀後半以降であり、湿地を人為的に埋立て生活面を作り上げている。その後、現代に至るまで連續と生活が営まれてきた。
3. 本調査においては、便宜的に4面に分けて調査を行った。それぞれの年代觀は、おおむね第1面-16世紀、第2面-15世紀、第3面-14世紀、第4面-12世紀後半~13世紀前半、である。
4. 本調査地点には、14世紀の初め頃に道路が作られた。道路は、間もなく拡幅され、その後16世紀の末まで、側溝の修復・掘り直し、路面のかさあげを繰り返しつつ継続した。
5. 道路が廃絶されたのは、おそらく1587年の豊臣秀吉の命による博多再興の折りであろう。その後、道路は調査地点の南側に移っている。

道路について

本調査における最大の成果は、道路遺構の発見である。この道路遺構は、道幅3.8~5.4mを計るもので、博多の基幹道路の一つであると言える。

道路の側溝は、各時代を通じてほぼ同じ構造をとる。それは、U字形の溝を掘り、その両側に板を横向きに立て、内側に杭を打って押さえるというものである。側溝の掘りかたは、かなり幅広に検出されているが、それは、側溝の掘り直しが度重なったためであろう。例えば、22号溝で検出された網代組みの側板を見ると、その背面はすぐ側溝掘りかたの壁になっている。つまり、掘りかたの壁につけて板を立てているわけである。他の溝においても仔細にみれば、掘りかたの側壁際には、必ずこれにそった杭が点々と打たれている。これは、側板を押さえていた杭で、板を抜き取られたために杭だけが残ったものと考えられる。

さて、同様に杭だけが並んで検出された部分は、溝側の板材が抜かれたものとして、それぞれの溝を検討すると、一本の溝においては、掘り直しの度に溝が道路の内側にくい込んできていることが分かる。しかし、3面から1面まで、全く同じ位置でただ道幅だけが徐々に狭くな

ったのかというと、そうではない。3面から2面、2面から1面の間で、道そのものがスライドするようにずれているのである。このことは、道路がこまめに修復されていた時期と、一次的にせよまったく顧みられなかった時期が、交互にあったことを示している。すなわち、便溝の掘り直しというよりも、道路そのものの造り直しが2回は行われたということになる。それが、一体如何なるきっかけで、誰の手によって成されたかということになると、全く手がかりがない。しかし、道路の造り直しが、徐々に自らの居住する土地（占有する土地）を拡大してきたその既得権を反故にしてしまう、あるいは主張できないという状況でなされたとすれば、おそらく、戦禍などによる荒廃がその原因の大きなものであろう。

ところで、これまでの博多遺跡群の調査においても、いくつかの道路遺構が知られている。その中から、本調査地点での道路遺構と関連するものを搜すと、次のようなものがある。

- ① 第26次調査 2号溝 14世紀後半頃の溝である。両側に板を横向きに立て、杭で押さえる。北東から溝が一条取り巻いている。②の延長上にあたる。
- ② 第35次調査 道路 道路幅3.0~4.8mを計り、博多の基幹道路とされる。14世紀前半から16世紀末までかさあげと側溝の掘り直しを繰り返しながら続いている。側溝の構造は、板を横にして立て、杭で止めるものである。

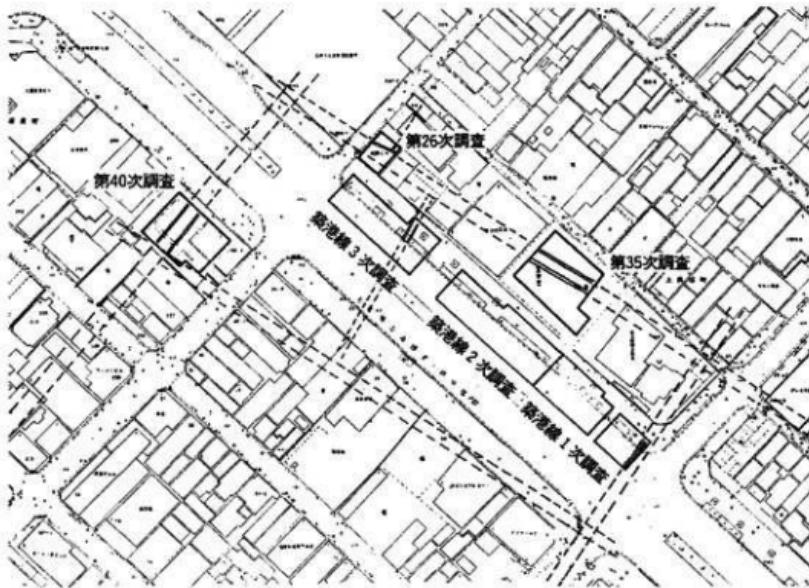


Fig. 127 第40次調査・周辺調査検出道路遺構分布図 (1/2,000)

- ③ 築港線関係第1次調査 1号道路遺構 14世紀前半に作られ、15・16世紀の段階で廃絶される。瓦片・陶磁器片で舗装している。
- ④ 築港線関係第3次調査 13号溝・14号溝 1.8mの間隔を置いて平行する溝である。上層の土が堆積する段階で、溝の掘り込み面を失っており、両溝が同時に存在したかどうか確認できなかった。しかし、両者は、その幅・深さとも類似しており、道路（小路）の側溝であった可能性が強い。木質は、一部でしか確認されていないが、13号溝には板を当てていた。

これらの位置関係を図示すると Fig. 127 のようになる。基幹道路と考えられるのは、②・③と本調査検出の道路である。本調査で道路に直交して検出された13号溝は、構造的には、道路側溝と同一で、規模もこれに匹敵している。そこで13号溝を基幹道路に伴う溝とすれば、基幹道路に囲まれた168~171m×63~66mの長方形が得られる。築港線関係調査は、この長辺にそって約4分の3ほどを調査しているが、他に基幹道路と目されるものはなかった。したがって、この長方形の区画が、14世紀初めから16世紀末まで続いた、中世都市博多の街区であった可能性がある。そして、この街区の内側は、中小の溝によってさらにくぎられていたのである。

屋敷地割りについて

道路を中心において検出された遺構には、各面を通じて、いくつかの共通性が認められる。一つは、道路が初めて営まれた第3面から、道路が廃止される16世紀末まで、本調査地内には、井戸が掘られていない点である。第1面では、9基の井戸が検出されたが、全て近世以後の井戸であった。もう一つは、道路の北側には、掘立柱建物が、南側には、集石遺構が営まれている点である。さらにもう一点、道路の両側とともに、塀・柵など境界のための施設を設けていない点があげられる。

第3面からこれを検討すると、第3面においては、道路北側には、建物遺構が認められていない。あるとすれば、その西端近くの柱穴がこれに当る。道路南側では、ほぼ中央に集石遺構があり、他の柱穴、小溝等は、ほとんどがこの集石遺構と一連のものと考えられる。従って、南側は、すっぽりと一つの屋敷地内に含まれていることになる。

第2面においては、道路北側には、その内端に1棟と東半分に2棟以上の掘立柱建物が想定できる。ただし、西端は、第2面道路に直行する溝に近接しており、これが推定通り道路に伴うものとすると、西端の建物は、妻が約1.5m程度しか取れないことになる。道路南側では、その東半分に一連の集石遺構があり、これに係わると見られる柱穴が集中している。西半分には、特に建物は想定できない。

第1面においては、道路北側では、西端近くに1棟？、東半分に2棟以上の掘立柱建物が想定できる。道路南側では、東南際近くから集石遺構と若干の柱穴が検出されている。

これらをまとめると、道路北側では、1面～2面では、間に空き地を挟んで、西端の建物と東半分の建物（2～3棟）とに別れている。この間の空き地について、一つの大きな屋敷地内における建物と建物の間の空き地と考えることもできる。しかし、第2面から第1面まで200年近くもの間基本的に変化していないこと、第1面ではここに小溝がみられることから、むしろ土地区画が異なると考えたほうがよかろう。この場合、3面においてはやや状況がことなり、頗る著しい建物跡は見つかっていない。道路南側では、常に集石遺構を中心とした建物が當まれ、土地が区画されていた形跡は認められない。また、集石遺構の建物としての構造は、おそらく、掘立柱建物と大きく違うであろう。今この構造について仔細に復元できるだけの資料は持たないが、2面・3面検出例から推定して、集石遺構内側に立てられた柱（掘立柱）によって上屋を支え、集石のうえに壁を立て上げたものと思われる。随分と重厚な造りであったと思われ、道路北側の掘立柱建物とはかなりの格差が感じられる。これは、おそらく居住者の違いに基づくもので、こういった建物に反映された格差が3面から1面まで約300年間続いているということは、中世を通じて、居住者の階層によって居住区が特定されていた（制度的にではなく、おそらくは慣習的に）ことを推測させる。

以上、調査成果の簡単なまとめと、本文中で触れられなかった若干の所見を述べた。

最後に、この概報は整理期間・整理環境等にかかる様々な制約のもとで作られたものであり、十分に意を尽したものではないことをお断りしておきたい。出土遺物の大半は図化されてしまはず、写真・実測図などの記録も十分に報告できなかった。いずれ機会を改めることができれば幸いである。

博多遺跡群第40次調査出土の中世人骨について

中橋 孝博

九州大学医学部解剖学教室第2講座

はじめに

近年、各地の都市において、様々な土木工事に伴う発掘調査が盛んに行われ、それに伴う人骨資料の出土もその数を急速に増やしつつある。福岡市においても、弥生から近世に到る各時代の人骨が出土し、とりわけ、「博多」旧市街区からは、天福寺江戸時代人骨を中心として、中・近世人骨の出土が相次いでいる。1988年に実施された第40次調査においても、また新たに1体の中世人骨が出土した。下顎、体部骨を伴わず、はっきりした埋葬遺構も検出できない、やや不自然な状況下で見いだされたものではあるが、11世紀の平安時代という、博多はもとより、全国的にも殆ど資料の欠落している時代のものであり、当地における人骨形質の時代変化を追う上でも貴重な資料になるものと考える。以下、その形態的特徴に関し、同じ博多や近隣各地から出土した人骨との比較を通して明らかになった点を報告する。

資料

出土状況：ビル建設工事に伴う発掘調査に際し、地表下約5.3m（標高0.25m）の位置において、下顎を除く頭蓋骨のみが、頭頂部を下にしたかたちで検出された（508号遺構）。体部骨は一片も伴っておらず、墓壙も掘られていた痕跡が見いだせない等、その出土状況からみて、おそらくは頭蓋のみが他所から流れ込んだものと推察されている。

所属時代：伴山した土師器皿（または壺）片が10～11世紀所属のものとみなされ、また、人骨を含む層が、12世紀後半から13世紀前半にかけての遺構に切られていることなどから、ほぼ11世紀頃の平安時代所属の遺骨と考えられている。

作出遺物：上記の土師器皿（または壺）片1個のみで、副葬品は見あたらない。

保存状況：下顎が無いが、頭骨の保存状況は、乳様突起の先端部を欠くのみで、非常に良好である。なお、歯は3本の大臼歯と1本の第2小白歯を残すのみで、他は歯槽を残して全て失われている。外傷、病変等は見られない。

性別・年齢：眉間部、眉弓部の発達は弱いが、前頭結節の発達は良好で、前額部はかなり強く前上方に膨隆している。また、乳様突起は先端を欠いているためその突出の程度は不明で

あるが、他の外後頭隆起や側頭筋付着部等の発達は弱く、全体のサイズもかなり小さいことなどから、女性と見なされる。また、年齢については残存歯の吸耗が軽度で、縫合の癒着も認められないことから、まだ比較的若い成年人骨と考えられる。

計測・観察結果

主な計測値を比較群と共に表1、2に示す。また、北部九州・山口地方の現代人を基準とした偏差折線を図1に示した。

脳頭蓋： 頭長は現代人と変わらないが、頭幅が表1に取り上げた比較群中では最も広く、そのため、頭長幅示数は79.2と、中頭型の上限に近い値を取る。なお、この頭幅の大きさに関しては、その前、後部で傾向を異にし、例えば最小前頭幅は89mmで、強度の長頭で知られる材木座中世人（90.5mm：鈴木、1956）に較べても下回っており、上面観において、いわゆる Rhomboides（類菱形）に近い外観を呈している（図版参照）。また頭高はやや低く、頭幅の大きさと

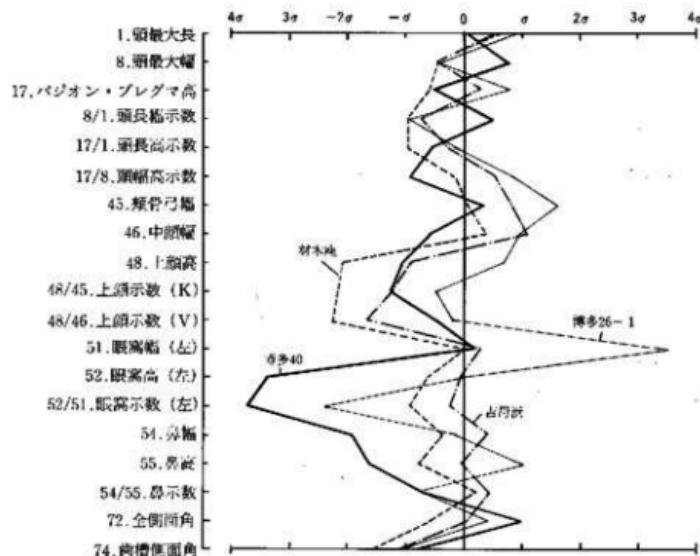


図1 現代人を基準とした偏差折線

第1表 主要頭蓋計測値の比較（女性）

	博多 (中世)	博多 ¹⁾ (中世)	古母浜 ²⁾ (中世)	材木座 ³⁾ (中世)	中部 九州 ⁴⁾ (中世)	天福 ⁵⁾ (近世)	西南日本 (現代)			
	40	26-1	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	173	178	26	176.4	62	177.9	14	179.6	38	174.7
8 頭蓋最大幅	137	132	26	132.0	60	131.8	11	130.6	38	133.5
17 Ba-Br 高	129	(135)	25	133.0	42	128.8	8	131.5	35	132.7
8/1 頭長幅示数	79.2	74.2	26	74.9	57	74.2	10	72.0	38	76.5
17/1 頭長高示数	74.6	75.8	25	75.4	40	73.4	8	73.9	35	76.1
17/8 頭幅高示数	94.2	102.3	25	100.7	40	97.6	6	101.0	35	99.4
45 鼻骨弓幅	(126)	132	26	128.3	33	124.6	1	124.0	30	126.5
46 中顎幅	91	98	27	98.6	32	95.4	7	94.0	25	95.5
47 脣高	-	114	18	111.5	16	105.1	8	108.0	15	115.9
48 上顎高	65	71	19	65.5	40	61.6	10	61.3	22	68.8
48/45 上顎示数 (K)	51.6	53.8	22	51.6	31	48.9	1	50.0	22	54.3
48/46 上顎示数 (V)	71.4	72.4	22	66.5	29	64.1	6	65.3	22	71.8
51 眼窩幅 (左)	41	46	25	41.1	36	40.7	5	40.0	30	40.5
52 眼窩高 (左)	28	34	25	33.9	33	32.9	6	34.0	30	34.3
52/51 眼窓示数 (左)	68.3	73.9	26	82.7	33	79.9	5	84.0	29	84.8
54 鼻幅	22	25	25	25.9	34	24.6	12	25.4	26	25.3
55 鼻高	45	51	25	48.6	34	46.9	11	47.4	28	49.9
54/55 鼻示数	48.9	49.0	25	53.5	32	52.7	11	54.3	26	51.0
72 全側面角	86	84	22	82.8	31	81.1	8	81.0	18	82.5
74 齒槽側面角	63	62	22	61.8	30	59.1	8	57.3	17	65.0

1) 中橋 (1989), 2) 中橋・永井 (1985), 3) 鈴木 (1956), 4) 佐藤 (1986), 5) 中橋 (1987)

相まって、頭幅高示数の小ささ（94.2）が目だつ。

顎面頭蓋：全体的にそのサイズが小さい。図1にも示したように、現代人に較べて頬骨弓幅で僅かに上回るのみで、他の高、幅径はかなり下回るものが多い。

まず上顎高は、一応、材木座や中部九州中世人（佐熊、1986）に近いが、当地の現代人や天福寺江戸時代人（中橋、1987）はもとより、13世紀の、同じ博多の女性人骨（博多26-1号：中橋、1989）に較べても著しく低い。頬骨弓幅は比較群と大差無いが、中顎幅はかなり狭く、Kollmann の上顎示数（51.6）は中上顎型(mesen)，Virchow の上顎示数（71.4）は低上顎型(chamaeoprosop)に入る。さらに高径では特に眼窓の低さが顕著で、その示数（68.3）は著しい低眼窓型を表している。鼻部でも、鼻幅が狭い点に加えて、鼻高値も比較群を大きく下回り、その示数で見る限りは中鼻型を取るもの、梨状孔の小ささと、上顎高に比しての鼻高値の低さが目だつ。鼻根部（表2）はかなり平坦であるが、その弯曲示数（86.8）で見ると、当地の弥生人（中橋・他、1985）や中世人、あるいは吉母浜中世人よりやや弯曲が強い。また、上顎部には、かなり強度の歯槽性突顎が見られる。なお、前頭骨の頬骨突起、頬骨の前頭突起は共に比較的頑丈で、側頭窩も深く、側頭筋等の発達が現代人に比べてかなり良好であったことを窺わせる。

第2表 鼻根部計測値の比較（女性）

	博多 (中世)	博多 (中世)	博多 築港線 (中世)	吉母浜 (中世)	天福寺 (近世)	金環 ¹⁾ (弥生)	西南日本 (現代)
	40	26.1		N M N M N M N M			
50 前眼窓間幅	16.5	17	16	25 17.8 31 16.7 25 18.1 57 16.8			
F 鼻根横弧長	19	18	18	25 19.8 30 19.5 23 19.7 57 19.3			
50/F 鼻根弯曲示数	86.8 (94.4)	88.9 25 90.3 30 85.5 23 91.6 57 87.3					
57 鼻骨最小幅	8.5	6.3	7.7 24 7.7 30 7.2 24 7.8 57 7.0				

1) 中橋・他 (1985)

総括・考察

福岡市博多区における1988年度の発掘調査によって、11世紀所属の女性頭蓋が出土した。その形質的特徴は以下のように概括される。

- ・脳頭蓋では、頭幅が大きく、頭型としてはかなり短頭に傾くが、前頭部は狭い。頭高はやや低い。
- ・顔面部は、全体的にサイズが小さく、特に上顎高、眼窩高、鼻高等、高径は何れも低く、低顎傾向が明らかである。一方、頬骨弓幅、眼窩幅は他の中、近世人と大差無いが、中顎幅、鼻幅は狭い。鼻根はかなり平坦で、上顎部には強度の歯槽性突顎が認められる。

鈴木（1956）による鎌倉材座中世人の研究以後、わが国の中世に生きた人々が、地域によって程度の差はある、強度の長頭と低い顔面、扁平な鼻根部に強い歯槽性の突顎。さらには華奢な体部骨、低身長といった特徴を、かなり広範な時代特性として共有していることが明らか

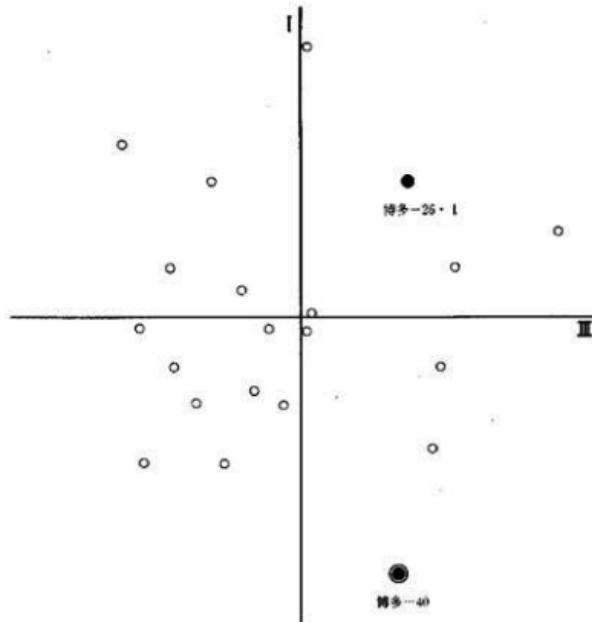


図2 顔面6項目による主成分分析（大福寺江戸時代人との比較）

にされている。中部九州地方でも、同傾向を示す中世人の存在が報告されており（内藤、1973；佐熊、1986），さらに山口県の吉母浜遺跡（中橋・永井、1985）からは、そうした特徴と同時に，中世人としてはやや高顎に傾く地域特性を併せ持つ人骨が出土している。

当人骨と同じ博多からも，これまでのところ僅かに3体ながら，吉母浜と同じ高顎性や長頭性，あるいは齒槽性突顎といった傾向を共有する中世人骨が得られていた（中橋・永井、1986, 1987；中橋、1989）。しかし，今回出土した平安時代所属の女性頭蓋は，そうした從来の資料とはかなり傾向を異にするようである。

例えば，図2は，同じ博多から出土した天福寺江戸時代人（中橋、1987）や中世人の顔面部計測値6項目について主成分分析を行った結果である。因子負荷量から，縦軸の第1主成分はサイズを，横軸の第3主成分は高顎性の程度をあらわしており，つまり上に行くほどサイズが大きく，左に行くほど高顎性が強いといった関係になっている訳だが，この中で当人骨は一番右下に位置している。つまり最も顔面のサイズが小さく，低顎性も強いということであるが，同地区的江戸時代人はもとより，13世紀所属の26-1号とも明らかに異なることが見て取れよう。それは図3に示した頭蓋9項目によるベンロースの形態距離からも窺われ，同じ博

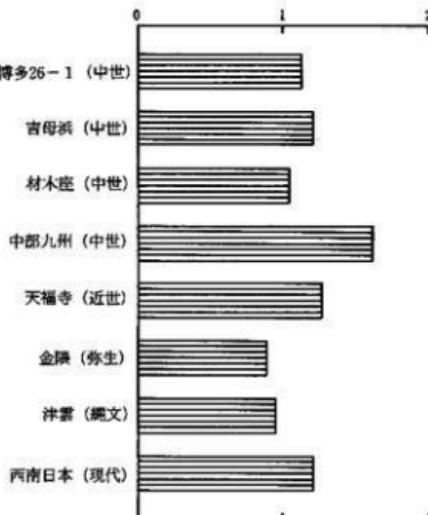


図3 博多40号からのベンロースの形態距離（頭蓋9項目）

多でも当人骨と後世のものとの間にはこれといった類似性が見いだし難い。

これまで博多から出土していた中、近世人は、上記のように例えば長頭性のような他地域の中世人にも共通する特徴と同時に、顔面が大きく、かなり高顎もあるといった形質を共有していた訳だが（中橋、1989）、当人骨にはそうした特徴が見られないということであり、低顎で顎が小さく、歯槽性突顎が強いという特徴だけみれば、むしろ非都市部の、例えば中部九州やあるいは鎌倉材木座のような中世人に近い特徴と言えよう。但し、その低顎の程度が材木座程ではなく、また、頭型が逆に短頭に傾くという点でそれらともやや異なっている訳である。

当人骨の所属する11世紀という時代は、この地に一応の街並みが形成された後、それがさらに拡張されつつあった時期と考えられている。但し、当人骨が出土した地点はその当時の市街区からは少し外れた位置（数十m程度）になるとのことであるが、ともあれ、後世の博多人の特徴が、例えば港町であり、商都でもあった博多という一つの小都市における生活が生み出したものと考えるならば、あるいはこの時期の住人にはまだそうした、いわゆる都市効果とでも言うべき影響が及んでいなかったのであろうか。しかしながら、もしそう考えるならば、当地域ではこれよりさらに遅い時期に既に強度の高顎性を持った人々の居住が明らかになっているので（中橋・他、1985）、そうした弥生以降の高顎形質とこの人骨とをどう結び付ければいいのかが問題となろう。それとも、これは単なる個体変異、あるいは他所からの混入者にすぎないのだろうか。

僅かに1体のみでの結果であり、勿論ここに見る傾向が当時の博多人の特徴をどこまで代表しているのかはまだ不明としなければならない。従って現状では、いずれとも確たる考察は困難であるが、こうした課題は、人の形質が変化するしくみ、つまり遺伝的要因や生活文化も含めた様々な環境要因によって人の形質がどう変化し得るのかという、人類学上の大きな課題に結び付く問題である。博多は街としての歴史が古く、また渡来人問題との関連で、地理的にも重要な位置にあり、人骨資料にも比較的恵まれているなど、こうした問題への考察を深めるには好適の地と言えよう。今後とも資料蓄積の努力が継続されていくことを期待したい。

（当人骨を研究する機会を与えて下さり、色々と御教示いただいた福岡市教育委員会の諸先生、諸士に深謝いたします。）

文 獻

清野謙次・宮本博人（1925）：「津雲貝塚人頭骨の人類学的研究」人類学雑誌43。

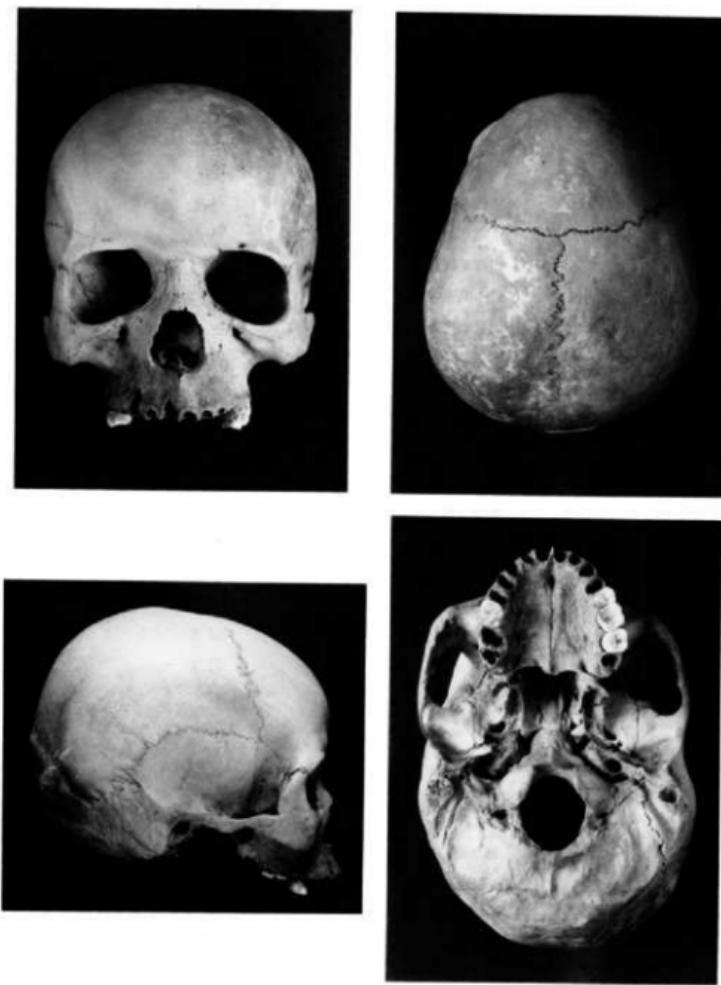
内藤芳篤（1973）：「尾窪一熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査」熊本県文化財調査報告第12集、熊本県教育委員会。

- 中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」人類学雑誌95。
- 中橋孝博（1989）：「博多遺跡群第26次調査・築港線関係第3次調査出土の中世人骨について」福岡市埋蔵文化財調査報告書第204、福岡市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨」吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文（1985）：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」史跡金隈遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書123、福岡市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文（1986）：「博多遺跡群第26次調査出土中世人骨」博多VI、福岡市埋蔵文化財調査報告書144、福岡市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文（1987）：「博多遺跡群第28次調査出土中世人骨」博多VII、福岡市埋蔵文化財調査報告書147、福岡市教育委員会。
- 佐熊正史（1986）：「中世九州人頭蓋の人類学的研究」長崎医学会雑誌61。
- 鈴木 尚（1956）：「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」岩波書店。

第3表 博多遺跡群第40次調査出土中世人骨の計測値

(mm・度)

博多遺跡群第40次 (女性)		
1	頭蓋最大長	173
8	頭蓋最大幅	137
17	Ba-Br 高	129
8 / 1	顎長幅示数	79.2
17 / 1	顎長高示数	74.6
17 / 8	顎幅高示数	94.2
5	頭蓋基底長	96
9	最小前頭幅	89
23	頭蓋水平周	499
24	横弧長	308
25	正中矢状弧長	373
40	顎長	100
43	上顎幅	100
44	両眼窓幅	94
45	頬骨弓幅	126
46	中顎幅	91
47	顎高	-
48	上顎高	65
48 / 45	上顎示数 (K)	51.6
48 / 46	上顎示数 (V)	71.4
51	眼窩幅 (左)	41
52	眼窩高 (左)	28
52 / 51	眼窩示数 (左)	68.3
54	鼻樁	22
55	鼻高	45
54 / 55	鼻示数	48.9
	Vertex Rad.	125
	Nasion Rad.	90
	Subsp. Rad.	90
	Prosth. Rad.	100
72	全側面角	86°
74	脣槽側面角	63°



図版1 博多遺跡群第40次調査出土中世人骨（女性、成年）

博 多 15

福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集

1990年（平成2年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 有限会社 松古堂印刷
